

二次元
ドリーム

2D DREAM MAGAZINE

cover illustration by 葵渚

成年向け雑誌

立ち読み版

新連載小説1
Lilithの大人気ゲームが小説化

対魔忍ユキカゼ
蒼井村正×竜胆

新連載小説2
「～ようです」シリーズ最新作

正義のヒロインと悪の女幹部が
生中継でポロリするようです
酒井仁×SAIPACo.

大好評連載&読み切り小説

きらら☆キララ
魔法少女ってたいへん!
さかき傘×浅沼克明

桜空×牡丹
千夜詠×カキコ
蒼井村正×葵渚

大人気えっちマンガ
&カラーマンガ

ぱふえ
琴慈/NO.ゴメス/の歯
e4/匿名ヒーロー

表紙&ピンナップテレホンカード
応募者全員サービス

特報

完全版
発売決定!

PCゲーム
魔法少女
沙枝

特別付録:ピンナップポスター
うるし原智志
葵渚/カガミ

今号の特集

アへ顔
Wピース
ダブル

vol.62 2012 02 DIGITAL EDITION

irenka

◆ KAGAMI VISUAL WORKS ◆
illustrations and design works by Kagami.

〈イレンカ|カガミビジュアルワークス〉

pick up

今年発売された『irenka / イレンカ カガミ
ビジュアルワークス』の中から、カガミ先生描
き下ろしの作品を厳選してご紹介！ ショート
ストーリーとともに楽しみください。



対魔忍アサギ外伝 学園淫獣編

絵・カガミ CGワークス・「三手」文・そのだまさき

潜入捜査

魔界奥深くにその勢力を誇っていた淫魔とよばれる一族が人間界へ侵食を開始した。巧みに人に擬態し、あるいは人を操って人の欲望と性的絶頂を糧に人を快楽地獄に墮落させながら勢力を拡大する淫魔たち。それら闇の住人と戦う者がいる。人魔外道の悪に対抗する乙女たち。

人は彼女らを「対魔忍」と呼んだ。

「ハアアアアッ!!」

八津紫が裂帛の気合いで巨大な斧を一閃させた。頭上から襲ってきた淫魔が両断される。

「て、やあっ!!」

井河さくらが、両手の小太刀を素早く振るった。左右から迫る淫魔二匹の首がはね飛ばされる。

だが、それだけだ。真つ二つになった淫魔はフィルムを逆回転させるようにくつついて立ち上がる。首だけになった淫魔も、別の淫魔がそれを元の場所に戻すと、平然と彼女らを追いかけてくる。

「くっ、どうなってるんだ!」

「やっぱりこれじゃ、どうしようもないよ!」

紫とさくらが悔しそうに叫ぶ。

「こんな奴らに構ってたらキリがないわ! とにかかくここは撤退するわ! はあああああッ!!!」

井河アサギ、最強の対魔忍が忍者刀を乱舞させた。数匹の淫魔が瞬時に肉片と化したのが、そのバラバラ

になった肉塊が寄り集まっていく。また再生しようとしている。

「くっ……」

アサギは後ろの二人に気づかれないように唇を強く噛みしめた。

(ただの魔物じゃない。こんなのがいるなんて、誰かが操ってるみたいだけど、いったい何者!!)

アサギの中で嫌な予感が膨れあがっていく。

簡単な任務のはずだった。彼女が教える五車学園の二人の生徒、対魔忍の次期主力筆頭である紫とアサギの妹で単細胞を直せば化けるであろうさくら。いずれ対魔忍として独り立ちする彼女らに実戦の空気を感ぜさせるだけの任務。

だが、たどり着いたその学園はアサギすら初めて出会う正体不明の化け物の巣だった。

淫魔たちに一太刀で致命傷を与えられる彼女らの対魔の力が通じない。いや、正確には殺しても殺しても再生してしまう。まるで最初から死んでいるかのように。だが、感じるのは紛れもなく生き物の気配である。それが恐ろしい。

(私だけならどうにでもなる。でも、この半人前の二人を連れて私はどうしたらいい?)

アサギらしからぬ逡巡。対魔忍としてではなく、教師としての迷い。それが心の空白を産んだ。

「お姉ちゃん! こつちの方が手薄だよ!!」

「アサギ様、早くこちらにっ!!」

「えっ!? 駄目二人ともっ! それは異っ!!」

アサギがハッと気がついた時にはもう遅かった。淫魔たちを操っている誰かが仕掛けた呪縛の魔法陣が二人を中心に発動する。

「な、なにこれえっ!!」

「くううっ、う、動けないっ!!」

床に赤く輝く魔法陣の中で、さくらと紫が不可視の糸に絡め取られたように硬直している。

「やっと思ひ込んだ鼠がかかったようだね。おや、まだ一匹残っているな」

今の今までなんの気配もしなかった背後から男の声がした。

「くっ……忍法・殺陣華っ!!」

自分に存在すら気づかせない相手、アサギは躊躇うことなく彼女の最強の忍法を仕掛けた。

数百の影が舞い、男は紙吹雪のように切り裂かれて絶命する——はずだった。

「なっ!! ま、まさか私の術が……!!」

「お、お姉ちゃんっ!!」

「そんな、アサギ様が失敗した!」

殺陣華は発動しなかった。それどころか、アサギ自身も動けなくなっていた。アサギの内にひそむ対魔の力そのものが呪縛されていたのだ。

「私の結界の中で魔法、いや忍法だったかな? そんなものを使えるはずがないだろう? しかし、己の遺伝子に魔を刻み込んでいるとは面白いな」

片目にモノクル、シルクハットにインパネスコートを着飾った男が現れた。魔術師だ。

「何者だ!? いつ私に術をかけたっ!」

「おやおや、気づいていなかったのかね? この建物自体が私の結界に包まれているのだよ」

「なっ!! そんなことが……くっ、不覚っ」

「なに、新しい人形のヒントをくれたお札に殺さないであげるよ。意味もないしね」

「意味がないだと、貴様ああっ!!」

—— 犯される三人 ——

「さて、私は実験の続きをするのでね、君たちの相手はこれに任すよ。失敗作の人形だ。不死なのはいいが、結界の中しかもたなくてね」

「待てっつ！ 貴様、名を名乗れっつ！！」

だが、魔術師はアサギたちなど虫けらほどにも気にしていない様子で去っていった。

そして、魔術師が失敗作の人形と呼んだ、かつては人間だった生徒たちが欲望にとりつかれた化物物として迫ってきた。

「こんな訳もわからないまま、犯されるなんて！」

「お、お姉ちゃん！ こんなやつでないよおつ！！」

「アサギ様とこんな目にあうなんて、イヤッ、イヤアアアッ！！」

「わ、私が油断したせいだ……くっつ」

まだ未熟な二人が絶望の悲鳴を上げる。だが、アサギはなにもできない。あまりの悔しさに嘔みしめた唇が切れて血が流れた。

その姿に欲望をかき立てられた男の一人がアサギの髪をむんずと掴み、顎に手を当てた。

「んごっ、お、おとおおとおおおつ！！」

男の手がアサギの口を無理矢理に広げ、そこに屹立した肉棒がねじ込まれる。

「んげぼおとおおとおおとおおおつ！！」

口腔を肉棒で埋め尽くされ、強烈な性臭が鼻に突き上げた。かつて敵によって性感改造を施された身体がなすすべもなく刺激される。

「ぶぢゅぶうっ、ンブッ、ヂュッ、ぢゅるっ……んううう、ブヂュブヂュぢゅるっ」

気がつけば、アサギは男のペニスを啜え込み、舌

を使い、音を立ててそれを吸っていた。

「ああ、アサギ様が、あんな穢らわしいものを口に……で、でもなんてイヤらしい顔なの……」

憧れの対魔忍から雌犬へと顔を変えたアサギを見て、紫が状況を忘れて淫猥な表情を浮かべた。

その雌の匂いに誘われ、別の男が紫の身体を押しさえつける。

「なっ!? なにをするつもりっ!? お前ら、私の身体はアサギ様だけのものっ……やあつ、やめろっ、汚いものを近づけるなっ！」

紫は必死に逃れようとしたが、男は容赦なく濡れてもいない膣穴に肉棒を突き刺した。

「ふっ、ぐ！ つぐう！ うううううっ、いやあつ、犯されてるっ、私、犯されて、ぐぐぐう」

紫が苦痛と嫌悪に身をよじる。だが、彼女への責めは膣穴だけに止まらなかった。

「ひっ!? う、嘘っ！ やめろっ、そこはお尻っ、お尻なんて犯すなっ、やめろおおおつ！！」

紫は半狂乱になって喚いたが、固く閉じた菊門は肉棒によって無理矢理押し広げられた。

「んぎいいいいっ、い、痛い、お尻い、抜けええっ、こ、殺してやるっ、お前らあああつ！！」

立て続けに前と後ろの穴に挿入され、紫は全身をガクンガクンと痙攣させていた。

「お姉ちゃんっ、ムッチャあんっ！ ど、どうして、こんなことになっちゃったのおつ！！」

アサギと紫、二人が無残に犯される姿に、さくらは涙を流しながら喘いでいた。

もちろん、そのさくらの身体もすでに穢されていく。さくらは男に抱えられ、肉棒で膣奥をゴツゴツと上に抉られていた。

「んひっ、いいっ、だめえっ、奥そんなんっ、挟らないでええっ、私、おかしくなっちゃう、からあ」

かつて陵辱されたことのあるさくらは雌の快楽には堪えられず、膣穴からはジュブジュブと愛液が溢れ出た。

「ハッ、ヒイ、さくら、犯されて……ンンウッ、犯されて……ううっ、感じてののか？」

「ゴメンね、ムッチャんっ、はあはあ、わたし駄目なおつ、オ●ンコ挟られるとっ、気持ちイイの我慢できないのっ、あっああああつ！！」

「私もっこれっ、おおっ、オ●ンコと、お尻、犯されるのっ、んふおっ、良くなってるう、だつてアサギ様も、あんなに感じてるからあ」

さくらと紫が互いに視線を交わしあう。彼女らが尊敬するアサギは誰よりも淫らにより、肉棒の快楽の虜となっていた。

「おおいッ、チ●ポ気持ちいいっ、イクの止まらないっ、おおいグイグイグッ、オマンコすごいグウウウウウウッ！！」

「お姉ちゃん、私もイクよっ、我慢するのやめるよっ、イクから、オ●ンコイクからっ、ああっイク、イクッ、ヒグウウウウッ！！」

「アサギ様わたひもおつ、アサギ様と一緒にイキまひゅうう、イキますイキます、ひひゃあああ！」

人魔外道の悪に対抗する乙女たち、彼女らはすでに欲望の虜であった。

私たちの汚濁汁に心も体も穢されていくアサギ、さくら、紫の三人がこの先どんな運命をたどるのか、それは誰も知らなかった。



対魔忍
ユキカゼ
TAIMANIN YUKIKAZE
対魔忍魔調教に堕つ



対魔忍シリーズ最新作が早くも小説化！
媚肉を疼かせる奴隷娼婦
調教が幕を開ける

第1話 魔液、塗布

小説 NOVEL
あおいむらまさ
蒼井村正
原作 ORIGINAL
Lilith

挿絵 ILLUSTRATION
りんどう
竜胆

心地良い風が草原を揺らし、赤いリボンで細いツインテールにまとめられた少女の髪をなびかせながら吹き抜けてゆく。

健康的に日焼けした、気の強そうな顔立ちをした少女であった。制服に包まれた小柄な肢体は、細く、華奢で、女性的なメリハリには乏しいものの、活発な子猫を思わせる躍動感に溢れている。

「達郎……あ、あのね、私……」

普段の勝ち気で快活な態度が嘘のようにモジモジしながら、少女、水城ゆきかぜは、目の前にたたずむ少年に声をかけた。

「私、次の任務の前にね、達郎に……。達郎とッ！……あうう……」

恥じらいに耳まで真っ赤になって俯いていた小柄な身体が、優しく抱擁される。

「ふぁあ！ たつろお……」

小柄で細身な身体を、幼なじみの腕にスッポリと包み込まれたゆきかぜは、驚きと喜びに目を見開き、小麦色に日焼けした頬をさらに紅潮させる。

（意外と……たくましいんだ……）

華奢な肢体をぎこちなく抱き締めてくる腕に、緊張に強ばった身を委ねながら、ゆきかぜは思う。

ささやかなバストの内側で鼓動している心臓が、抱擁された興奮と喜びで高鳴り、スリムに引き締まった下腹の奥で、無垢の子宮が、キュンッ！と疼いた。

（言わなきゃ！ 今、言わないと、一生後悔しちゃう！ 言うんだ！ 勇気を出せ、私ッ！）

意を決した対魔忍の少女は、顔を上げ、至近距離で達郎の顔を見つめて口を開く。

「あつ、あのね……私、任務の前に……」

「何も言わなくていいよ、ゆきかぜ……」

「あふ、んむっ！」
勇気を振り絞った告白の途中で唇を奪われた。

（キス、されてる!? 達郎が、私にキス、してるよお！ なんてこのタイミングで……達郎、最後まで言わせてよッ！）

「んふ……ふむううう……ンッ！」

少女のくぐもった呻きは、密着した唇に吸い取られ、歓喜と戸惑いの入り交じった身じろぎも、細い肢体を抱き締めた腕に封じられる。

（お願い、達郎。男の子だったら、このまま優しくリードして！……私のバージン、あげちゃうから！ だから……お願い）

胸の内では叫ぶが、少女の身体を抱き締めた腕と、密着した唇は、それ以上の行為を仕掛けてこない。

（だつて、今、奪ってくれないと、私、他の誰かに……バージン、散らされちゃうんだよ……）

少女の身体の奥底から、どんなに不利な戦闘でも感じたことのない恐怖の感情がこみ上げてきて、小さな胸が痛む。

達郎には詳しい任務内容は知らせていないが、ゆきかぜは、近日中に、とある場所へと潜入する。

赴く場所は、背徳と快楽の支配する地下の魔界都市、ヨミハラ。

東京の地下深くに作られたその街は、政府の権力はもちろん、対魔忍の力も及ばぬ無法地帯であり、ヨミハラに居る女は、全てが奴隷か娼婦なのだ。したがって、ゆきかぜも任務とはいえ、見知らぬ男に肌を許す娼婦に成りすまして、潜入捜査を行うことになっている。

対魔忍たちの間では、「纏まとの任務」と呼ばれる、危険で、そして過酷な任務であった。

潜入の目的は、任務中に行方不明になったゆきかぜの母、不知火を発見、救出すること。

ゆきかぜにとつては、いかなる代償を払うことになつても成し遂げねばならぬ悲願であった。（達郎、お願いだよ、私を犯して！ バージン、奪

つてもいいよ……）

このまま押し倒し、身体をまさぐつて、処女を奪つて欲しい……そんな、はしたない衝動がこみ上げてきて、恋する対魔忍のスレンダーボディを熱く火照らせる。

対魔忍となつたその日から、捕らえられ、辱められても、任務を全うするために断固として耐え抜く心構えや覚悟は、苛烈な訓練の中で嫌という程叩き込まれてきた。

だが、それでも彼女もまだうら若き娘、恋もするし、願わくば、処女を捧げる相手は両思いの恋人でありたいと願っている。

今、この瞬間が、その想いを遂げる最後のチャンスに違いないのだ。

「んふぁ、たつろおがしてくれないなら、私が……やつちゃうんだからねッ！」

焦れたゆきかぜは、優しすぎるキスを振りほどき、細くたおやかな指を蠢かせて少年の股間をまさぐるうとするが、抱き締められた少女の身体はピクリとも動かせない。

「達郎、手を放して！ 私、達郎とエッチ、したいのお！ そうじゃないと、私は……！」

秘めていた想いを口走りながら、達郎の腕の中で身悶えるゆきかぜ。

「……ゆきかぜ！ ……おい、ゆきかぜッ！」

少女の鼓膜を、誰かの呼びかける声が震わせた瞬間、頭の芯がビリッ！と痺れるような感触とともに、意識が反転する。

「ンッ……あ、ハッ！ あ、あれっ？ たつろお……？ わっ!? りつ、凜凛先輩、私、寝ちゃつてました？」

甘美で切ない夢から覚めた対魔忍の少女は、寝ぼけた目で周囲を見回した後、ハッ！ と我に返って、彼女を目覚めさせた声の主に呼びかける。

「ふふっ……達郎……か。いい夢を見てるところを起こしてしまつてすまなかつたな」

口元に小さな笑みを浮かべ、強い光をたたえた目で、ゆきかぜを見つめている女性の名は、秋山凜子。夢の中でキスを交わしていた達郎の姉で、ゆきかぜとともに纏の任務に就いた対魔忍だ。

幼いころから姉妹同然に育ち、対魔忍としての修練を積み、幾多の任務とともに完遂させてきた、ゆきかぜにとつては肉親同様の存在である。

「そろそろ始まるようだから……あのゲスに起こされるよりはマシだろう?」

「ええ。ありがとうございます……」

先輩対魔忍の少女に礼を言つたゆきかぜは、忌々しげな視線を、前方に立つ人影に送る。

勝ち気な猫を連想させる、クリッと大きな目が見つめる先には、でっぷりと太つた大柄な中年男が立っていた。

奴隷娼婦の契約を結んだゆきかぜと凜子が働くことになる娼館、「アンダーエデン」の主で、名はリーアル。

ヨミハラでも屈指の実力者で、魔界の住人たちと通じているらしい。

(夢の中だけでも、もうちよつとだけ、達郎に抱かれていたかつたな……。いや、もうそんな甘い考えは捨てなきゃ!)

強い瞬きを繰り返して、甘い夢の名残を振り払つたゆきかぜは、これから彼女と凜子の身を襲う恥辱の試練に耐え抜く決意を新たにする。

(どんなに辱められても……この任務だけは、絶対に成功させなきゃいけないんだ。お母さん、必ず見つけ出して、助けるからね!)

任務中に消息を絶つたゆきかぜの母、不知火を発見、救出するという密命を帯び、先輩対魔忍の凜子とともにヨミハラに潜入し、奴隷娼婦の契約を結ん

だゆきかぜたちを待つていたのは、訓練と称する快楽調教であった。

今、二人の対魔忍は、奇怪な装置に手足をスッポリと啜え込まれ、前のめりの体勢で磔にされたような姿勢で拘束されている。

身にまとつているのは、対魔忍のコスチュームを模して作られた特製の衣装だ。

外見は寸分違わないが、強度は著しく低く、防弾力皆無の、コスプレ衣装のようなものである。

この姿で調教を施し、それを撮影することで、ゆきかぜと凜子の対魔忍としての誇りも汚し、陵辱風景を記録した映像の商品価値を上げようという、リーアルの邪悪に歪んだ意図が見え見えた。

磔状態の二人は、コスチュームの胸と股間部分を破り取られ、乳房と生殖器を露出させられている。

ゆきかぜの、小皿を伏せたようなささやかなバストの膨らみと、小玉スイカサイズの凜子の爆乳がコスチュームの破れ目からはみ出し、羞恥と屈辱に震えていた。

「おはよう、対魔忍ども……。いや、今は奴隷娼婦見習いだな。よく眠れたかね?」

二人の少女を淫獄に突き落とした男は、脂ぎつた顔に邪悪な笑みを浮かべて歩み寄ってくる。

表情筋は笑み崩れてはいるが、目だけはまったく笑っていない。ギョロリと大きな三白眼は、囚われの対魔忍を冷たく無表情に映し出していた。

「リーアル、飽きもせずにもた見に来たか」

刃物のような殺気を含んだ視線で、娼館の主を射貫きながら、凜子が固い声で問いかける。

「ご主人様、どう? まあいい、奴隷娼婦としての調教が終わるころには、ちゃんとした礼儀作法も身につけていることだろう」

「さて、それはどうかな? 対魔忍をあまり甘くない方がいい」

口元に不敵な笑みを浮かべ、磔にされた凜子は言い返す。

「そうよ。対魔忍の心を折ることなんて、誰にもできないんだから!」

ゆきかぜも、ここぞとばかりに勝ち気な声を上げて、反抗の意思がまだ萎えていないことを示す。

「お前たちこそ、奴隷娼婦になるための訓練を甘くない方がいいぞ。何せ、魔界の技術がふんだんに使われている。どんな女も、これに抗うことはできないのだから」

対魔忍の挑発にもまったく動じることなく、リーアルは自信たつぷりに宣言する。

「さて、訓練開始前に、刻印の定着具合を確認しておこう。お前たち、舌を出せ」

「出せばいいんでしょ、んべええーッ!」

「見せてやるさ、べーッッ!」

やけくそのように突き出されたゆきかぜと凜子の舌には、幾何学紋様のような刻印がくつきりと浮き出していた。

それが、奴隷娼婦となつた契約の証。魔界の技術を応用して作り出されたキメラ微生体によつて刻印された紋様は、誰の目にも明らかで奴隷娼婦の印であると同時に、逃亡と反抗を封じる枷として機能している。

もし、あからさまな反抗や逃亡を企てれば、体内に浸透したキメラ微生体は生体爆薬に変じ、犯行者の手足を内部から吹き飛ばす。

任務のためとはいえ、あまりにも重いハンデを背負つての潜入捜査であつた。

「ふむ、二人とも、いい具合に定着しているな。……よからう。今日の訓練を始める!」

満足げに頷いたリーアルは、彼の背後で忙しく準備を進めていた白衣の集団に声をかける。

拘束された二人の対魔忍に、白衣の集団が無言で

迫ってきた。

「ああ、また始まつちゃう……いつばい、いつばい辱められて、イカされちゃうんだ……」

細く引き締まった肢体を強ばらせ、身体の奥底からこみ上げてくる絶望感と、妖しい炎のような欲情を抑え込むゆきかぜ。

それまで、絶頂を知らなかった彼女の肉体を襲った女悦は、夢見る少女の甘い幻想を粉碎し、対魔忍としてのプライドのみならず、人の尊厳さえも打ちのめしていた。

「ンッ……くふううん……っ」

喉奥で小さく呻いた少女の身体は、既に女悦の反応を見せ始めている。

小振りなバストの先端で、透明感のあるピンク色の乳首がツン、と尖り物ち、秘裂の奥が淫熱を強めて、恥液の分泌量を増す。

「達郎……ゴメンね。私の身体、凄くエッチになっちゃった。また、はしたない声上げて、いつばいいイカされちゃうけど、達郎のことは絶対に忘れないから！ だから、達郎も私を嫌いにならないで……お願い！」

黒いタールのような絶望に塗りつぶされそうになる胸の内で祈る少女の身体に、男たちの手が触れてくる。

「ひやう！ あんっ……ああああんっ！」

恥辱と肉の疼きにひたすら耐え続ける試練の時間が、また始まるのだ。

……ぬちゅ、ぬちゅ、くちゅ、くちゅ、ぶちゅ、じゅぶつ、くちゅるっ……。

「ひやう……くふううう……やああ……あああつつ、はあああ……ひやんっ……だめええ！ そこお、もう、触るなあ……やあああん……」

「うううう……ッ、ゆつ、ゆきかぜ……耐えろ！ はああ……身体の疼きに呑み込まれるな……あひいいいっ、あはああうう……ッ」

粘ついた音と、二人の少女が上げる悩まげな声が延々と響き続けている。

奴隷娼婦の契約を結んだゆきかぜと凜子に対して課せられた最初の訓練が、拘束状態での媚薬ローション塗布であった。

一週間という期限付きで始められた訓練は、ようやく半ばを過ぎ、四日目に突入していた。

白衣に身を包んだ魔界医師たちは、劇薬に相当する、魔界の媚薬成分を含んだ透明なローションを手に取り、私語一つ交わすことなく、二人の身体に淡々と塗り込んでゆく。

「ううううっ！ くふう、ひやう！ んんんんうううッ……もう……やめれえええ！」

「んひうっ！ くつ……この程度で……はう……あひいいい……んくうううんんんッ！」

ゆきかぜと凜子は、嬌声を堪えて歯を食いしばり、硬直した肢体をわななかせて、こみ上げてくる妖悦に抗っている。

対魔装束を模した極薄コスチュームは、大量に塗り込まれた媚薬ローションに濡れて素肌にピッチリと張り付き、しなやかに鍛え上げられたくノ一少女たちのボディラインをくつきりと浮き出させていた。コスチュームに浮き出た精悍な筋肉と、繊細な骨格の輪郭を、ぬめった指が執拗に撫で擦り、引き締まった腹部に粘液を塗り込み、へその窪みをコスチューム越しに掘り返す。

ヌルヌルになった対魔忍の肢体を這い回る魔界医師たちの指には、欲情や、女体に対する性的興味の欠片も感じられない。

まるで機械のように単調に、拘束された肉体に媚薬成分のたつぷりと含まれたローションを均一に塗

り拡げ、全身を性感帯と化す魔粘液を、柔肌の奥深くにまで浸透させてゆく。

「ゆつ、ゆきかぜ！ 耐えろ……心を空にすれば……いかなる快楽も苦痛も……たつ、耐えられるぞッ！」

細く華奢な肢体を隣で悶え狂わせている後輩対魔忍に、凜子は叱咤の声をかける。

「ふあ……ふあああ……がっ、ガマンしようと思ってるけど……でも……んひあああ！ そつ、そんなトコまで触るなあ！ お尻っ、お尻ダメえええ！ イクッ、イッちゃうっ、やああああん、イッちゃううううう……ッ!!」

甲高いアクメの絶叫を上げながら、ゆきかぜのスレンダーボディが伸び上がりつつ硬直する。

「くう……ゆきかぜ……堪えきれなかったか」

この訓練が開始されたばかりのころと比べると、絶頂させられてしまうまでの時間が明らかに短くなっているのが気がかりであった。

「こんな訓練が、あと三日も続いたら……私とゆきかぜは……」

不安に苛まれる凜子の身体にも、執拗なローション塗布が続いている。

「んふあ……いつもいつも胸ばかり……そんなに……くふうう、熱いっ……ローションが染み込んで……胸が……燃えて……うううううっ！ くあ、はうううううううッ！」

過剰なまでの量感を誇示して突き出た左右の爆乳を、二人がかりで撫で回された凜子は、拘束ボディを悶えくねらせた。

後輩対魔忍を気遣う心の余裕が一瞬で消し飛び、意識が肉悦に埋め尽くされる。

ぬちゅ、ぬちゅ、くちゅ、ぬちゅる……。

かすかな粘着音を立てながら、四本の手が、たわ

わな果肉に媚毒を擦り込み、扱き上げて、ただでさえ敏感な乙女のバストを、快楽の詰まった柔肉の果実へと変貌させた。

メロンを二つ並べたような爆乳が、ローションにまみれ、天井の明かりをヌラリ、と照り返す。

「くはあああう、んんんんっ……うふううう……あひつ……おっぱい、もお……はあう……んはああアツ、ひあ、くふううう……はあんっ！」

悩ましげな声を上げて身じろぎするたびに、張り詰めたバストがプルプルと揺れ弾むが、乳肌を這う医師たちの指は、拘束女性の身悶えに追従して、一瞬たりとも離れようとしなない。

手術用手袋に包まれた指は、柔らかな果肉との間に、薄いローションの皮膜を挟み、量感豊かな乳房の曲面に沿って、無慈悲に、そして正確無比に塗布行為を続けていた。

ぬりゅっ……ぬちや……ぬちや、ぬちや、くちゅ……じゅぶるるっ……ぬちゅるるるっ……ちゅぽっ……にちゅっ……

触れるか触れないかの微妙な距離を保ったままの指の腹が、見事に突出した砲弾型の乳房全体に、魔界の媚薬を溶かし込んだ粘液を塗り込み、肉の奥の奥まで、妖しい火照りを浸透させてゆく。

「んあああ、はああ、ローションの……におい……汗と混じって……いやらしい……私の身体、いやらしい匂いにされていく……うううううッ！」

上昇した体温で蒸発したローションは、噴き出た汗と混じり合い、何とも表現しようのない淫靡な香りをムワツ、と立ちのぼらせている。

香り立つた魔香は、乳辱に耐えている凜子の鼻孔に侵入して、嗅覚の側からも少女の欲情を刺激し、さらなる悶えを強要した。

「うううう……くううう、こっ、こんなもので……負けては……ならんっ、この程度のこと……対

魔忍の誇りは……くううううううっ！」

色っぽい喘ぎの合間に、自分に暗示をかけるかのように、言葉紡ぎ出す凜子であったが、数日にわたって塗り込まれた媚薬で感度を増した肉体は、乳房周辺へのローション塗布だけで、早くも絶頂寸前まで追い詰められている。

「くうううんっ……やああ、おっぱい……ダメええ……そこっ、やつ、ダメダメだめええ！ オーンコとおっぱい、同時にされるの嫌なお!!」

甘く震えたゆきかぜの音が隣から聞こえてくるが、彼女を励ます余裕は、凜子には既になかった。

この訓練が始まったときは、互いに叱咤し合い、支え合ってきたが、訓練が進み、全身が性感帯化してしまっただけの状況では、全身全霊を費やさねば、肉体の奥底から湧き上がってくる快感のマグマを押し込め込むことができないのだ。

（耐えるッ！ たどえ、最終的には絶頂させられてしまおうとしても、ただ、流されてゆくよりはマシンなはず……媚薬に対する免疫も……いずれは獲得できるかもしれない……）

乳肌を、太腿を、引き締まった腹部を這い回る指がもたらす搔痒快感に震えながら、凜子は思う。

凜子もゆきかぜも、並の女ではない。人の限界を超えて心身を鍛え上げた対魔忍なのだ。

常人なら抗えぬ媚薬にも、耐性を持つことが、あるいは可能なのではないか？ そんな、かすかな希望にすがって、対魔忍の少女たちは恥辱のローション塗布に耐え続けている。

ぬちや、ぬちや、ぬちや、ぬちゅ、ぐちゅ、ぬちゅ、じゅぶつ、くちゅっ……

凜子の思惑と無関係に、媚薬粘液の塗り込みは延々と続く。

「はう！ んふうううう、はあう……あんっ！ あふっ……くうううう……んんんんッ！」

発情し火照った柔肌に、淡々と塗りつけられてゆくローションの粘音と、甘くかすかれた凜子の喘ぎが混じって室内に響く。

粘液にぬめ光るミルク色の乳肌は、充血度を増して今にもはち切れてしまいそうに張り詰め、破り取られたコスチュームの胸元からムニユリとまろび出て震えている。

量感たっぷりで、色白な乳肌にローションを存分に塗り込んだ医師たちの指は、その頂点でピンツ！と尖り勃った乳頭の周囲を這い始めた。

「ひう！ んふううう……んふあ、く……ううううう……んふううう……っ」

乳肌摩擦の快感を大幅に上回る悦波に襲われた凜子は、色白な美貌を強ばらせ、歯を食いしばって嬌声を堪えている。

宙を睨んで細められた目尻に、汗と混じり合った喜悅の涙がきらめき、引き結ばれた唇の端からは涎が止めどなく溢れ出して頬を伝っているが、それを気にする余裕など、今の彼女にはない。

ヌルリ、ヌルリ、ヌルリ……ぬりゅっ……

勃起乳頭の基部で、ふつくらと盛り上がった淡いピンク色の乳輪を、ローションまみれの指の腹が、緩やかな円を描いて何度も旋回する。

乳首には決して触れず、パン焼き職人が、生地が発酵具合を確認するかのような優しい指使いで、乳輪だけが執拗に撫で揉まれた。

乳頭の根本をなぞり回す指がもたらすくすぐったい感触は、ゾクゾクするような妖しい悦波に変じり、勃起乳首の芯を疼かせ、凛々しく整った対魔忍の美貌を切なげに歪ませる。

「ううううう……くう……今日は……特に念入りだな……んんんんっ、はうっ！ くふうう……」

飛びそうになる理性を繋ぎ止めようと、挑発の声を投げかけても、魔界医師たちは何のリアクション

も返してこない。

魔界医師たちの指は、一周におよそ五秒という機械的な正確さを維持しつつ、ジンジンと疼き勃った乳頭の周りを、何十回も滑り這う。

飢えたナメクジが餌を食みつつ這うようなその動きは、あくまでも事務的で、女体に対する卑猥な意思や感情は一切感じられない。それ故に不気味で、無慈悲で、そして執拗だった。

「いつだ？ いつ、この指は乳首を責めてくる？
いつ……いつたい、いつ……？」

危機感とともに胸の奥から湧き起こってくる妖しい期待を必死にねじ伏せながら、凜子は乳輪を這う指の動きを、息を吞んで見つめ続けている。

（あああ……来る……乳首に……あの指が……来る
ッ……ま、まだなのか？ ああああ……）

その瞬間は、唐突にやってきた。

乳輪への塗布を終えた指が、新たなローションをまとわせて、勃起乳首をそつと摘む。

それは、熟れた木イチゴを潰さぬように摘む程度の、繊細で、優しい圧力であったが、これまでとは比べものにならない快感の稲妻が勃起乳首を貫き、豊乳をわななかせ、全ての神経を痛打しながら駆け抜けた。

「はひひひひひッ！ うあ、あつあつアツ、くうううううう……んんんんんッ！！」

敏感な突起を左右同時に摘まれた凜子は、拘束された肉体を弓なりに仰け反らせ、砲弾型に突出した乳房をめいっばい突き出して、壮絶な乳首快感に狂乱する。

ぬち……ぬち……ぬち……ぬちゅっ……ぶちゅ……ぶちゅっ……ちゅくっ……ちゅむっ……

乱れ狂う対魔忍の痴態など興味ないかのように、魔界医師たちは生堅くこった乳頭をゆつくりとした動きで扱き上げ、乙女の敏感突起に媚薬ローションを擦り込んでゆく。

ンを擦り込んでゆく。

「んっんっんっんっ、くううううう……うあ、あつあつ、両方同時は……やっ、やめるお！ ひああう、感じすぎて、乳首ッ、頭……狂うっ！」

乳頭扱きの指に連動して、乳先を摘まれた爆乳がクンッ、クンッ、と突き出され、媚粘液に濡れた肉果が重々しく揺れ弾む。

凜子の左右に陣取った二人の魔界医師は、跳ね悶える乳房に手を添え、乳肉の過剰な揺動を抑え込みつつ、乳首への扱き責めを続けた。

小指の先程に尖り勃った乳頭が、ぬめった指の間でこよりを捻るかのような動きで捻り採まれると、爆乳の内部に溜め込まれた快感が、乳先に収束されてゆく。

「はひっ、ヒッ、ヒッ、ひひひ……ッ……くはあ、かはあ、あ……はあああ、ひひひ……ッ」

凜子は、乳首の快感が強烈すぎて、呼吸すらままならず、引きつった喘ぎの合間に、口をパクパクと開閉させて、どうにかこうにか酸素を貪る有様だ。

勃起乳首の側面にローションを擦り込み終えた指は、無造作に先端部を捉え、半球型に膨らんだ乳頭先端部を撫で回す。

「ひゅあああ！ 先ッ、先は……弄るなあ！ んくふううううう……んああああ！」

身悶えしようとする凜子であったが、快感で痺れた身体はプルプルと小刻みに震えるばかりで、乳頭を摘む指を振りほどくこともできない。

ぬちっ……ぬちっ……くちゅ……くちゅ……くちゅ……ちゅぶっ……ちゅむっ……くちゆる。

ローションを追加しつつ、まるで宝玉を磨き上げることのような丹念さで乳頭先端に媚薬が塗り込まれる。まだ母乳を分泌したことのない乳腺を逆行した媚薬成分は、乙女の膨らみを内部からも侵食し、対魔忍を発情した牝へと造り替えてゆく。

（ダメ、だつ！ 乳首……敏感になって……感じすぎる……来るッ……来て……しまうっ！）

これまで幾度も体験させられ、何意味わつても抑え込むことも慣れることもできぬエクスタシーの予兆が、爆乳の奥からせり上がってくる。

くちゅ……くちゅ……ぬぶ……くぶッ！

「あひ！ ……い……んむううううッ！！」

塗布を終えた指の腹が、勃起乳頭を乳肉に深く押し込んできた。

ポリウム過剰なミルク色の肉果に、淡いピンク色の乳頭のみならず、周囲を彩る乳輪までもが完全に埋没する。

「ひはああああん！ 乳首でイクッ、イクイクイク……イッ、くうううううッ！！」

それはまさに、絶頂へのスイッチであった。気が遠くなるような悦波の塊が、女悦の爆風となつて磔ボディの隅々まで痺れさせ、吹き上がる。

メリハリに富んだ肉体が、ローションの飛沫を飛び散らせながら、オーガズムの痙攣を起こした。理性の制御を振り切った拘束ボディがグンッ！と伸び上がり、ようやく指の圧迫から解放された勃起乳頭が、アクメに震える爆乳の先端に飛び出して、縦横無尽に跳ね回る。

「りっ、凜子先輩も、イッてる！ 私も、また、イチヤウッ、あああああ、また、また、イチヤウううううッ！！」

「ゆきかぜ……また……イッたのか……私も、いつ、イクんんんん……ッ！！」

絶頂を告げるゆきかぜの声を遠くに聞きながら、凜子は豊乳の内側で幾度も弾ける乳首エクスタシーに全身を揺れ弾ませた。

ぬちゅ、じゅぶるっ……

乳辱絶頂の余韻さめやらぬ凜子の股間に、大量のローションが塗布される。

熱れ蕩けた果実のように濡れそぼって開ききつた陰唇の柔襲に、人肌の温度に温められた媚粘液がジワリと染み通り、処女のまま狂わされていたヴァギナを灼熱させた。

「はひいひいひいっ！ いっ、今、イッたのに、そこは、まつ、までええええ！」

声を裏返らせて叫んだ凜子は、手足を拘束された肢体を前後に揺すり、腰を引いて、男たちの手から逃げようとする。しかし、単なる作業としてローション塗布を行っている魔界医師たちは、凜子の上げる甘い悲鳴などお構いなしに性器への塗り込みを開始した。

くちゅ……ぶちゅ……びちゅ……ぬちゅ……ぬちゅ……ぬちゅ……ぶちゅ……ぶちゅ……

すっかり濡れ開いてしまっている秘裂の奥から、止めどなく垂れ落ちている愛液とローションを混ぜ合わせながら、無慈悲な指が柔らかなワレメを往復し、膣口の奥にまで魔粘液を送り込む。

餅のように柔らかな大陰唇が掌で揉み歪まされ、バラの花弁のように慎ましやかな小陰唇が、指の間に挟み込まれて何度も撫で擦られる。

軽く曲げられた中指の先が、せわしなく収縮を繰り返す膣口を掻き弾き、ローションとともに、痺れるような悦波を送り込んできた。

「あひっ……いっ……あっ……うううううううう……くああんっ！ やっ、やめ……んくふううううう——ンッ!!」

粘膜組織に直接塗布されたローションの効果は絶大であった。熱くむず痒い疼きの塊が、男を知らぬ膣壁をドリルのように旋回しながら貫き、括約筋が制御不能の脈動を起こす。

じゅぽっ……じゅるっ……ずじゅるるっ……ぶぎゅっ……じゅぶるっ……

男の手に覆われた凜子の性器が、はしたない音を

立てていた。まるでポンプのように収縮したヴァギナが、媚薬ローションを吸い上げているのだ。「んほおおおお！ ローションが、入って……中に入ってくるうううっ……熱いのが……染みて……ひっ……いぐっ、イクイクうあああ！ おおおおほおおおおおっ!!」

はしたない声を響かせ、磔ボディを狂乱させる凜子の秘部を、魔界医師は淡々と擦り続けた。

パツパツと開いた大陰唇のワレメに指を潜り込ませ、充血を強めて開花した小陰唇の隙間に淫粘液を塗りたくる。

膣前庭のスリットに沿って滑る中指は、卑猥に蠢く膣口を甘搔きし、尿口を刺激し、包皮を剥け返らせて勃起したクリトリスを逆撫でした。

「んぎひいひい！ いぐううっ！ イッ、イクッ、また、イクッ、うあああ、イク——ッ!!」

愛液混じりの媚毒粘液がこね回される淫音を、アクメの絶叫が掻き消し、室内の空気をビリビリと震わせる。

極上ボディの持ち主である対魔忍は、調律を施されている楽器のように、絶え間なく声を上げ、痴態の限りを尽くしてよがり狂わされた。

媚毒に冒された少女の肉体を快感の波が駆け抜けるたびに、メリハリに富んだ対魔忍の拘束ボディは、捻れ、反り返り、伸び上がり、硬直状態のまま痙攣する。

抜き身の剣のような、強く鋭い光を宿していた瞳は、喜びの涙に濡れて虚ろに見開かれ、半開きで喘ぐ唇の端からは、絶え間なく涎が滴り落ちていた。

許容量を超えた快感で、対魔忍の神経がオーバーヒートしかかっているのにも構わず、魔界医師たちは執拗に性器を擦り責め、規定量のローションを塗り込めてゆく。

ローション塗布を終えた魔界医師たちは、私語一つ交わさず、後片付けを終えて立ち去った。「凜子先輩の絶頂……今日は、いつも以上に激しかった。大丈夫……かな？」

磔状態のスレンダーな肢体をグツタリと弛緩させたまま、ゆきかぜは先輩対魔忍を氣遣っている。

母を救いたいというゆきかぜの想いを誰よりも強く知っている凜子は、今回の任務にも不平一つ言わずに同行してくれたのだ。

（凜子先輩がいつしよに居てくれるから……どんな辱めにも耐えられる……耐えてみせる！）

連続絶頂で体力を使い果たし、口をきくのも辛い状態に陥りながらも、ゆきかぜの心は折れていなかった。

「ハアハアハア……くっ……う……ゆっ、ゆきかぜ……大丈夫か？」

凜子は喘ぎながら、隣に拘束されているゆきかぜに声をかけてきた。

成熟した女性らしいメリハリの利いた凜子の肢体は、塗り込まれたローションで艶めかしく照り輝き、ポニーテールのロングヘアが、絶頂の余韻で紅潮した頬や、汗と魔液に濡れた乳肌に張り付いて、凄艶な色香を立ちのぼらせている。

「んっ、はっ、はい……なっ、何度もイカされちゃったけど、まつ、まだ、正気です……」

凄惨美に溢れる凜子に見とれていたゆきかぜは慌てて返事をした。

「それでこそ対魔忍だ。……この先、どっ、どんな試練も耐え抜くぞ……そして……」

そこまで言った凜子は、唇を真一文字に引き結んで、ゆきかぜの目を真っ直ぐに見つめる。

ここは敵地、迂闊な発言をするわけにはいかないのだ。

（ええ、必ず……お母さんを助け出しますっ！ 対

露出刑事再登場!



それゆえに
なかなか尻尾を
出さなくてね



調べでは
わりと大きな
密売らしい
人数は少数
らしいが



麻薬密売の
極秘捜査?
プールで
…ですか



この前も随分
活躍したそう
じゃないか

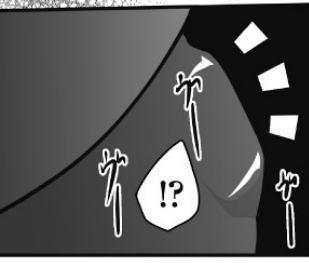
私などより
優秀な君なら
可能だろ?

柏木遼子
刑事

かあ
あ

このセクハラ
部長め…

り了解
しました



!?



やー



ん

刑事 柏木遼子2

プールサイドの羞恥捜査

漫画 COMIC ぱふえ



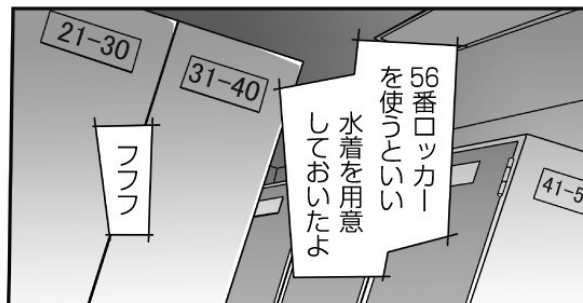
はい
柏木

お前は!?
何の用だ

久しぶり
ですね

ゲームの
続きのね

ククク
舞台が整った
のでお誘いに
あがりました





今回は私の代わりをゲストの方が努めますので失礼のないようにね

あの件は不起訴ですんだがウチは大変だったんだぜ

何が不起訴よ次はちゃんと全員刑務所に送ってやるわ

コイツらが「奴の言つてたま

おうおう言うねえ



な!? やめろ!

何をしてお前達!!

あつれ— 逆らう気? あの人命令だぞ

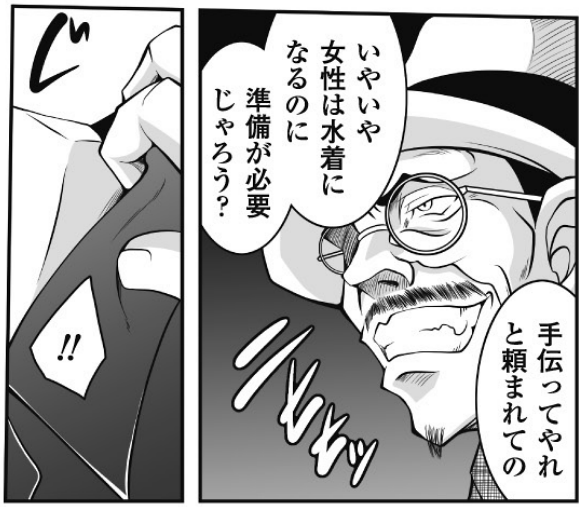
くそおおお おおおお!!



裸で街中練り歩かされて輪姦されたと聞いたぜ!

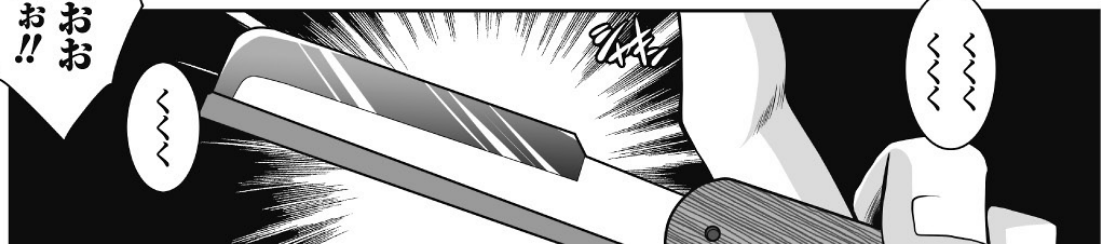
そんな事言うために来たのか

ハハハハハハハハ



いやいや女性には水着になるのに準備が必要じゃろう?

手伝ってやれと頼まれての



くくく

くくく



見る...な
くそおつ
うう...

ヒヒヒ
遠慮するな

また:
こんな目

は...
恥ずかし
すぎまう



感じる
からって
動いては
いかんぞ

だっ
誰が!!

あんな水着
ではキレイに
剃らないと
ハミ出して
しまふじやろ

■女のよう
にツルツルに
してやろうな



んん?
なにやら固く
なってきたぞ

やめろ

は!

XXXX



生意気な
お豆じゃ
剥いて
やるっ

は…あん
やめ…な
さいよお

ヤッ
ヤッ
ヤッ

ほれ♡
動くと切って
しまっぞい

どうして…
前と同じ

いやああ
痛ううッ

だめっ
そ…れ
やああッ

またひどいこと
されてるのに

あああ
見るなあ
触るなあ

く…そお
おおお
恥ずかしい！
悔しいっ！
…のに

抵抗する気が
なくな…ちやう

はははは
柏木刑事は
こういうのが
お好みか

愛液が溢れて
きよるわ

痛痒くて
切なくて



痛あああ

ハハハ
ハハハ
ハハハ
当分銭湯に
行けねえな

ホレこれで
仕上げじゃ

さあ綺麗に
なったぞ

大人のくせに
パイパンって
やっぱ変スね

そんな…
私の…が
全部…
…ああ

永久脱毛させ
ましょうぜ

準備はまだ
終わってない
のじゃよ

な…ッ
何よそれ!?

いや!
やめ…





いや！
変なもの
入れないで

ああっ
や…め…



あとコイツは
オマケだ♥

あああ
いやああ

あ…あ
ああ…あ



心配するな
ただの座薬よ

少し肉体が
火照るお薬
じゃがの

それじゃ
捜査の方
しっかりと
頼みますぞ



僕らが自由
動けん分
警察に働いて
もらわにやな



学園の風紀を守る生徒会長を
貶め、辱め、痴態を晒す!!

生徒会長と
恥獄の放課後

せいとかいちょうとちごくのほうかご

小説 NOVEL せんやよみ 千夜詠 挿絵 ILLUSTRATION カキコ

著者近刊
「美少女エクソシストの聖水?」
むしろご褒美です!!



好評発売中!

旧校舎を利用した部室棟では、廊下に明かりはなくて、放課後ともなれば薄暗くやけに寂しさが募る場所だ。

夕焼けの茜色が差し込んだ階段を上り、ギンギンと鳴る板張りの廊下を進むと、黒い詰襟の制服を着た男子生徒の数名が箒やモップ、バットなどを持って臨戦態勢をとっていた。ギリッと食いしげするような表情を見せ、攻撃的でありながら怯えが見て取れる。

「き、来たぞ……。皆、印刷作業が終わるまで、持ちこたえるんだ」

後退りしそうな足を踏みしめている男子らにゆつくりと近づいていく女子生徒。後ろを赤いリボンで少し結わえた長い黒髪が、開けられていた窓から流れてくる風に靡いて、艶やかに煌めいている。可憐な顔立ちは涼しげに表情を崩さず、少し切れ長の漆黒の瞳だけが僅かに細められた。

「うぐう……く、くそ……」

うろたえる様子も見せず、少女は静かに歩み来る。襟首に大きな淡いピンクのリボンのついた紺のブレザー。その胸元がはちきれんばかりに大きく前に迫り出して、たぶん、と揺れる様は、いつもなら被写体としてだらしくニヤけてしまうものだが、今はそんな余裕はない。

一見華奢な体躯であったが、膝上までのプリーツスカートから覗けるむっちりとした太股が着痩せしているのを期待させ、生睡を飲み込むところだが、やはり妄想を掻き立てている

場合ではない。

彼女のそのしなやかで繊細そうな手には竹刀が握り締められていて、それがいかに危険であるかをここにいる全員が身をもって知っていた。

「うわあああ、会長オッフ、覚悟！」

箒を持った一年生が先陣をきって飛び出した。

パシッ！ 振りかぶった彼の得物は、少女の構えついでに払い、宙に舞う。

黒髪の彼女の構えた竹刀の剣先からの圧力だけで、一年生はその場に膝をついた。

「でりやあああ！」

続いて飛び込んできた二年生が長いモップの柄で突いてきた。

それを軽く避けて、体を斜に構えさせ、軸である左手だけで彼に突き返す少女。

竹刀の先は少年の喉を挟り込む僅か手前でピタと止まる。

直後、冷や汗を流す彼の手からモップが落ちた。

「やれやれ、ですぬ」

はあ、と少女は一つ息を吐く。そうして一時呆れ顔を見せながら、彼女はまた一切横に逸れることなく歩みを進めた。

じりじりと後退し始めた男子生徒らに射抜くような鋭い睨みをきかす。

「貴方達も懲りませぬね。私もまだまだ未熟者ですから、いつまでも怪我をさせないように、とは限りませぬよ」

* *

断末魔のような叫びがドアの向こうから聞こえてきた。

「く、くそつ、これまでか」

新聞部部長、河埜木は印刷中の学校新聞を諦め、逃走の準備に掛かった。

あの女の襲来を察知した時点でこうするべきだったのだ。その判断を誤った為に、編集済みのデータでさえ持ち出す時間が今になくなってしまった。

「わ、悪いな、皆、一番大事なのは、新聞を作る人間。すなわち、部長である俺の安否だ」

企むような性悪商人のような顔を見せ、彼は窓際へと慌てて進みゆく。

が、外を眺めて蒼白の顔でゴクッと一つ唾を飲み込んだ。

二階である。いざとなればここから飛び降りるくらい覚悟はあった……

はずだ。前方に丁度背の高い樹木が一本あって、そこまで飛びつけばいいだけのこと。

いや、どう考えても無理だろ。体の震えがそう教えている。

窓枠にとりあえず足を一つ掛けてみたその時、ガラツ、と扉が開く音が聞こえた。

背後に忍び寄る静かな殺気。

「あら、そんなところからお出かけですか、河埜木くん」

錆びついたロボットのようになぎこちなく少年は振り向いた。

「や、やあ、これはこれは、生徒会長……。今日はどうのようない用件で……」

チラッと彼女が一瞬ずらした視線の

先には、印刷中の次号校内新聞があった。その見出しには——水泳部期待の一年生百合疑惑——とあり、更に掲載された写真は、部員同士でシャワールームでじゃれあっているものである。不潔なものを見つけたように生徒会長の眉間が微かに寄った。

「こちらの記事、および画像データ等、全て処分させていただきます」

「な……っ、いつものことだが、これは不当な報道の自由への弾圧だ」

僅かに顎を上げて、濃厚な威圧感を滲ませ出す少女。

「これのどこが、報道ですか。でっちゃんあげの記事、いやらしく男子生徒の欲情を煽るだけの写真。……貴方だけは少々痛い思いをしてもらわないとならないようですね」

一步、一步と歩み来る戦慄。ヒューと風の吹く窓の外と美麗ながら冷徹な表情を浮かべる彼女を交互に見比べながら、だが結局、それ以上何も決断できない河埜木は、数秒後、その頭上に大きな瘤を作ることになる。

* *

「ご苦労様……」

小咲頼が生徒会室の椅子に座ったその直後、小柄で人の良さそうな少年が彼女にお茶を出しながら労いの言葉を掛けてきた。

「ありがとう、翔ちゃん」

いつもニコニコと笑みを絶やさぬ彼は頼の幼馴染みであり、学校では風紀委員長という立場である。名を深水

翔太しょうたという。

「さつき見てきたけど、焼却炉の前で新聞部の連中泣いてたよ」

「いいんです、あれで。汚らわしいものは、熱消毒するに限ります」

ふん、と鼻を鳴らす生徒会長に、ハハ、と苦笑いのようなものを浮かべる風紀委員長の少年。

「なに、翔ちゃんも、まさか、あんな記事が読みたかつたわけじゃ」

「ま、まさか……、酷いな、鞘瀬は」

クソッと笑みを零す少女。普段は生真面目で優等生な顔を崩さない彼女のそんな微笑みは、大抵の男子の心をギョッと驚掴みにするものだ。

「冗談です。翔ちゃんは、昔から男子の猥談とかにも参加してなかったものね。頼りなさそうに見えて、正義感が強いし」

小柄な少年は照れくさそうに頭をかき。気恥ずかしさからか、彼は話題を変えてきた。

「そうそう、もう直ぐだね、沙理さりねえの結婚式」

「え……、ああ、うん。姉さん、今とっても忙しくて、でも嬉しそうで……」

鞘瀬は五年前に両親を事故で亡くしている。親類ともあまり付き合いがなかった為、それ以来姉の沙理と二人で暮らしてきた。当時学生だった姉は中退して職に就き、苦勞しながら生計を立て、妹を進学させている。

両親を一度に亡くした悲しみは同じはずだったのに、彼女は幾度も自分を

抱きしめ、何度も、大丈夫よ、と慰めてくれた。今の自分がこうして学院に通つていられるのも、剣道を続けられたのも全て姉のお蔭であつて、どんなに感謝しても足りないくらいなのだ。

その姉が、昨年のこと、取引会社の社長子息に見初められて交際が始まり、あれよと言つて間に婚約が決まつた。絵に描いたようなシンデレラストーリーで、順調に結婚式の日取りが来月に迫つていく。

「幸せに……なつて欲しいです」

僅かに下方を見詰めながら、優しげに願いを込めて鞘瀬はそう呟いた。

情報と感情の整理がつかない時、人間もフリーズするのだと知つた。

その写真を見詰めたまま、鞘瀬はしばらくその場から動けないでいる。

生徒会の仕事も早く終わり、帰路につく為の下駄箱を開けたその時だつた。

差出人の名の入つていない真っ白な封筒が入つていた。月に何度かのよくあることで、その殆どが自分に向けられた恋愛感情を綴つたものだ。

いつもよりも幾分か厚みのあるそれをその場で開封する。相手を確認し、直ぐに返事をするスケジュールを立てる為だ。これまでお断り以外の返答をしたことはないが。

封書の中には、便箋は殆どなくて、十数枚の写真が入つていた。

——何でしょう？

と当然の疑問を持つて、一枚を取り

出してみる。

直後、黒髪の生徒会長は、声にならない悲鳴のようなものを上げた。

(いやつ！ な、なんで、こんなもの……)

全裸の女性が映つていた。四つん這いの姿勢で、カメラ側に大きく柔らかい球状のお尻を突き出している。剥き出しの女陰がしっかりと捉えられ、そこはヌラヌラと盛りりの蜜に濡れていた。尻肉の谷間が、おそろく男性と思

われる手によって広げられ、中心の窪みに男性自身を模つた真っ黒な猥褻玩具が埋め込まれている。

悪質な悪戯かと憤怒と共に訝つた。だが、カメラ視線に振り返つた女性の顔を見て、愕然となりながら脇の下に汗が噴出してくる。

(ね、姉さん!! ま……さか、き、きつと他人の空似……)

封筒を胸元に抱えるようにして、人目を気にしながら校舎裏に移動した。

早歩きだったが、それほど体力を使つたわけではない。それなのに、ハア、ハア、とやけに呼吸が乱れた。

一度唾を飲み込み、残りの写真を確認していく。

うっ、と吐き気を催したように口元を押さえた。

大人びて熟した糸纏わぬ肢体、全身のいたる所に荒縄が巻き付き、柔肌

が引き絞られている。次の写真では、男の股間に跨がり、肉槍に下から貫かれ、左右から突き出された男根を握り

締めていた。上からロープで吊るされた豊満な肉体に無数の男達が群がっているものや、全身を熱輻に埋め尽くされているものもある。そして最後の一枚では、尻孔を捲りあげながら大量の汚物を噴出している姿が映つていた。

両手の震えが止められない。芸術とは正反対にあるような下劣な写真の中の女は全て紛れもなく姉だつた。

「そんな、ね、姉さんが、こんな……」

きつと無理やりされたに違いない。写真の中に体だけが映つた男達に激しい怒りを覚え、今直ぐにでも真剣の刃を突き立てたい感情が湧いてきた。

だが彼女は気付いてしまった。どの写真の姉もどこか恍惚とした表情をしていて、最後の一枚では何ともだらしなく卑猥な、まさしく牝の本能を剥き出したような顔をしているのだ。こんな悦に浸るような表情の姉を一度たりとも見たことはない。

(う、嘘です、こんなの……。あの姉さんがこんなことされて……。き、気持ちよく……。なんて……)

焼却炉へと向かつて、全て燃やしてしまおうかと思つた。だが、鞘瀬はそれを踏みとどまつた。

そんな自分に疑問を抱く前に、一枚だけメモがあるのに気付く。

震える指先で取つて、書かれた文章を読み終えると、全校生徒が憧れる美麗の生徒会長は顔を真っ赤にさせてぐつと唇を噛んだ。

メモに指定された場所へは、混雑し始めた駅前を越えていかなければならない。たいした距離ではなかったが、鞆瀬はできるだけ人目を避けるようなコースを選んだ。

だが誰とも擦れ違わないというわけにはいかない。遠目からは少しだけ物珍しそうに、そして近づくとも男性は一瞬驚きと喜びを示した顔になって、チラチラとやけに盛り上がった胸の先端に視線を送ってくるのだ。

(き、気にしちゃいけません。変に隠したら、余計にいやらしく見えてしまいます)

言い聞かせながら少しだけ顔が泣きそうに歪んだ。

——この写真が公開されたくなければ、市民公園まで以下の姿で来ること。体操服にブルマ。上下とも下着を身につけてはならない。靴と靴下を除いて、それ以上の着衣は許さない。服装は体育館の脇の茂みに置いてある——

学内のトイレで着替え、裏門から外に出た。相手の正体も目的も分からない以上、今は指定された通りにするしかなかった。結婚を控えた姉の幸せの為に、誰かに相談するわけにもいかず、自分が何とかするしかない。

「おや、会長じゃないですか」

聞いたことのある声にビクッと身が硬直した。自分を会長と呼ぶのは、学校関係者以外にない。

ほんのりと頬を朱に染めた顔で僅かに振り返ると、男子生徒が一人近づい

てきた。

(河埜木！ こ、こんな時に、よりによつて……、ま、まさか彼が……?)

公衆では場違いな姿をした麗しの生徒会長の姿に邪念塗れの新聞部部長が興味を示さないわけがない。でつちあげ記事も多く書いてきた彼が、日頃の恨みを晴らす為に仕組んだとは考えられないだろうか？ そう考えればこの破廉恥な仕打ちも合点がいった。だが何処で姉のあのような写真を手に入れたのが疑問に残る。

「どうしたんですか、そんな恰好で……。うちの体操服じゃないですよ。へえ、ブルマ、ねえ」

つい先日痛い目にあわせたばかりだというのに、平然とニタッと笑いながら全身を舐め回すように見詰めてきた。

柔らかな生地の白い体操服に下着のラインは確認できず、豊満な胸の果実が美しい釣鐘型を描きながら、押さえつけられていない生々しい揺れを見せられている。脚部の付け根に微かに濃紺生地が減り込んだむっちりとした下半身の曲線。真っ直ぐに立っただけでも突き出されたような肉付きのたわわなお尻も、女性自身の外観を濃厚に感じさせる股間部も、内に下着がないぶん形状が微かに浮かび上がっていた。

あからさまな視線に顔が熱い。眉を撃つて軽蔑するように睨み返した。

ただどうしてか乳首が勃ってきてしまっ

た。それが内生地に擦れて過敏に刺激を与えてしまう。

「あ、貴方には関係ありません。急ぎますので……」

いくら彼を怪しんでみても、確証がない限り姉のことを問いつめるわけにはいかない。

無視するように先に進むと、河埜木は数メートル後を黙ってついてきた。

わけもなく追い払うこともできず、鞆瀬は指定された公園に辿り着いた。

街中であつて最も緑豊かな場所、中央に溜池のある比較的大きな公園。この広い場所のいったい何処に行けばいいのか。

見回すと、小屋を模したダンボール製の立方体が幾つもある。鞆瀬としては彼らに特別な感情を持つてはいない。美観をそこねる風景に眉を顰める者もいるだろうが、人の価値観はそれぞれで、またこういう状況に置かれるに至る人生があつたのだからと少しだけ寂しさを感じるだけだ。

「あなた、小咲鞆瀬さんかい？」
ダンボールハウスの住人らしい中年から壮年と思しき男が不意に寄ってきて声を掛けてきた。

薄汚れたシャツに、上着のスーツだけはそれなりに綺麗だ。頬がこけていて、無精髭が生えている。

「え、ええ……そう、ですが……」

予想していなかった事態と名を呼ばれた事実で困惑の表情を浮かべるブルマを身につけた美少女。

「へえ、あんたみたいな、べっぴんの

御嬢さんがね……」

しげしげと全身を見詰めてくる瞳は、どこかギラギラして精気が漲っているようだ。嘲りに似た劣情を臭わせる笑みにゾクッと身震いしそうになった。

「あ、あの……何か、ご用ですか？」

「何つて……ほら、あんた、アレするのが大好きなんだから？ ささつ、こつちへ……。皆心待ちにしてたんだよ」

ぐいっと強引に手を引っ張られる。何が起ころうとしているのか理解できず、つい助けを求めるように後ろをついてきていた河埜木に視線を送つたが、彼はハプニングを楽しむようにニヤけるだけだった。

ノーブラの豊満な肉果実が無造作に揺らされながら、連れていかれた場所には、有名ラーメン店のような行列ができていた。見たところ全員がホームレスの男性のようで、二十名近くいる。彼らは体操服姿にむっちり豊満な肢体を露にした若く清楚な顔立ちの少女を見て「ほおつ」と喜びの唸りを上げた。

「き、綺麗な娘だねえ。あの子がしてくれるのか」

「お、俺え、もう勃つてきた。若くて、やらしい体つき……」

「はああ、女の子の、いい匂いがする。何年ぶりか……」

ねつとりと体中に視線が纏わりついてくる。彼らの瞳には欲求が滾つていて、不思議とそこには感謝と絶望のよう

な生暖かさがあつた。

(いったい、これは、どういうことなのでしょう?)

奉仕の期待であろうか? 炊き出しの予定でもあって、それをする人物と勘違いされているのではないだろうか。列の一番前に向かい合うように立たされる。

「あ、あの、これは……?」

疑問形の言葉を発すると、最初に接触してきた男が、思い出したように言った。

「おつと、これを言わないといけないんだ。お姉さんの写真、だつたかな?」

一瞬で顔が蒼白になった。ブルツと体が震えて、目眩のようなものを感じてしまう。

「そ、それをどうして?」

「ええ? いやあ、昨日男の子がやってきて、教えてくれたんだよ。若くて綺麗な女学生が体操服姿でやってくるから、そうしたら、こう言えつて……。してくれらんだろ、俺たちの……チンポ、しゃぶつてくれるんだろ」

刹那、目の前が真っ暗になったような気がした。

この恰好をさせられた時から嫌な予感はずいていた。犯人にいかかわり行為の要求をされることも考えなかつたわけではない。だが、そこで接触できれば返り討ちにできる可能性もあつた。「そうそう、これを渡さなきゃ、いけなかつたんだ」

ホームレスの男から渡された一通の

手紙。

——余計なこと言わず、素直に従え。お前の態度しだい、直ぐにでも写真を小咲沙理の婚約者に送る準備はできている——

ぎゅつと手紙を握り潰した。チラッと少しだけ振り返つて、河埜木を確認すると、彼は出くわした大スクープに瞳を爛々と輝かせている。

「おいおい、我が校の麗しき生徒会長殿が、公園で男たちの性処理……」

できるはずなんてない。泣きそうになりながら、それでも逃げ出すわけにはいかなかった。

(ああ、姉さん……。どうして、こんなことに……。で、でも……)

いつも優しく包み込むような笑みをを見せてくれる彼女。たつた一人の肉親で、甘えることしかできなかった。

(私が、恩を返せるのは、こんなことくらいしか……)

ぐつと拳を握り締めた。

「そ、そうです。私が、皆さんの、口でしてさしあげます」

蒼白だった顔が真っ赤に染まった。肌寒く感じていた露出している素肌の部分も熱が発したようになってくる。

「おつ」と低い歓声が上がった。

「さあ、じいさん、あんたが一番最初だよ。さあ、この子の前に……」

列の先頭にいた老人がゆつくりと前に進んでくる。痩せこけ、頭部は禿げていて、所々黒く汚れたぼろ雑巾のよ

うな着衣であつた。微かに異臭が漂つ

てくる。

「ほんとに、ええのか。わしなんかのを、こんな可愛らしい御嬢さんが……」

そう呟きながらも、彼はズボンのフアスナーを下ろしていく。

鞘瀬は顔を一瞬曇めながら、老人の股間を見詰めた。ゆつくりとした動作で彼は中から逸物を取り出していく。

(や、やだ……本当に……出して……)

嗚咽しそうな声を漏らすのを耐えた。垂れ下がった男性自身が、だがとても長く太いものが、まだ陽の高い公園で露出される。

黒ずんだ肌色で、亀頭の半分が包皮に隠れている状態であつた。写真で見せられた硬直状態よりも確かにずっと年齢を感じさせられたが、そのぶん醜悪さを覚えさせられる。

憐れみさえ感じる老人の様子。だからといって怖気を拭えるはずはなく、引き撃つた顔のまま口を結んだ。

(や、やらなきゃ、いけないのです。姉さんの幸せの為に……)

艶やかな黒髪をした少女は老人の前で膝をついた。

眼前に初めて見る生の肉棒があつて、それは何日も清められていないように見えた。少し近づいただけで、ツンと鼻につく恥臭が鼻腔に届く。

(く、臭い……。こんなもの、口にしたら、病気になるのではなく……?)

老人の後ろにはまだ幾人も心待ちに並んでいた。迷っているだけで日が暮

れてしまう。

「じゃ、じゃあ、触ります」

幼い頃に父親のは見たことがあるが、触れることはまったくの初めてだ。ホームレスの老人はその瞬間を堪能しようかというように瞳を閉じている。

震えそうになる片手を伸ばして、いよいよ肉幹に手の平を添えた。

(これが、オ、オ、ン、ン……、生暖かい……)

おつと伸ばした指先で、ふにやふにやした男根を包み込むと、微かに硬直の兆しが現れる。

「おほつ……、二十年ぶりじゃ、心地よいのお……」

垢に塗れたざらついた感触で、手の中で男性は少し大きくなった。

眉根が寄つて泣きそうになる。だがここで逃げ出すわけにはいかず、氣丈に耐えた。

(勃起……してきているの? もつと、ちゃんと、大きくさせないと、ダメ、なんですよね?)

口ですると言つた。顔を寄せると、濃厚に陰部特有の酸味のある汚れた臭気が吐き気を催させる。

「く、口で、します……」

皺よつた包皮から覗ける黒々とした粘膜の先端。ぶくつと柔らかそうな唇を僅かに開いて、鞘瀬は赤桃色の舌先を伸ばした。

瞳を細め、間近に迫つた亀頭にペロを触れさせる。

(ああ、私……男の人の、舐めて……)

べちよ……っ。舌先が痺れてくる。握り締めた男根に硬さが増してきた。

「ほお……っ、こ、こんな綺麗な娘が、わしのを……」

カリ首が膨れてきて、ググッと包皮が捲れ上がってくる。すると悪臭の原因と思われる恥垢がびっしりとこびりついていた。

「こ、こんなもの……口に、ああ……」臭くて汚い。そしてこれが男性の、女性に種付けをする器官であると意識すると、拒絶の震えが抑えられなくなってくる。

（姉さんの為、だもの……）添わせた刺激で唾液が口内に溢れてきた。その濡れた舌で、ぬちゅ、べちよ、べちよ……、と亀頭の汚れを削いでいく。

「おお、こりやすげえ、あの小咲頼瀬会長が、汚ねえジジイのチンポ舐めてる。そ、そ、そ、写真、写真……」

カシヤッ、カシヤッ、とデジタルのシャッターの押される音がした。

（嘘……っ、河埜木が写真、撮ってる！）

彼がここにいる状況で予想された事態。それでも覚悟して、自分が他人からどのような白い目で見られることがあっても、姉の幸せだけは守りたい。「ん……っ、ちゅぶ、はあ、べちよべちよ……」

ぎこちなく舌先で亀頭の先端だけを唾液で濡らしていく。

「むむっ、もう少し、全体を刺激して

くれんかの？」

処女は言われるままに実行するしか思いつかなかった。すると唇が牡の粘膜に触れてしまい、頼瀬は眉根をぐつと寄せる。ペロはぬちゅちゅとカリ首に添わされた。するとやつとムクムクと肉茎が反り始めて、硬さが増してくる。

「はあ、大きく、なってる……」少しだけ嬉しさを感じた。男性が猛りだす。男が満足する方法が分かってくる。男が満足する方法が分かってくる。

カシヤッ、カシヤッ、とシャッター音が聞こえるたびに、強烈に羞恥が煽られる。ブルマの脇の太股の内側に汗が滲んでくるようだった。

（いや、恥ずかしすぎて、熱い……）臭いのが気にならなくなってくる。老人の枯れ果てたような精が漲ってきたように、男が蘇ってきた。

「うおお、わしのが、こんなに……、もう無理だと思っておたのに……」感動を現す声に、頼瀬はどうしてか慈愛を触発される。

「はむっ……。口の、中に……」唾液の煙るような口内を覗かせて、唇に優しく男の先端を包み込んだ。

「ほお、き、気持ち、ええ……」恍惚を示すような老人の顔を下から上目遣いで見上げ、まだ半分勃ちの肉塊を口内にスロートしていく。

ちゅぶっ！ ちゅぶぶちゅぶ……。生々しさが広がり、ほんのりとした柔らかさと硬さの肉の感触が舌上を刺激

していった。

（はんっ、はあ……、おしゃぶり、しちゃってる。気持ち……悪いのに……）早く終わらせたい。片手で老人の逸物の付け根を握りながら、更に幹全体を含み入れていった。

ぬちゅっ、ちゅぶっ！ 年老いた性器はなかなか膨らみきつてはくれない。それでも彼は温泉にでも浸かったような気持ちよさそうな表情をしている。

（だめ、こんなじゃ……、ああ、どうしたらいいの？）

牛肉の弾力を感じ、口に包み込みながら舌をのたうつようにさせて男性を刺激してみた。

「んぶっ、ちゅぶ、ちゅぶ……」ノーブラの胸元を、たぶん、たぶんと揺らすようにして、顔を前後に振っていた。そのたびに発情しだした乳首が擦れて、痒みのようなものが湧いてくる。

（やだ、こんな、いやらしいことをしてるのに……、なんだか、お尻がふわふわして……）

舌が過敏に男性器の形状を感じていく。後ろから、横から、ファインダー越しに観察される視線も何故か体を熱く火照らせてきた。

ゾクッと異質な感覚を恐怖して、忘れさせるように黒髪の美少女は牡に唇を張り付かせた。

せる老人の逸物。喉奥を突くように大きさを増して、肉茎にゴツゴツと血管が浮かび上がってくる。

「ふぐ……っ！」

これまでの苦勞が信じられないくらいに、あつという間に勃起し尽くす肉棒。強張りとは化したそれが、更に一段と、亀頭は若者のようにパンパンに膨らんで、

「おほっ！ 出るぞ……」

ドビュルッ！ ビュク、ビュクッ、ドブドブッ！

長年溜め込んだようなドロドロと濃厚なザーメンがどつと噴き出して、少女の頬を膨らませるかという勢いで口内を満たしてくる。

（ヒ……っ、いやっ！ ぬちゅちゅちゅ……、男の人の、せ、精液……、こんな、いっぱい……、苦い……）

泣きだしそうな瞳を細め、ぐつと眉を寄せる頼瀬。びゅくびゅくと痙攣する肉棒は唾液と彼自身のザーメンに塗れ、鳥賊臭さと粘りつきが痴戯の猥褻な結果を教えてきた。

萎えだしたそれから、ゆつくりと唇を離すと、口元に白濁が零れていく。それはねつとりと滴って、体操着のよく発達した胸元へと落ちていった。

「うひよ、小咲頼瀬の、ザーメンに汚れた姿、頂き」やけに興奮した男子生徒の声を聞きながら、まだ列をなしたホームレスの男性の数を数えると、気が遠くなりそうだった。





冷徹なる一閃!

シンビ!
公安の犬がっ!

ぐあっ

残るは
お前だけだ

きゃああ

ちっ

紫月しづきい...!
動くな!

そんなことで
隙を作れるとでも??

...任務完了

シンビ 紫月の 牝犬 デビュー



…しくじった
俺に構わず
コイツらを!

逃走経路確保失敗
とんだ足手まとい
だな

しまった!
トオル!



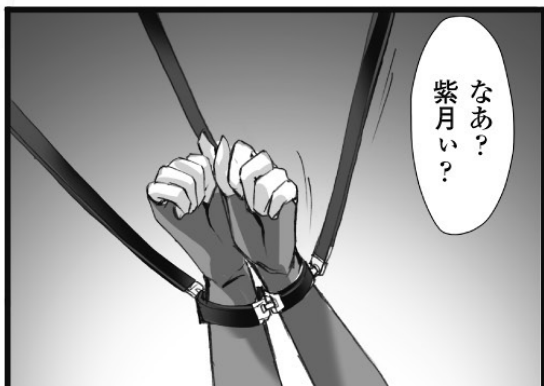
どうした?
隙だらけだったぞ
紫月いフハハハ

…っ



し紫月!

紫月姉さあん!!



なあ?
紫月い?



!?

ぐっあ!
がはっ

ガッ
ガッ
ガッ

公安の秘密特殊部隊
通称シノビ

……

忠実な人体兵器

おかしいよなあ？
そんな犬が

任務より仲間を優先
心配するなんてよお!?

あ、紫月さまが!

き汚い手を
離せ!

小悪党ねえ…おほっ
柔らかくていい
エロ乳だぜ!

貴様ら小悪党が
……くっ! 知った
ような事を!

孤児施設から才能を見いだされシノビの英才教育を施され

任務に忠実な犬に育て上げられたお前が仲間を優先するなんて

あまり暴れるなよ
雌犬紫月わかるな？

下手な真似したら
アイツを…

くっ

おかしいだろう
がよおお!
紫月い!

こりゃこの雌犬
再教育が必要だな!

俺らが教育
してやるぜ
その体にな!

ふん！なにが雌犬だ
貴様らこそまるで
サカリのきた犬だな

こいつら…
なぜ私の事を…!?

…ふざけるな!
この下衆どもが!

うおっ怖い怖い
とんだ狂犬だな
こりゃ！ぎゃはは

臭くて汚いモノを
押し付けるしか
能がないのか!

こんなエロ乳で
誘ってくる雌犬が
良く言わせ!



何度も言わせるな！
アイツがどう
なってもいいのわ！

変態の
下乗どもが！

く臭いっ
こんなモノをつ

口でも
するんだよ！

なんだこの
又ル又ル！
気持ち悪いっ

腋もエロくて
たまんねえな！



弟の事まで！
コイツらいつたい！

んほおっ

ぐっ気持ち…悪い！
ビクビク震えてっ

任務よりも大切な
たった1人の肉親
なんだろうがよお！

んぶっ

目の前でブチ殺され
たくなかったら
もっと熱心に奉仕
するんだよ！



なんだその
目はああああっ！

んぶう！

弟がどうなっても
いいのわああああ！

!?

覚えこまされた絶頂快感に
対魔忍は羞恥のWピースを晒す!!



対魔忍
三十九世
TAIMARIN YURIKAZE
淫辱PV撮影会

小説
NOVEL
あおいむらまさ
蒼井村正

挿絵
ILLUSTRATION
あおいなぎさ
葵渚

原作
ORIGINAL
Lilith

「う……う……こんなトコ連れてきて、どうしようというのよ!」

周囲から浴びせられる強力なライトと、彼女を包囲するように設置された何台ものカメラを睨みながら、囚われの対魔忍、水城ゆきかぜは勝ち気な声を上げる。

小麦色に日焼けしたスレンダーボディを包んでいるのは、黒と白を基調とし、赤いフリルを要所にあしらった、対魔忍のコスチュームだ。

「今日は、奴隷娼婦としてデビューする前に、お客様に見せるプロモーション映像を撮影してやろうと思っただ、嬉しいだろうか?」

娼館の主で、ヨミハラでも屈指の実力者である男、リアルが、重々しい口調で告げた。

「プロモーション映像!」

素つ頓狂な声を上げたゆきかぜの身体が、ブルツ、と小さく震える。

(ああ、とうとう私、奴隷娼婦としてお客を取らせるんだ……)

任務遂行のため、覚悟の上での選択とは言え、突きつけられた非情な現実には絶望感がこみ上げてくる。「……どうした、嬉しくないのか? こういうときには感謝の言葉をのべるものだぞ」

ギョロリとしたリアルルの三白眼が、無言の威圧を込めて、奴隷娼婦に堕ちた対魔忍を見つめた。

「くう……ンツ……ううう……わ、私のような淫乱な牝ブタのために、このような場を設けていただき、ありがとうございます、ご主人様……」

こみ上げてくる屈辱感を抑え込みながら、対魔忍の少女は、幾度となく言わされてきたセリフを棒読み口調で告げる。

(うう……何回も言わされて、慣れてるはずのセリフなのに、今日はすつごく恥ずかしいよ)

全身がチリチリと焼け焦げるような羞恥心に身を

震わせるゆきかぜ。

魔界の技術を駆使した淫靡極まりない調教を施され、身も心も快楽漬けにされたゆきかぜは、主人であるリアルルの命令に逆らえなくなっていた。

(昨日は食事も、いつもとちよつと違って、睡眠も十分取らせてくれたと思っただら、この撮影のためだったのね……)

十分な休養と、娼薬の入っていない食事によって、ゆきかぜは、羞恥心を感じる程度の理性を取り戻していた。

しかしそれは、陵辱に対する不安と屈辱感をいっつも以上に煽り立てて、勝ち気な対魔忍の表情を曇らせる。

(何されるんだろう? どんないやらしいこと、されちゃうんだろう……ううう……)

「機材の準備も整ったようだな。そろそろ始めるところか……」

部下に目配せしたリアルルが一步下がると、照明がさらに強まり、数台のカメラが一斉に撮影を開始した。

「ンツ! くうう……」

強烈なライトの光に顔をしかめたゆきかぜの背筋を、妖しい昂りがゾクリ、と駆け抜ける。

(やだ、私の身体……犯されるのを期待してるの? 変……変だよ)

不安と羞恥心に苛まれる心とは裏腹に、魔性の調教を施された肉体は、陵辱快感を求めて疼き始めていた。

「んあ……くふう……やああ……つ……」

まだ何もされていないのに、ゆきかぜは悩ましげな呻きを漏らし、床にへたり込んだままの身体をモジモジとくねらせる。

彼女は、特に拘束されているわけではない。日常的に投与されている娼薬が身体能力を大幅に

低下させているのだ。

雷撃の対魔忍という異名で恐れられたゆきかぜも、今は陵辱に怯える無力な少女であった。

「お前にふさわしい責め役を用意してある。この男なら、淫らに仕上がったその身体の商品価値を存分に引き出して見せてくれることだろう」

まばゆい照明の向こうから、全裸の男が、のっそりと現れる。

「おやおや、お人形さんみたいに細っこくてカワイイ娘だなあ……今日は思いつき可愛がってあげるからね」

卑猥な笑みを浮かべながら歩み寄ってきたのは、不健康に肥満した体躯の大男であった。髪は乱れ放題、顔も下品そのものだが、股間の逸物だけは、異様な程の迫力を見せてそそり勃っている。

「ひあ……おつきい……」

少女の口から、無意識のつぶやきが漏れる逸物であった。

グロテスクに血管を浮き出させた浅黒い肉茎の太さは、ゆきかぜの手首程もあり、長さも三十センチ以上の暴力的な陵辱器官だ。

濃い紫色に鬱血した亀頭は、誇張抜きで少女の握り拳並のサイズで、先端のワレメに先走りの粘液を滲ませている。

(私……あんな男に……あんなに大きなチンポに犯されちゃうんだ……)

嫌悪感と同時に、それを遥かに上回る欲情のマグマが秘裂の奥からこみ上げてきて、ゆきかぜは対魔忍コスチュームに包まれたスレンダーボディを火照らせる。

しなやかに鍛え上げられた肢体はもろろんのこと、骨の髄まで娼薬を染み込まされた肉体は、わずかな性的刺激にも欲情の炎を燃え上がらせ、浅ましいまでに火照り疼いてしまうのだ。

「はあはあはあ……んっ……はああ……」

呼吸が荒くなり、瞳が熱く潤み始めていることに気づかず、奴隷娼婦に堕ちた対魔忍は、陵辱者の肉凶器に視線を絡みつかせていた。

さらに距離が詰まり、汗と性臭の入り交じった男の臭いが鼻孔にネットリと侵入してくる。

嗅覚の刺激が、少女の中にわずかに残っていた羞恥心に火を付けた。

「やつ、やあ……嫌っ！ くっ、来るなあ！」

威嚇の声を上げ、後ずさりしようとするゆきかぜであったが、まるで悪夢の中にいるかのように、身体に力が入らない。

「そんなに怖がらないで……捕まえたあ！」

自由に動かぬ小柄な肢体を振らせて抵抗をみせるも、大男にあつさりとおぼつかせてしまう。

「きやふうう！ やつ、放せええええ！」

悶える対魔忍の姿がカメラによく写るように、幼児の排泄スタイルで抱きかかえられた。

「ちっちゃくてカワイイおっぱいだねえ。感度はどうかな？」

小皿を伏せたようななさやかなバストが、対魔忍のコスチューム越しに荒々しくこね回される。

薄い胸板を覆い尽くした大きな手が、ささやかな乳肉を揉み軋ませ、深く突き立てられた指先が、華奢な肋骨にまで到達して掻き弾いた。

「んあ……んうううう……あつ……やつ……あんっ……だつ、ダメえ！ おっぱい……そんなに……ひやあう……はうううううんっ!!」

甘く悩ましげな声を上げたゆきかぜは、男の腕の中で身悶える。

娼業によつて常時発情を強いられた未成熟な肉体は、男の荒々しい愛撫に反応し、肉悦の底なし沼へと引きずり込まれてゆく。

「いい反応だね。貧乳だけど、敏感なんだな……も

う、乳首が勃っているじゃないか」

薄い布地をツンと突き上げて浮き出た乳頭と乳輪を、男の指が撫でくすぐり、小刻みに弾き上げ、摘んで揉み転がす。

「んやあああ！ 乳首ツ、敏感になつてるから、そんなにグリグリしちやだめええええ！ やつ、やめれええええ——！」

顔をしかめ、身体を振つて抵抗するゆきかぜの声は、あからさまな官能の震えを交えて、薄ら寒い撮影室内に響き渡る。

「その調子で、もつと声を出していいんだよ」

対魔忍コスチュームに包まれた小柄な肢体を背後から抱きかかえた男は、腕の中で悶え狂う少女の耳元に生臭い吐息を吐きかけながら、緩急交えた指使いで貧乳を責め立てる。

素肌にピッチリと密着したコスチュームの内部で、まだ生硬い芯の残る生育途上のバストが、歪み、軋み、掴み廻られて変形を繰り返す。

「んひい……あつあつあんっ……んやああ、もう、おっぱい揉むなあ……あふうううんっ！」

荒々しい愛撫に乱れ狂うゆきかぜの痴態を、数台のカメラが様々なアングルから舐めるように撮影していた。

カメラが捉えた映像は、ゆきかぜからよく見える所に設置された、複数の大型モニターに大アップで映し出される。

「ほら、見てごらん。お嬢ちゃんのエッチな顔やカワイイおっぱいの映像があそこに映つてるよ」

「ふあ、え？ えっ!!」

男に言われて顔を上げたゆきかぜは、数十センチの画面に大写しになった各部のアップ画像を見せつけられて、大きな目を見開く。

真正面の、ひととき大きな画面に投影されたゆきかぜの顔は、喜悦の涙に濡れ光る目を細め、日焼け

した頬を紅潮させて喘いでいる。

半開きになった朱唇の狭間で白い歯列がきらめき、糖蜜のような唾液に濡れた舌が、淫らな軟体生物のようにくねって、口腔から溢れそうになっている唾液を攪拌していた。

「……あ、あれが、私の……？ ……やつ、やああ、画面消してえ！ そんなの、見せないでえええ！ みんなも見るなああああ！」

自分の顔の異様なまでの艶めかしさにショックを受けた対魔忍の少女は、ツインテールに結われた髪を振り乱して叫んでしまう。

（私、すっごいエッチな顔になつてる。やだ、あんなの、絶対に私じゃない！ 嘘、ウソ、うそおとおお……!!）

「お嬢ちゃんのもつといやらしいところをいっぱい撮影して、お客さんたちに見てもらおうね」

一台のカメラが、M字開脚状態で恥じらい乱れる太腿の狭間に接近してきた。

「やつ、やああ、来ないでえ！ こんな恥ずかしいところ映しちゃ、ダメえええ！」

「抵抗しても無駄だよ……」

必死に閉じ合わせようとした太腿が、男の手で割り開かれ、限界まで開脚させられる。

鋭角に切れ込んだ股間に密着した股布部分が、アップで映し出された。

汗ばんだ褐色の太腿の狭間、女性器の輪郭を浮き出させた股布には、楕円形の濡れ染みがはつきりと見て取れる。

「なんだ、もう濡れてるじゃないか。もつとグッチョグチョにしてあげよう……」

長く太い男の巨根が、背後から、ズイッ！ と突き出され、対魔忍コスチュームに守られた秘部を圧迫摩擦する。

ずりゅっ……ずりゅっ……ずぎゅるっ……ぎぢゅ



……
ここが――

最奥……
ですか？

いざ……決戦の地!?

聖なる鈴の 啼くセカイ

最終話 享受する者達

漫画 COMIC こと 琴慈

また
魔法陣ね…

大丈夫です
今までの
パターンから
私の解呪方法を
応用したら…

でも…
いいの？「聖鈴」は
いらなくて
言ってたのに

ていうか

本当に
諦めちゃったの？
「聖鈴」のこと——

諦めたのでは
ありません
私には不要と
なっただけです

——あなた方
兄妹のおかげで

違いますよ
アイリさん

ワズ…

そして—
ご迷惑で
なかったら

私にも
お手伝いさせて
欲しいんです

たくさん
お世話になり
ましたし…

大したことは
できませんけど

そんな
あたし達の
方こそっ!!

—最後まで

最後…

…解きましたっ

じじゃあ
開けるわよ
……っ!



あーら
いらっしやい
お嬢ちゃん達

はっ？

なに…
何こじり？

何って…
私の自室よ

どうなって
……？

俺達
『聖鈴』の洞窟で
一番奥まで――

止前モコ
お嬢ちゃん達…

はあ？

いきなり
お姉様のお部屋に
乱入しておいて
何なんですかあ？

どちらも
正解よ

あの洞窟の
一番奥の封印を
解いたんでしよう？

あそこはね
最初からここに
繋がってたの

聖鈴の森の
酒場にある
私の部屋――…

……え……

つまり

ゴールにね♡

…あつ!!

どういうこと
……!?

淫妻まで…

お姉様…?

褒めてあげるわ
よくあそこまで
辿り着いたわね

それはもう
たくさん…

素敵な
いやらしい体験も
重ねてきたん
でしょう?!

呆

私の目的は
それよ

いわゆる
人間達の種付け作業

『聖鈴』は
そのいい餌と
いうわけ

う...ぐっ

!!

お兄ちゃ...
大丈夫っ!?

まあ♥
相変わらず
立派ねえ

あ...

あアツ

その可愛い
淫荳達も
私の補助よ

ど...

どうして

どうして
こんな...

あんた
一体...!?

それより
いいの?

お兄さん
苦しそう
だけど...

私が味わって
やっても
いいけれど…

それじゃ
意味が無い
のよねえ

…ぎゅ…

じぎなわんち…!!!

—お嬢ちゃんが
何もしないの
なら

あちらの

い…
言っとくけど

話はまだ…
おふあつてにゃいん
だからねっ!?

また…
お兄ちゃんの—

女神官さんに
お願いしよう
かしら

でも
他の人にさせる
くらいなら…

アイ…リ…ツ!

はっ...
はっ...
はっ...



違う...の
これは

ん...
ん...ぶ

お兄ちゃんを
助ける
ため

ぶ...
ぶ...
ぶ...

男を悦ばす
術もずいぶん
覚えたものね

最初会った時は
何にも知らない
顔してたのに

だ...め...っ

う...

うるひゃ...っ

.....
.....
.....

冷静に
なんか.....

ごんな...
お兄ちゃんの
啜えたままで

はっ...
はっ...
はっ...

はっ...
はっ...
はっ...

はははははは

は...♡

あ...っ

やだ...

あたし

どっどっ

あ...むっ♡

ん...♡

あっ♡

まも...ひ
い...っ...

フワ...

ひう...んっ♡

は...あ

おに...

ちゃあ...んっ♡

あたし...
こんな
エッチな
身体に...っ

お兄ちゃんと
何度もしたからって

ズッ
ズッ
ズッ

はははははは

何匹殺しても
気持ち悪いわね

汚らわしい
生殖豚どもめ

ふふふ

まったく…

早く絶滅して
くれないかしら

姉さんの
オーク嫌いは
筋金入りだな

プライド高い踊り子姉妹が
森で遭遇したのは……!?

墮淫の舞姉妹 マリア&カレン

とくめい
漫画 COMIC 匿名ヒーロー



な……
こ…これは…

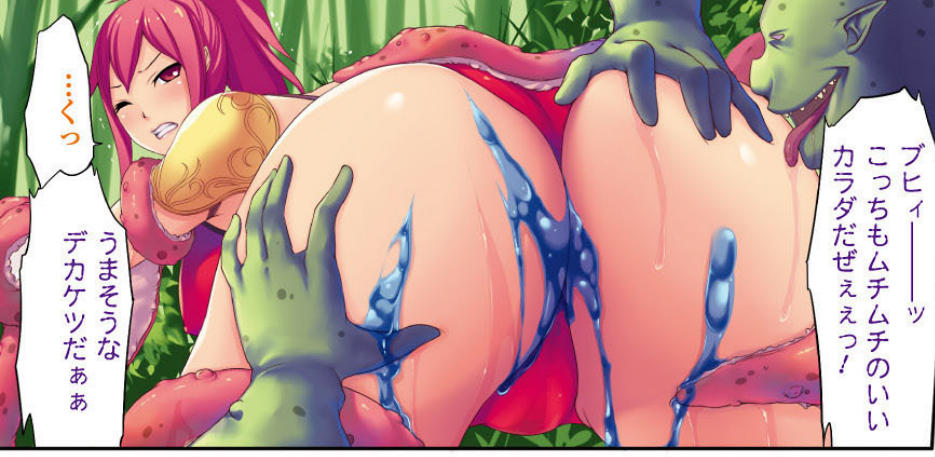


やったぜーっ

ひいっかかり
やがったあつ

ブヒヤハハハ





……くっ

うまそうな
デカケツだああ

ブヒィーッ
こっちもムチムチのいい
カラダだぜええっ!



放しなさいっ

ブヒャッブヒャッ
どうだ動けねエだろお

あいつの体ん中に触手らあ
仕込んだいたのよお



ブヒィッこんなデカ乳
恥ずかしくねえのかああ

くうう

スケベな乳イ
しやがってえ!

やめろっ

カラダが疼いて
どうしようもねエだろお

いい乳だああっ!

こ……このっ
殺すわよっ!

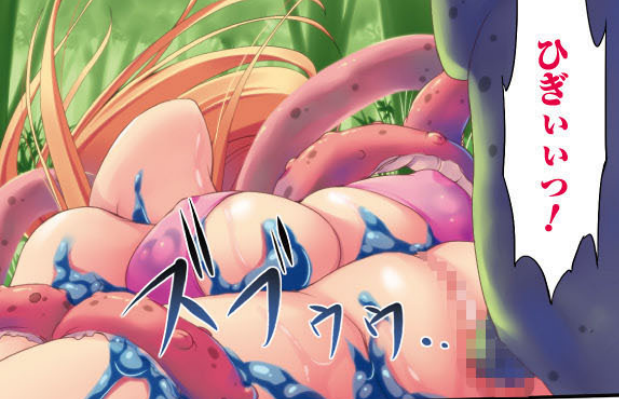
どうだよお
強力媚薬の味よおおっ

足ッ足イイッ

ブヒャー
マッコウめえっ

ニッ/キッ

ノッ



ひぎいっ!



ちよ……やめっ
ま…待ちなさいッ



処女マ コだあッ

放せッ

プヒヒヒッ
こつちも処女じゃねーか



あ
抜きなさいッ

初めてがオレ様で
嬉しいだろうがよお

や…やめッ

ブへへエツ
こいついい年して
処女だったぜえッ!



ああッ

処女のクセにでけえくりだな
オナニーのしすぎ
じゃねえのかあ



いい具合
だなああああ

すげえ締まるなあ
さすが処女おおッ

くろう……黙れッ
このフタがッ!



お前たち……
絶対に後で殺してやるからッ



異色のヒロインたちが贈る新連載！
R18の過激なTVシヨウ開幕！！

正義のヒロインと
悪の女幹部が
生中継でポロリする
ようですよ

第1話 鮮烈デビュー！
新人スーパーヒロイン VS 悪の女幹部！！

さか い ひとし
酒井仁

挿絵
ILLUSTRATION

SAIPACo.

小説
NOVEL

かつてその街に招待された高名なパーティシエは、特別に用意されたヘリコプターからその街を見下ろし、こう言った。

「上層にだけ豪華なデコレーションを施した、醜悪な生ゴミだ——」と。

彼の眼には何が映っていたというのか。

きらびやかにライトアップされた高級住宅地、世界各国の超有名ブティックにレストラン、ゴミ一つ落ちていないショッピングモール。

一流セレブが望むもの全てがそこにある。ただしそれは超階層構造によってそびえたつ大都市の最上階に限られたこと。

夜でも昼間と見まごうばかりに眩しい最上階のすぐ下は薄暗い中間層、そして街の大部分を占めている暗い部分には、貧困層が住むスラム街が茫漠と広がっている。

その街には全てがある。

金と権力、暴力と貧困、成功と挫折、そして、正義と悪。欲望の渦巻く大都会を、上層部に住むセレブリティは誇りを持ってこう名付けた。

シティグロリア——虚飾に満ちた偽りの栄光の街。

「皆様、本日はようこそ『市の平和と正義を考える会合』においでくださいました！」

男性のバリトンが響き渡ると同時に、大きな拍手が巻き起こる。

時刻は午後二時を少し回った昼下がりに。

ここはシティで最も豪華と称される国際ホテル屋上のアフタヌーンティーパーティー会場。

パーティー開始を告げたその男性は筋骨隆々と逞しく、礼装姿には似つかわしくないマスクで顔を覆っている。

一見怪しそうに見えるマスクの男性を眩しそうに

見つめる面々は、豪華なドレスに身を包んだ上流階級のマダムや紳士たち。いずれ劣らぬセレブばかりである。

このパーティーはただのティーパーティーではない。街の財政を支えるセレブ層と、街の治安と正義を守るヒーローたちの交流の催し。

そしてマスクの男性こそ「ヒーロー」の象徴。スーパージャスティス協会の会長、その名もキャプテンマキシマム。

「やあ、キャプテン。素晴らしいパーティーだね」

「これは市長、恐れ入ります」

ヒーローと握手を交わす痩せた男はこの街の市長。

言うまでもなく彼自身が大資産家の一人である。

その他、大企業の会長や美術収集家にIT企業社長などなど、そうそうたるメンバーと挨拶を交わすヒーローを、遠目に眺める目があった。

「見ろよ……やつこそさん必死だな。どうやら例の噂は本当らしい」

「ヒーローショウウ枠の時間短縮か？ 視聴率がめつきり振るわなとか」

シャンパングラス片手に談笑しているのは、やはり同じくマスクで顔を覆った男たち。

彼らもやはりヒーローであり、ジャスティス協会の会員でもある。そしてヒーローであるということはずなわち、彼らもキャプテンと同様、特殊能力の持ち主ということでもある。

「ああ、昔の連中はよかつたよな。適当に悪党を締め上げてりやみんな喝采してくれて、テレビでも大人気だったんだから」

「ぼやくなよ。まあ、ロートル連中の苦勞話を聞かされるのはごめんだけどな」

「違うない」

彼らとて本気で言っているわけではない。

今から約三〇年ほど前——新世紀初頭から人類

の中に突如現れた、突然変異による異能力者。

ある者は超人的体力を、またある者は風を、火を、電気や水さえも自在に操る能力を見せた。かと思えば、まったくなんの役に立たない能力者も多数存在した。

彼らは現人類から変異——メタモルフオーゼした新人類Ⅱ「メタモル」と呼ばれるようになった。しかし少数派であるメタモルは持たざる多数派から差別され、排斥され、迫害されるようになった。人類を敵視し、己の能力を使って犯罪に走る者も少なからず現れ、人類とメタモルの全面衝突は必至と思われた。

しかし。いかに差別されようともメタモルは生まれ、その数は確実に増えていく。そして対立ではなく人類と共存すべきと考えるメタモルも、決して少数派ではなかったのだ。

一部のメタモルは自分たちの力を社会貢献に使うと、「ヒーロー」として名乗りを上げた。そしてあらゆる犯罪に立ち向かうことで、自分たちの立場を築き上げていったのだ。

キャプテンマキシマムは、その最も古いヒーローの一人である。

「このパーティーもテレビ局からの提案だつていう話だ。ほら、あそこにいるの局の編成局長だぜ」

「おーおー、コメツキバツたよろしくへこへこしてらあ。ここんどこ、放送規制の締めつけがひどいからなあ」

「ひどい話だぜ。過度な暴力行為は禁止とか、悪党でも流血させたらだめとか、ヒーロー活動をなんだと思つてんだよ。こつちは命がけで街のために戦つてるんだぜ？」

「教育上よろしくないとか言われてもなあ……」

と、若きヒーローたちが現状を嘆いていた頃、彼

らの活躍をテレビで流す「ザ・ヒーローショウ」を冠番組としているグローリアTVも、まさにその問題で頭を抱えていたのである。

ショウの視聴率がずっと右肩下がりであることに、「キキキキミィ……ほ、本当に大丈夫なんだろうね」見るからに胃弱そうな上司の言葉に、プロロンド女プロデューサーは大きく頷く。

豪華なプロロンドに金属フレームの眼鏡。胸元からこぼれ落ちそうな巨乳に、タイトスカートから伸びた足を包む黒の網タイツ。その姿は、いかにも自信に満ち溢れている。

「お任せください、すでに上の許可は取ってあります。契約チャンネルでの規制はなきに等しいですし、今後の契約枠の大幅な拡張も見込まれています。さあ、まもなくです」

女プロデューサーの言葉が終わるか終わらないかのタイミングで、「それ」は起こった。

「な、なんだっ!?」

突如鳴り響いた爆音とともに、パーティー会場が地響きに襲われる。

大勢のセレブリティたちが慌てふためくも道理、シテイ最上階は完璧な防震構造になっており、それに加えてセキュリティは万全のはずだ。

ましてやこのパーティー会場には、多くのスーパーヒーローが出席しているのだ。そんなところにテロ活動を仕向ける悪党は、よほど知能に欠陥があると思えない。

だが、そのまさかの光景がそこにあった。

「ほ〜っほっほっほっ！ ほお〜っほっほっほっ！」

突如響き渡った高慢そうな笑い声は、確かに女のものだ。

「これはこれは、シテイグローリアの皆様方、お目

にかかれて光栄ですわ」

ひときわ目立つタワーの先端にすつくど立つのは、目元を赤いゴーグルで隠した黒装束の女。

Fカップはあろうかという大きなバストはむっちりりとポリウム感を見せつけ、さらにボディスーツの漆黒のコスチュームが、豊満なボディラインを惜しげもなく晒す。

ガーターベルトでつながったエナメルブラックのオーバーニーロングブーツのつま先は、問答無用のピンヒール。下肢の付け根ぎりぎりまで食い込んだコスチュームとブーツの間の「絶対領域」が目にも眩しい。

たおやかな両腕は黒長手袋に包まれ、内側を鮮血の紅で染め上げたマントとともにびく長髪は濃紫と、まさに大人の色気が爆裂している。

見るからに女王様然とした女の左右につき従っているのは、身長二メートルを優に超える大男……いや、よく見るとそれは人ではない。

「ギニャアアアアアアアアツツ！」

頭からつんと突き出た猫耳、尻からはしなやかな尻尾、大きく裂けた口からは凶暴そうな牙が突き出ている。

人身にして獣面、猫をモチーフにしたと思しき怪人である。

「あれは……見覚えがあるぞ。手近な動物などを素体に怪人を生み出すメタモル犯罪者！」

ヒーローの言葉にマスクの美女はにんまりと笑みを浮かべる。

「お見知りおきのようで光栄だわ、ヒーローの皆さん。そう、私こそが闇に生まれ落ちた悪徳の女王、犯罪組織メタパラノイアの女幹部、レディ・ペラドナナ!!」

「なんだとツツ……あれっ、メタパラノイアって、かなり前に首領が引退して解散したんじゃないや」

「か、解散じゃないっ、活動の無期限延期だ！ ええい、やっておしまいっ」

「ぎにゃあああつっ！」
猫怪人が宙を舞い、会場に降り立つ。悲鳴を上げる女性客をマスクのヒーローが庇い、強烈なパンチをお見舞いする。

「ふぎやあああんつつ」

「なんだこいつ……弱いぞ？」

パンチ一発で怯んだ怪人に、ヒーローたちはただちに落ち着きを取り戻す。レディ・ペラドナナといえど一〇年以上のキャリアを持つベテラン犯罪者だが、所詮は地方で悪事を働くマイナー犯罪者。

所属組織も活動休止状態、ピークはとうに過ぎた。二流の悪党だという記憶が、皆の中によみがえる。

「こいつ、身の程知らずにもほどがあるぜ。とつととやっちゃまおうぜ」

「ま、待て！」

だが、ヒーローたちを押しとどめたのは、誰あろうキャプテンマキシマムだった。

「その毛並み、首元を飾る宝石……その怪人は、まさか」

「ほ〜っほっほっほっ、さすがはマキシマム。ご察しの通りよ、その怪人の素体となったのは、この街有数の資産家であり、あなたのパトロンでもあるミセスパトリシアの愛猫エスメラルダよ！」

「ひいひい？ エ、エスメラルダちゃんなの？」
マキシマムの隣にいた肥満中年女性があるみる青ざめ、よろついた巨体を慌ててキャプテンが支える。

「ぎやああつ、宅のメリーちゃんがつ」

「ボ、ボナパルト〜ツツ」

会場のそこかしこで悲鳴が上がり、セレブたちの連れていたトイブードルや洋猫が次々と怪人化していく。

オードブルの乗ったテーブルをひっくり返し、ラ

イトを蹴倒しても、ヒーローたちは怪人を止めることができず立ち往生してしまふ。

「お、おい、どうする?」

「どうするって、攻撃できるわけないだろ! 街の名士たちのペットだぞ!!」

なんとという奸智であろうか、セレブの愛するペットたちを攻撃したら、後でどんなクレームが来るかわれたものではない。

シティの財政を一手に支えている彼らの不興を買えば、動物愛護団体を動かしてジャスティス協会に抗議運動をするなど、赤子の手をひねるより簡単なことなのだから。

ましてやヒーローショウの視聴率低下が止められない今はなおさらまずい。

「ぐぬぬぬ、卑怯なりレディ・ベラドンナ……」

「おろろっほっほっほっほっ!」
勝ち誇る女犯罪者に、さすがヒーローオブヒーロー、キャプテンマキシマムは違う。

セレブのペットから変態した怪人には目もくれず、会場の客たちを避難誘導することを選んだのだ。

「さあ、早く皆さんを安全な場所に!」

「そ、そうだ、俺たちの使命は人々を守ることだ!」

「人命優先、それは怪人退治より大事なことだ……」
他のヒーローたちもそれに倣い、暴れ回る怪人は一切無視して、セレブたちの避難「だけ」に集中する。

ベラドンナはただ、ペット怪人たちに命じ、会場を荒らすだけでよかった。

しかし――

「うりやああああああゝゝゝゝッツツ!」

勇ましい叫びとともに炸裂したキックが、猫型怪人を天高く吹っ飛ばした。

「な、なにいつ!」

ヒーローもベラドンナも目を疑った風景の中心に、

すつくと立った勇ましき少女がいた。

ふふんと鼻を鳴らす生意気そうな顔立ちは、まずまず美少女と言っていいだろう。

頭の両脇でくくったツイントールは鮮やかなピンク色。金色ハート型の髪飾りと胸元のアクセがいかにも少女らしく、スカイブルーの瞳がキュートでどこかあどけない。

それでいて胸元は十分に發育している。

張りのある乳房、すらりと伸びた下肢、きゅつと引き締まった腰のくびれに、青い果実のようなヒップが爽やかな色気を放つ。

若々しいボディの曲線を見せつけるのは、ヒーローが使用する特殊防護スーツのはずだが、髪と同じくピンクを基調としたコスチュームは、まるでベビードールのようなだ。

赤の手袋とブーツと相まって、どう見てもせいぜいベビーフュエイスの女子プロレスラーといったところだ。

ただし――得意げに胸を張っている本人には申し訳ないが、彼女に見覚えのある人物は、この場に存在しなかった、ただ一人を除いて。

「も、もしかしてあんたが……?」

「ちよつと、そこのおばさんッ!」

「お、おぼっ」

絶句するベラドンナに、少女はびしりつつ指を突きつけ、高らかに宣言する。

「悪あるところに正義あり。悪党を懲らしめるのはヒーローの使命! この街の平和を乱す奴は、あたしの拳が許さないッ! たとえ天が許しても……」

「……………」

「……………」

と――ここで妙な間が生じる。

どうやら少女は前口上をど忘れしたらしい。

悪の女王も、ヒーローも、ペット怪人でさえも動

くに動けない気まずい空気がじわりと流れる。

「……………」ええいつ! そんなこんなで、正義のスーパーヒーロイン、セイバードール・キティ参上!」

(こいつ……投げやがった)

とその場にいるほぼ全員が同時に思った。

「とにかく、あたしが来たからにはそんな怪人に好き勝手はさせないんだから! さあ、いくわよ!」

「ぎにやああああつっつ」

闘志をむき出しにする美少女ヒーローに、ペット怪人たちが一斉に襲いかかる。

だが、甘やかされて育てられた金持ちのペット素体の怪人の基本能力など大したことはない。猫型怪人が叩きのめされるのを見て、気絶していたはずの肥満中年女性がきいっつと叫んでマキシマムの腕を振り払う。

「宅のエスメラルダちゃんに、何するぞますか、この貧乏人の小娘えゝゝつっ」

「ひえっ? ぶ、豚怪人!」

とつさに身をひねってかわした拍子に肥満女性は転倒し、猫怪人と折り重なって昏倒する。

「もう、危ないから一般人は邪魔しないでよ。さあ、どんだんかかってきなさい!」

どかんっ、ばきっ、どおんっ。

キティのパンチやキックは面白いように決まり、怪人たちは次々と倒され、キティは得意満面で、その他のヒーローたちはみるみる青ざめていった。

「ど、どこの田舎から出てきた小娘だよ……おい、キャプテン! あいつ早く止めた方が」

「う、うむ」

「その必要はないわ!」

キティを制止しようとしたキャプテンを押しとどめたのは、ブロンドの女プロデューサー。

「ど、どういうことだね……む、カメラを入れたのか?」

見るといつの間準備したのか、テレビカメラがパーティー会場に搬入され、怪人相手に暴れる女ヒーローをばつちり撮影している。

頃合いよしと見たのか、女プロデューサーは自らマイクを片手にカメラの前に飛び出す。

「さあ皆様ごらんください。シティグロリアの名士が集うパーティーに突如現れた悪の女幹部、レディ・ベラドンナと怪人たち！ 並みいるヒーローたちも手をこまねいて見ているしかないこの状況に、颯爽と現れたニューヒーローイン、その名もセイバードール・キティ！」

「手をこまねいて、それは……」

「シャラップ！ 視聴者の皆様、正義と悪とのヒーロー対決の火ぶたは、たった今切られたところですが、彼女たちの本当の戦いはこれから！ かつてのヒーローショウでは決して見るのできなかった『特別の』『大人の』対決が、いよいよ今夜放送されます！」

さながら格闘技の実況よろしく熱のこもったプロデューサーに、キャプテンマキシマムも他のヒーローも呆気に取られている。

「放送は本日深夜〇時、特別契約チャンネルでのみ放送いたします。なお、この番組は特別チャンネル視聴をご契約なさっていない方、および未成年はご視聴できませんので、くれぐれもご注意ください。それでは『ザ・ヒーローショウ・A』にご期待ください！！」

きらりつとウィンクをよこし、撮影中を示すカメラのランプが消えると、プロデューサーはふうつと肩を落としプロンドの髪をかき上げた。

「ど、どういふことだねキミ！」

「どうもこうも、さつき言った通りよ。あなたたちもういいわ！ 今夜のショウまで指定された場所待機しててちょうだい！」

「ふん……まさか私の相手があんな小娘だなんて、舐められたものね」

ベラドンナがひゅうつと口笛を吹くと、ペット怪人たちは「ぐるるる……」と不気味な唸り声を上げ、その姿はみるみる小さくなっていく。

ベラドンナのメタモルによって怪人化していたのが解け、元の大人しいペットに戻ったのだ。それを見届けると、黒マスクの悪の美女はくりりと背を向けパーティー会場を後にした。

成り行きがまったく理解できないヒーローたちは、あつさりとそれを見送ってしまう。

「まだ暴れ足りないけど、本番は今夜のお楽しみってわけね……ふんっ」

ピンクの髪の子ヒーローもその後を追うでもなく、ひよいと肩をすくめると目の覚めるような跳躍を見せ、その場から立ち去っていった。

後に残されたのは、さっぱり事情を理解していないキャプテンマキシマム、そしてその他のヒーローたちだけであった。

「……………なんだったんだ、ありゃあ……」

*

ティーパーティー襲撃から数時間後。

カンカンと踵を打ちつけるように階段を上がってくる足音が二つ。分厚い扉の前で足音は止まり、ガチャガチャと鍵を開ける音がして扉が開く。

そこに並んで立っているのは二人の女性。茶髪の方は少女と言ってもいいくらい若く、女生の象徴、セーラー服を身につけ、ずいぶん大きな

ボストンバッグを軽々と提げている。

もう一人、黒髪の女性は女性物のビジネススーツをかつちりと着こなし、飾り気のないキャリアークラスを引いている。顔立ちには意外なほど若い、雰囲気は大人の女だ。

二人とも、標準以上に整っている美少女と美女だ

が、不幸なことに彼女たちの表情は不機嫌そのものだった。

「なんで……」

「どうして……」

同時に口にした美女たちは、ぐつと言葉を詰まらせた後、再び同時に口を開いた。

「あんたと一緒に住まなきゃいけないのよおおつつつ！」

「うるつせえぞ！」

近くの安アパートメントから投げかけられた男の言葉に、彼女たちは肩をすくめ、それぞれの荷物を持ってどこかかと室内に入ってくる。

ここはセレブたちが暮らす最上層からずつと下がった……とはいえスラム街からはそこそこ離れている——中間層のアパートメント。

そして大きくもないワンフロアの賃貸住宅。

玄関を入れて左にバスルームと手洗い、右側がキッチンになっている。

奥のメインルームは簡単にカーテンで左右に仕切られるようになっていたが、カーテンはかかっていない。ちょうど左右の壁に二つのベッドが対称に置かれていた。

典型的な二人向けシェアルーム、この契約者の名義は「グロリアTV」。

「つたく、信じらんない！ グロリアTVって大手テレビ局でしょ？ なんて出演者がルームシェアしなきゃいけないのよお」

向かって左側のベッドにさつさと陣取るや、ボストンバッグを開けて中身を出しながら文句を言うのは茶髪の少女。

じつはグロリアTVからの出演依頼を受け、今日、このシティグロリアに到着したばかりの地方出身者である。

名前をキャサリン・グレイス……ハイスクールを



卒業したばかりのぴっちびちの一九歳。

しかしてその正体は、ピンクの髪で怪人を軽々とぶっとばすメタモル能力者、セイバードール・キティその人であった。

「しっかも、ヒーローと悪党がルームシェアとか、マジあり得ないんだけど」

嫌みつたらしく振り返ったその顔が、驚きに染まる。スーツ姿の美女が下着姿で背中を向けていたのだ。

「ちよっ」

黒の下着のセクシーさに思わず目をそらす。

プロポーションなら少女も多少自信があるが、あつちの体型も負けず劣らず一級品。しかも少女にはない大人の色気がある。

（くそっ、おばさんと思つて油断した……）

ちら、とベッド回りに目をやる。

壁にかかっているスーツは僅かな歪みもなく、化粧ポーチは枕元に置かれ、キャリーケースは窓際に立てかけられている。

（なんか、悪党にしては妙に几帳面な女ね……：スーツなんか着てるとただの勤め人にしか見えないし。調子狂っちゃうわね）

つい数時間前、きわどいコスチュームで怪人を暴れさせていた女幹部とは思えない。

黒髪の美女は悪党呼ばわりされたことなどまったく意に介さない様子で、少女に一瞥すらくれず、ベッドに潜り込んで向こうを向いてしまう。

「ちよっ、なんなのよその態度は……」

「言つておくけれど」

振り向きもせず、有無を言わせぬ口調で言葉を重ねる。

「私の財布や貴重品はキャリーケースの一番底の簡易金庫に入ってるわ。私以外の人間が開けようとしたら催涙ガスが噴射されるからそのつもりで。もつ

とも、ケースに手をかけようとしたら、間違いない私は目を覚ましますけれど」

よく通る声でそれだけ口にする、程なくすうすと安らかな寝息を立て始める。

「ちよっ、それつてどういう……」

「今夜、本番だつてことはさすがに覚えているわよね、その軽そうなおつむでも。いいこと、私は今のうちに身体を休めておきたいの。あなたが寝不足だからつて、私は一切容赦しないから、そのつもりでね。ルーキーのお嬢ちゃん」

寝たんじやないのかよ、という言葉をぐつと飲み込んで、少女は先ほどの美女の言葉を思い出す。

そして、真つ赤になつて切れた。

「なんであたしがつ！ スーパーヒーローが悪党のカバン探つて財布盗むのよおっ！」

捨て台詞を吐くと、スイッチを壊さんばかりの勢いで明りを消し、ベッドの中に飛び込んだ。

（落ち着けあたし、こんなの軽い挑発、ヒーローは常に冷静でいなきや。それに、こいつの言うことももつともだし……）

そう、彼女と同居人は今夜〇時、「ザ・ヒーロー

ショウ・A」に出演し、そこで対決する。現場に行く時間を考えれば、今は身体を休めるのが先決だ。

（ヒーローショウ・Aつてどういう番組なんだろ……それにこのおばさん、レディ・ペラドンナとかいつたつて？ なんてよりよつて敵と同居しなきゃいけないのよ……いくら予算が足りないからつて）

そう。

彼女がスーパーヒーローであるのと同様、この嫌

みな同居人の正体は、パーティー会場で怪人を生み出した悪

の女幹部レディ・ペラドンナ。

不条理を感じつつ、キャサリンにはここで引くわけにはい

かない事情があつた。

（あたしは……あたしは超一流のスーパーヒーロー

に、みんなの人気者になるんだ……！）

それが彼女の幼い頃からの夢であり、目標。

彼女がメタモルを誇りに思い、己の力を正義と平和のために役立てるよう教えてくれた家族との大切な絆。

（そのために、完璧なデビューを果たすんだ。こんなおばさんはさつさとやつつけて、もつと有名な悪党と戦つて、ヒーローランキングを駆け上つてやるんだから！）

部屋の反対側で静かに眠っている女幹部がどういう気持ちでいるのかなど、キャサリンにはなんの興味も引かれない。

明日のナンバーワンヒーローの夢を抱きつつ、少女は今夜の戦いのために眠りに就いたのだつた。

＊

「本当に大丈夫なんだろうね、ナタリーくん」

心配そうな声を漏らす制作局長を振り返りもせず、

真紅のスーツを着こなした女プロデューサーは食

入るように画面に見入っている。

「この企画が万一コケでもしたら、キミの首だけでは済まない事態になる可能性も……いや、最悪我が

グローリアTVそのものの存続すら危ぶまれる事態に」

「現場はどう？ 二人はもうスタンバつてるわね。

カメラ配置、抜かりないわね！」

「幸い、パーティー会場で怪人にされたペットの怪

我は大したことはなかつたようだが……またあんな

トラブルは起きないだろうね？」

「局長、少し黙つててください！ 賽はもうすでに

投げられているんですよ、契約チャンネルの登録者

数は予想の二・三倍、一〇万人単位の市民が前代未

聞の新番組「ザ・ヒーローショウ・A」を見るため

に、テレビの前にいるんです」

「し、しかし……」

明らかに主導権を握っているプロデューサーのインカムに、タイムキーパーからの声が飛び込んでくる。

「番宣、残り三〇秒で終了します。タイトルロゴ明けて本番開始です」

「オーケイ。ショウ・マスト・ゴー・オン！」

キューとともにモニターに現れる「ザ・ヒーロー・ショウ・A」の文字。

いつもは不定期に現れる犯罪者と、駆けつけるヒーローとの戦いを編集したものが流されるのだが、今日は生放送だ。

編集済みの映像を流すのではないから、ナレーションや煽りロゴは入らない淡々とスポンサーロゴが流れ、深夜の街の風景が映し出される。

（この緊張感……感じる、視聴者が固唾を飲んで見守っているのが。これは……当たるわ!）

女プロデューサー、ナタリー・ヘントマンの予想通り、最初の一分で即時集計、発表される視聴率は彼女の予想をはるかに上回っていた。

「来たわ——! カメラ、鉄塔の上、抜いて!!」
ナタリーの指示でカメラがズームすると、そこに佇むのは特殊ヒーロースーツに身を包んだ、ピンクの髪の少女。

幼さの残る顔にはやや緊張の色がある。

しかし口元にうつつら浮かんだ笑みは、これから始まる戦いへの期待を物語る。少女の碧の瞳が下方に向けられ、黒い影を三つ捉える。

「来たわね、おばさん……夕方のあれはちよつとした挨拶代わり。これが、真正正銘! セイバードール・キティの華々しいデビュー戦よッ」

びしっ、と指を突きつけ高らかに宣言するスーパーヒロイン。突きつけられた黒装束の女は、少女を一瞥するや「はんっ」と鼻でせせら笑う。

「あいにく、こっちはあんたみたいな小便臭い小娘

はお呼びじゃないのさ。悪の女幹部一筋一〇年のキャリアにかけて、とつとあんたをぶつ潰させてもらうよ!」

「ぎにゃあああああああ!」

レディ・ペラドンナの左右に控えた猫型怪人が威嚇の唸り声を上げる。

（あいつの能力は動物を怪人化して使役することか。手の内を晒すなんて、ベテランって言っても大したことないわ。一気に片を付けてやる!）

大きく膝を曲げるや、ピンク色の矢が深夜の空に飛び出した。

くるりと空中で一回転し、狙いを定めるや上空から稲妻のようなキックを繰り出す。だが、キックが命中する寸前、猫怪人はひらりとそれを華麗にかわす。

「なにっ!?!」

「おっつほつほつほつ、甘いわね小娘。その子は金持ちのペットなんかじゃない、下町に暮らす野良猫が素体なのさ! 怪人化した時の身体能力はけた違いだよ!」

「そういうことか……でもっ」

蹴りをよけられた瞬間、キティの意識は切り替わっている。襲い来る爪を右に左に避けつつ、間合いを計りながら怪人の隙をうかがう。

怪人たちは小柄なキティをくみしやすすと踏んだのか、前後から挟み撃ちにしながら何度も威嚇攻撃を繰り返す。動物の脳では目の前の少女が強敵に見えないのだろう。

「バカ、遊んでるんじゃないよ、さつさと仕留めな!」

女幹部の鋭い叱咤に怪人の目がギラリと光る。

威嚇から攻撃に転じる時に生じる一瞬の隙を、キティは見逃さない。

「スナイプ・ショットツツ!」

低い姿勢からのストレートパンチが怪人の腹に突き刺さる。

驚異の動体視力で相手の無防備な部分を見切り、そこに弾丸のように鋭い突きを叩き込む、キティの必殺パンチだ。

「続けて……ネットワーク・ハント!」

二つ折りになった怪人には目もくれず、すかさず背後の巨大猫の首筋に閃光のような回し蹴りが炸裂する。

無論、ただの回し蹴りではない。狙うは側頭部ではなく延髄。神経の密集した延髄に猛烈な回転力を与えた蹴りを振り込むことで、相手の昏倒と無力化を狙う必殺キック。

さながら死神の刈り取り鎌のように怪人の首をなぎ払う強烈な一撃に、さしもの猫怪人の巨体もぐらりと揺れる。

（今ので崩れないか……こいつら、思ったより頑丈みたい）

キティは単に格闘に精通しているだけではない。メタモル能力によって反射神経も筋力もアップしているのだ。

だが、彼女のメタモルは基本的に身体能力の飛躍的向上のみ。他の能力がないではないが、あくまでもおまけ程度のものだ。

一撃を食らった怪人たちは、キティの思わぬ強さに警戒を強め、ぐるると唸りながら距離を取る。

さつきのように簡単には攻撃を当てさせてはくれないだろう。怪人の背後でひゅんひゅん鞭を振るペラドンナの動きに気を配りつつ、戦闘は少し膠着状態になる。

その様子の一部始終を見ていた女ディレクター、ナタリーは眉根をひそめた。

「ちっ、ルーキーなんだからもつとガンガン攻め込

みなさいよ……瞬間視聴率は！」

「戦闘開始と同時に少し上がりましたが、今はじわじわ下がってます！」

通常の中継ではここまで頻繁に視聴率をチェックすることはあり得ない。だが、今回だけは特別だ。スタッフにも緊張が走る。

「な、ナタリーくん……」

不安げな声を漏らす上司に、敏腕プロデューサーの脳髓がフル回転する。

「ちよつと早いけど仕方ないわね……ペラドンナに例のモノを使うように言ってる。それから、キティのコスチュームのあれを！」

「了解ッ」

コスチュームのあれ？ 例のモノって？ 質問したいことは山とあるが、ナタリーはスタッフに次々と指示を出し、とても聞ける状況ではない。

そしてもちろん、怪人とバトルを続けているキティも、そんなテレビスタッフのやり取りなど知る由もなかったのである。

「はあつ、とおうっつ！ 怪人つっても所詮はケダモノね。攻撃のパターンさえ見切れればどうってことないわよ！」

「ぎゃひいひいっつ」

「ク……二匹で連携して攻撃するのよ！」

強烈なドロップキックをまともに食らい、吹っ飛ばす猫怪人。怪力しかないとはいえずすがはヒーロー、徐々にキティの方が優勢になっていく。

歯噛みするペラドンナは、耳に差し込んだイヤホンからの指示に耳を貸し、にやりとほほ笑んだ。その豊富な胸元で深い紫のペンダントが不気味な輝きを見せた……。

「さあつ、そろそろとどめといきましょうか！」

二匹の猫怪人を追い詰めていた美少女ヒロイン、

セイバードール・キティがぐつと拳を握り締めた時ヒュッと口笛が鳴った。

「ニャギャアアンッッ」

怪人たちはキティの頭上を飛び越える大跳躍を見せ、しゅたつとペラドンナの前に降り立つ。

怪人の背に両手を当てたペラドンナのペンダントが奇妙な光を放ち、女幹部はなぜか余裕の笑みを浮かべた。

「な、なに……？」

「ギャニャ？ ぐるるるる……フギャオオオオオオオオオオオオオッッッッ！」

ぼごつ。

ぼごぼごつ、びきびきびき……ッ。

猫怪人の肩の筋肉がぼごりと盛り上がり、身体が一回り大きくなる。

尻尾が大きくうねつたかと思うと、妖怪猫又か何かのようにぱりぱりと裂け、二本が増える。口は獠猛に耳まで裂け、むき出しの牙がさらに長く、さらに危険度を増す。

明らかに——怪人たちはパワーアップしている。でもなんで？ こんなことできるなら、最初から

してればいいじゃない？

「クッククック、そうよ、この子たちをパワーアップさせたのは私のメタモルだけの力じゃない。このペンダントの効果なのよ」

ぐい、と突き出したペラドンナの巨乳に輝く紫のペンダントからは、特殊な周波数の振動波がペラドンナの細胞一つ一つを活性化させている。

その効果によって、生き物を怪人化するというペラドンナのメタモルが強化されているのだ。

「そう……彼女のようなピークを過ぎたメタモルでも一時的に能力を底上げすることができる禁断のシステム、それがSOKOII AGESシステム！」

モニターを見守っていたナタリーが満足げに頷く。

「SOKOII AGESシステム!!」

驚く制作局長をよそに、ナタリーはインカムを通じてペラドンナに指示を飛ばす。

「ペラドンナ、この番組の企画趣旨はわかっているわね？ テレビの前の市民たちの度肝を抜いてやりなさい！」

ナタリーの指示に応えるように、強化された猫怪人が咆哮する。キラリと黄色い眼をキティに向けるや、先ほどとは比べ物にならないぬ身のこなしで爪を振り上げ襲いかかってきた。

「ひゃっ！ た、確かにスピードは上がったみたいだけど、その程度なら……ええええっ!!」

紙一重で獣の爪をかわしたはずのキティの胸元が大きく裂けていた。ぷるるんつ、とたわわな肉球がこぼれ落ち、たつぶりの重量感で揺れる。

饅頭のような真つ白な肌に、ぼちりとピンク色の突起が眩しい。

「ななっ」

やられたのか、と思ったが少女の肌には傷は付いていない。それによく見れば、コスチュームが破れたわけではない。

ヒーロー用特殊防護スーツのつなぎ目部分が外れ、真つ白でシミ一つない乙女の肉球が露わになっていたのだ。まるで——あらかじめ脱げやすいように細工されていたかのように。

「きゃあああああああああああああ！」

真剣バトルの真つ最中だというのに、キティは両腕で胸を隠し、その場にへたり込んでしまう。

「ななっ、何よこれ、なんなのよお！ ちよ、ちよつとタンマ！」

「何がタンマか、ポケ小娘！ いいからひん剥いちまいな！」

「ひいひいんっ」

なお襲い来る猫怪人の爪をかううじてかわすも、



オイッ
紫乃ッ!!

どこに
行くんだよ

学校だ!!

委員長なら
家に結界を
張ってあるから
大丈夫だ

それに
悪霊は...

私に用がある
みたいだな...



さっき部屋で
感じた強烈な
重圧...

まるで目の前で
迫って来たように
感じた...



悪霊の気配を感じ、
紫乃たちが向かった先は学校!!

紫乃

退魔剣士

第三話

漫画
COMIC

NO. ゴマス



な…

何だ
こいつらは…？

行方不明になった
生徒達の魂は奴らに
吸収されてしまった
ようだな…

こいつらは
ただの使い魔…
どこかに本体が
いるはず…！！

…か
神人…

ん？

こいつらを退治して
全て終わったら…
その…

…昔の…
約束…



？

約束…？



うわあ

来たツ！！

神人には
近付けさせぬぞ！！



とっ
とにかく！！

後で大事な
話があるのだ！！

なぜ
赤い…



!!!

す…

凄^すげえ…!!

これが本当に…

あの泣き虫だった
紫乃なのか…

魔物や悪霊を
封じ込める
力を持つ

「退魔刀」か…
いい刀だ…

ククク…



こいつが…
親玉か…!!

小娘とはいえ
天火の退魔師の
血を引くだけの
ことはある

少々甘く見ていた

我が
使い魔共では
この程度が限界か…



クク…
いつ…
何時振りだ…

この姿を
晒すのは…

お…



積年の恨みだ…
貴様はここで
簡単には殺さぬぞ

この男が大事なら
刀を下ろせ…



神人!?

我が一族は…

古来より
天火の名を持つ退魔師に
苦しめられてきた…



うわああッ!?



神人には
手を出すなッ!!

やめる!!

や…



この男の命と
引き換えに
ゲームをせぬか?

何ッ…

ククク…

どうだ…天火の
退魔師よ…



この小僧の心臓には
我の意思を宿した棘が
巻き付いておる

既に彼奴の命は
我の手の中だ

そう…
天火の退魔師を
尋めるための余興さ

よせ紫乃!!
オレのことなんて
構わないで
コイツを…

天火よ…
貴様の存在を
この街で感知した時から
この余興は始まっていたのさ

貴様等と共にいた女…
我が使い魔と交わった時
同じ棘を既に体内に
宿してある…!!

そんな…

委員長まで…

フン…

威勢がいいな
小僧…

さあ…
どうする??

二人の命を
取るか…

それとも…

!!?
おいッ紫乃…ッ

神人!!

…わかった

…

…いいんだ…

…

あれから3日後

こ…こんなとこ
…あんツ

誰かに…んツ
みられたらあツ…

—期間は
一週間…

やつ…らああツ

そこツ…だめえ…
ん…

んツ♥

は…恥ずかし…
ひツ…いい…

とろっ

貴様は学園の
男共の相手をし
交わり続けるのだ

そして
その子宮に札の力で
精子を溜め続ける…

こんなツ…
あツ

はっ…ひいんツ

んツ

んツ

んツ

ぬはあ川

んツ

恥ずかしい？
何言ってるんだか
自分から誘って
きたくせに…

お…お願いが
あるのだ…

あの時は
驚いたよなー！

転校生の紫乃ちゃんが
いきなり禪姿で誘ってくる
なんてさ…

誰でもいいからッ…

紫乃の子宮に
精子…くださいッ

て…でもオ…

中庭で…
誰かに見られたら…

俺らが囲んでいるから
誰にも見られやしないって

それより見ろよ
こんなトロトロで
ほぐれてきたぜ…
そろそろ入れるか♥

やああ…

扱げないでくれ…

うう…
神人以外の男に
恥ずかしいところ
見られるのも
嫌なのに…

はっ

著者近刊好評発売中!



KIRARA★KIRARA

きらら★キララ

魔法少女つてたいへん!



みんなで楽しいクリスマス会!
しかし今回もエッチなピンチに!?

第12話 聖夜の悪夢 魔法少女の変容

小説 さかき傘 かさ 挿絵 浅沼克明 あさぬまかつあき

登場人物紹介



十萌きらら

使い魔エマの力で変身する金髪ハーブの少女。“マカイジュの種”に取り憑かれた人々を救うために戦う。



小浜ライカ

きららの親友。ボーイッシュなショートカットの活動的な女の子。



平坂ミサト

きららの友達のみひとり。胸も大きく、体つきも大人びたメガネの少女。

国鳥タダシ

きららの幼なじみの元気な少年。よくケンカするが、実はきららに淡い恋心を寄せている。

佐山アキラ

きららの同級生のキザな男子。マカイジュに操られキララの処女を奪ったことがある。

宮代俊哉

根暗なクラスメイトの肥満少年。かつて、アキラとともにキララを襲ったことがある。

前号までのあらすじ

私立星宮第二学園に通う女の子、十萌きららは、使い魔エマとともに“マカイジュの種”と戦う魔法少女・マジカル☆キララである。種にとりつかれ欲望を暴走させる人間たちからエッチな目にあわされながらも、この世に散らばる100個の種を回収するまで、キララの戦いは続くのだ!!

目をしばしばさせながら、起こしてくれた大声の主を見上げた。
 「おそよう」
 腰に手をあて、長い長い金色の髪をふわふわ揺らして怒る少女。
 やんちゃな猫のようにくりんと丸く、端っこだけツリあがった気の強そうな双眸。通った鼻筋は意志の強そうな目を強

十二月十七日——。
 気温氷点下の寒空も、冬休みまであと三日という気分が楽にしてくれる。きららとタダシは今日も二

泣いている……。
 お気に入りの花柄ワンピースにあちこち泥をつけられて、少女がぐすぐす鼻を鳴らしていた。
 長く伸ばしたブロンド髪が揺れている。ふくふくしたほっぺに涙が伝い、見ているとなぜか罪悪感のようなものが湧いた。
 「もう泣くなよ」
 「うえええ……だつてえ」
 ぐすぐすと鼻をすする少女。
 どうしたもんなかな。少年は肩をすくめる。
 泣いている女の子の子を、ましてや幼なじみを放っておくなんてできないし。けれど泣く子を簡単に元気づけられるほど少年は器用ではない。慰める言葉が分らず、なにされたんだ？ 小首をかしげる。
 少女はぐすぐす鼻を鳴らす。
 やつぱりというべきか、告げられたのは髪のことだった。人目を引いて、意地悪な男子も呼び寄せてしまうブロンドをからかわれたらしい。少年は「またかよ」とため息まじりに、
 「気にするなって言ってるだろ」
 くしやつと長いブロンドを撫でた。
 「俺は好きだぞ、この髪」

「……ほんと？」
 涙が膜したブルーの瞳がするように見上げてくる。小さな体は長い髪にすっぽり包まれて、捨てられた子猫みたいだった。少年は苦笑がちにポケットに手をつっ込み、
 「ほら」
 「わあ……」
 持ってきておいた、大きなロリポップを取り出す。甘いものが大好きな少女は目を輝かせ、
 「うまいか？」
 「うんっ」
 もう笑顔になった。
 単純なやつ。また苦笑しつつ、笑みを移された少年は、そんな彼女の手を引く。
 「行くぞっ、きらら」
 「うんっ、ただし君」
 「タダシッツッ！」
 大声に驚いたタダシは布団を蹴って飛び起きた。一秒後、ものすごい冷気に刺され包まりなおす。

☆

目をしばしばさせながら、起こしてくれた大声の主を見上げた。
 「おそよう」
 腰に手をあて、長い長い金色の髪をふわふわ揺らして怒る少女。
 やんちゃな猫のようにくりんと丸く、端っこだけツリあがった気の強そうな双眸。通った鼻筋は意志の強そうな目を強

調し、ふつくらしたほっぺの白さから、押しつけのないコントラストで色づいた、美味しそうな色合いの口唇が目を引く。
 見慣れた顔だった。
 「おはようきらら。……あと何分？」
 「十五分」
 「おー、じゃあ五分はぬくぬくできる」
 「おーきーなーさい！」
 また横になろうとするタダシだが、きららはお見通しとばかり布団の端っこを掴んでいた。
 引つ張り抜かれてしまい、少年は十二月の殺人的な寒さへ落とされることに。
 「早く着替えてきなさいよ」
 ささっと布団を折りたたんで、部屋を出ていく。残された少年は小さくため息をつく。
 世話焼きなのはありがたいけれど、すっかり遅しく、口うるさく育ってしまった彼女。
 あの泣き虫で、可愛い幼なじみに会えるのは、もう夢の中だけみたいだ。思うと切なかった。
 「あ、それとタダシ」
 ガチャツとまたドアが開いた。
 「鉛、もつてない？ 朝から喉が痛くて」
 「えっと、ほい」
 ベッド脇に置いてあるお菓子袋の中から、キャンディをひとつ取って放り投げた。
 「やった、苺ミルクト」
 嬉しそうに口に放り込むきらら。
 「甘いもの好きは変わらないか」
 そんな彼女に、こちらもあのころと変わらず笑顔を移されながら、少年はベッドを抜けた。

人肩を並べて登校していた。
白い吐息を弾ませる二人。
話題は当然のように冬休み——ひいては一週間後の一大イベントに向く。

「今年はサンタさんに何もらおっかな」
スキップに近い浮かれた足取りのきらら。
一週間後は二十四日。クリスマスである。

「まだプレゼント決めてないのか？」
「迷っちゃってさ」

「早くおじさんに言つてやれよ。ギリギリじゃ間に合わないぞ」

「お父さんも言つてた。……なんでサンタさんにもらうプレゼントをお父さんたちに言うんだろ？」

「……サンタにも都合があるんだよ」
そろそろクラスの九割が気づいている赤帽子の正体について、一割のほうらしい、楽しそうな幼なじみに。タダシは口角を緩ませる。

「それより、もらうばっかじゃなくてあげるほうも考えとけよな。十日後だぞ」

「なんだっけ？」

「俺の誕生日だよ！」
「分かっているって、ちゃんとお小遣い貯めてます」
今度はきららがクスクス笑う番だった。

他のみんなにとってイベントはクリスマスと年末くらいだが、二人にはもう一つ大事な行事がある。二十七日がタダシの誕生日なのだ。

夏のきららの誕生日には、リボンをもらえてすごく嬉しかった。ちゃんと覚えていたので、ちょうど昨日、貯金箱の蓋を開けたところだった。

そうこうしているうちに学校についた。

「あつ、きららちゃんこつち来て」
おはようもまだなのに、教室の隅っこに集まっていた女子数人が、ぱたぱた手招きしてきた。

「姫妃、ナナ、ライカ、ミサト。仲のいい女友達の輪だ。寄っていくきららとタダシ。」
——ウヴウヴ……。

「？」

誰かの携帯が鳴ったような——？
だがすぐに音など気にしていられなくなった。女子たちの中に一人いた、男子を見つけて凍りつく。

「よつす十萌。今日も寒いな」
「つ……、う、うん。おはよう佐山君」

きららは微妙に顔を赤く。比例してタダシは苛立たしげに顔を険しめる。

一度ならずその身を陵辱した相手との、どう接したらいいか分からない微妙な関係は、秋が過ぎて冬になつても続いていた。

むしろ悪化の一途をたどっている。佐山アキラはきららにとつて、確かに処女を奪い、その身を汚した汚辱魔ではあるのだが、いまはその記憶がなくなったのクラスメイトである。邪険にもできず、いつもそれとなく避けるしかできなかった。

夏休み明けの態度を変えたばかりのころはアキラも戸惑っていたが、最近では逆に以前以上にアプローチしてくるようになった。

「……へへ」

オスの獣性に満ちた目で見据えられ、きららは身を小さくしてしまう。頬は寒さだけでは説明がつかないくらい赤くなつていた。

少女の見せる、怯えの中にある『女』の微熱分を生来のたらし少年は着実に見抜いている。

「……なんか用かよ」

捕食者の目から庇うべくタダシが間に入った。

「あのね。来週クリスマス会があるでしょ。それでアキラ君が夜も集まるうつていうんだけど……」
にらみ合う少年二人には気づかず、みんなは来週

の予定を打ち合わせ出す。
きららはずつと、モジつくばかりだった。

☆

「クリスマス会アメ？」
「うん」

家に帰つて相棒に話した。

エマはボテチぼりぼりコーラごくごく、ネットでも来年のプリキュアの方向性を議論しながら、

「最新の学校はそんなのがあるアメか」
「自由参加だけど」

絵に描いたようなヒキオタ化している魔法妖精のことは、もう四ヶ月の付き合いなので気にせず、荷物を置いてベッドに腰かけた。

「ひゃつ！」

「どうしたアメ？」
「う、ううん。なんでもない」

スプリングを揺らす勢いで座つたら、一瞬ぴりりとお腹に痺れが走った。不思議に思いながら腰をさすさす、両足を投げ出して寝る。

十二月の二十四日。星宮第二学園では、参加自由のクリスマス会が開かれる予定である。ちよつとしたお楽しみ会で、お菓子が出たりゲームをするだけの集まりだが、みんなできやあきやあ言うだけでも楽しみなで、きららは参加する予定。

「で——夜はどうするアメ？」
「うん……なーんかライちゃんたち、集まつてカラオケとか行くんだって」

つまらなそうに口をつぐめる少女。

会は昼の三時には終わることになってる。その後は仲のいい子たちでグループを作って遊びに行くのだが、ひとつ問題が。きららは親友のライカ、ミサトらと過ごすつもりだったのだが、二人は姫妃や

ナナなど他の子たちと約束してしまっただの。
 「アキラの主催するパーティに行くとのこと。
 もちろんきららも誘われたのだが、どうしようか、
 宙ぶらりんな気分だった。ライカたちとは過ごした
 いのだが、アキラがいるなら避けたい。
 それに、
 『タダシと過ごせばいいアメ』
 『う……』
 見透かされた。きららは下を向く。
 大嫌いなアキラの催しなのだ。タダシが行くはず
 もなく、彼は予定空いているはず。
 『へ、へんじやないよね。幼なじみだし』
 ごろんと転がってエマのほうを向く。
 その顔は、同意を得たいというよりは強い決心が
 感じられた。もう決めたことを報告している感じ。
 エマもまた、パソコンに向かったまま。
 『いいんじゃないアメか。幼なじみがクリスマスと
 二人で過ごすくらい』
 『……うん』
 おかしなことではない。幼なじみなんだから。
 クリスマスに男の子と一緒に——というドキドキ
 してしまうのは、女の子なら仕方ないことだが。
 『最近マカイジユの種も大人しいアメ。平和なと
 きは平和を楽しむアメよ』
 『そうだね』
 こちらは真正銘嬉しい話で、少女が顔を明るく
 する。
 魔法少女キララの活躍で、この四ヶ月に退治され
 たマカイジユの種は実に12にのぼる。
 まだ88が残る計算だが、種は最近自らを邪魔する
 強敵——キララを悟り、活動が大人しかった。
 これ以上ない朗報である。種が暴れなければ騒動
 は起きないし、芽吹いた種が活動を控え、成長しな
 ければ、やがては根腐れを起こすらしい。

「でもホントに大丈夫なの？ エマのことだからも
 う発動してるのを見逃してそうで心配」
 『なに!? 失礼アメね、エマはこれでも一流のマカ
 イジュハンターアメよ』
 『ふーん』
 『……ま、前は油断したアメが』
 二ヶ月前の一件。きららが白い目を向ける。
 エマが遅れたせいで少女はひどい目にあい、また
 ひとつ状況が悪くなった。鬼畜教師に犯される現場
 をクラス中に見られたため、種が発動するたびみん
 なから微妙な目で見られるのだ。
 『だ、だから、悪かったって言ってるアメ』
 『……』
 『……コーラ飲むアメ?』
 『……ふふつ、じょーだんだよ』
 ピンク色の毛に浮かんだ落書きのような眉毛をハ
 の字にする妖精に、少女は吹き出した。
 『エマのことは信頼してるから』
 ぽふぽふと頭を撫でてあげる。
 魔法少女と魔法妖精。
 二人にはもう、この四ヶ月で築いた相棒としての
 信頼が、しっかりと出来上がっていた。
 『ホントにだいじょぶアメ。種は発動したら瘴気^{じょうき}
 を出す。エマに見抜けないはずがないアメ』
 エマは元氣を取り戻して、ピンク色の毛玉頭をぴ
 っと伸ばす(たぶん胸を張ったんだと思う)。
 『もし瘴気の発生を隠せる人間なんていたら、それ
 こそ魔界の住人レベルアメ。きらら一人じゃもてあ
 ますくらい強力アメが』
 『え……そうなの?』
 『だいじょぶ。そんなのそうそう出ないアメ』
 お気楽に尻尾をバタバタさせるエマ。
 ちよつと見通しが甘い気がするが、魔界の事情な
 んかはあまり知らないきららは信じるしかない。

「それよりさつさとタダシに確認したらどうアメ?
 クリスマス、一緒にできるか」
 『う、うん』
 携帯を取り出した。
 着信欄も発信欄も、どちらも彼の番号が一番上
 あるのでかけるのは楽だ。
 『……あ、タダシ? いまなにしてた?』
 『うん、なについてこともないんだけど』
 『クリスマスにね……』

☆

一週間後——十二月二十四日。
 会は十時からなのだが、浮かれるきららは九時に
 はタダシを起こしに行き、三十分には教室に入った。
 もうクラスの半数以上が集まっている。
 『へー、夜はタダシと』
 この一週間ことあるごとに口元を緩ませているき
 ららに、ライカはからかいがちに。
 『なるほどねえ。幼なじみ水入らず、と』
 『えへへ、お母さんがケーキも作ってくれるんだ。あ、
 ライチちゃんもこつち来る?』
 『行かねーよ。幼なじみがラブラブしてるとこに一
 人で乗り込んで、アタシがツラいわ』
 『ら、ラブラブなんて』
 運つ葉な言いながら、ライカなりの気づかいだ
 った。きららは照れてしまえばかりだが。
 視線をタダシのほうへ向ける。あちらはあちらで
 他の男友達と話しており、
 『……』
 でもちらちらとこちらを気にしていた。
 意識しているのは明らかだ。ライカが「アツイア
 ツい」とばかりケラケラ笑う。
 クリスマス会まであと五分。

クラスは朗らかな空気に満たされ、

——ガラッ。

そこでなにかが変わった。そこでなにかが変った。ドアを開け入ってきた人物に、何人かがきよとんとなる。

おかしな相手ではなかった。宮代俊哉みやしろしゅんや。このクラスの一員である。ただ……。

「宮代……来たんだ」

ぼつりとライカが全員を代弁した。

友達は0で普段の授業からサボりがち。そんな彼が、自由参加のお楽しみ会に出るなんて、

そして驚きとともに、

「……っ？」

現れた瞬間、ずぐつとお腹の内側の奇妙な違和感を覚え、さらには息を呑んだ。

違和感——それだけだ。とくに不思議ではない。

ただそのとき、

クラス全員が顔色を変えている意味には、魔法少女をはじめ誰一人気づかなかった。

☆

担任の筑井先生きづいがやってきて、クリスマス会が開始した。

予定は十時から三時まで。午前のうちは学校全体で球技大会をしたり、先生たちの催す劇を見たり、学校全体で楽しく過ごした。

昼ごはんにご馳走とケーキを食べたあとは、クラスごとに分かれてそれぞれの教室で自由時間。

みんないつものは勉強するための場所で、ジュース片手に遊べるのが楽しくてならない。

「ここからは自由時間です。みなさん、なにかやりたいゲームありませんか？」

「はーいっ」

五人ほどが一斉に手をあげた。

あげたのはタダシをはじめ、元気な男子ばかり。きつとタダシはまた「サッカー！」とか言い出すんだらうなあ。さらには微笑まじげに見守り、ゲームに乗り気なのが男子だけという事実

に気づけなかった。こういうときは他を蹴飛ばしてでもドツヂをやりたがるライカや、「フツーにおしゃべりでいーじゃん」とか大人ぶりがたる姫妃が大人しい。

女子全員の様子がおかしいことに。

「うう……っ、くひ、ひああ……っ」

一番前の席。瀬戸内ナナが突如悲鳴をあげた。

机につつぶし、生汗を滴らせながらぶるぶると四肢を痙攣させる。

全員が不思議そうに見守る中、真っ赤になって机にかじりつく少女。椅子から落ちそうに震え、やがて大人しくなると、今度は肩を喘がせだす。

だがさらにも、他の誰も、それをおかしな光景だとは思えなかった。

「先生」

むしろ次の光景のほうが不思議だ。

いつもは自己主張などまったくしない日陰者の宮代俊哉が、手をあげたのである。かよ子がなあにと首をかしげると、堂々と起立し。

「瀬戸内さんだけじゃなく、みんながアナルマゾの顔になっていきます。この後は女子のアナルで遊ぶのがいいと思います」

「？」

ぽかんとしてしまいうきらら。

かよ子はぽんと手を叩くと、

「いいアイデアね」

机につつぶしヒクヒクと痙攣している、ナナの肩

を叩いた。

「前に出て瀬戸内さん。あなたのケツ穴がスケベになったのをみんなに見てもらいましょう」

「は……い」

ナナは言われるまま、教卓の上に乗ってみせた。かよ子が短いスカートをたくし上げれば、自分でするすとショーツを下ろしていく。みんなが見つめる中で少し肉厚気味なお尻を丸出しにした。

前のめり気味な女の子座りなので、尻たぶはめくれ、ピンク色に火照る谷間があらわになる。

一番深い部分だけは隠されていた。着衣でなく、器具によって。

「まあまあ、瀬戸内さんったらこんなに大きなエネマを使ってるのね。これじゃケツにアクメ癖がつくのも仕方ないわ」

エネマグラ、なんて正式名称は分からないが。それが淫具であることはさららの目にも一目瞭然だった。アヌスにめり込んだパールホワイトの樹脂は、ヴヴと音を立てて震動している。

(な、なにかおかしい)

だが不思議ときららが取り乱すことはなかった。

お楽しみ会の最中。女子にお尻を出すよう提案が出て、担任が迎合。言われた子は当然のことのように従い、器具の装着されたお尻を差し出す。

明らかに異様な状況なのに、混乱が薄かった。

クラスみんながそうだ。タダシも、ライカも、当然のことのように事態を——クラスメイトが下半身を露出する状況を見守っている。

さららでさえも。

「さあヒリ出して瀬戸内さん。肉便器になったあなたのケツ穴、みんなに見てもらいましょう」

楽しいクリスマス会の一行事とばかり、明るく進行する担任。

「ん……んんっ、んううう……っ」

少女もまた言われた通りに腰をしゃくらせる。みんなに見えやすい角度にした肛肉を力ませだした。蓋をされたアヌスは本来の役割を見せ、異物をゆつくりヒリ出していく。

——じゅるぽつ。

ものすごい音がした。

「ふふふ、素敵なお肉便器に仕上がったわね」

震動弁の抜けた肛門は、生赤く充血して周りの肉がせりあがっていた。

ぱつぱつ口を開けて、粘っこい水気が溜まる腸腔が見えてしまっている。どれだけ長い時間、淫具でマゾ調教されたのか。見ているだけで下半身に寒気が走る光景だった。

「他のみんなはどうかしら？」

いつも授業で見せる優しい笑顔で、かよ子がこちらをふり返る。

「は、はいっ」

「……私も、私も……ですっ」

「私もお尻ずつとウズウズしてますっ」

女子たちが競って手をあげた。みな腰を気にしながら席を立つ。中には椅子から離れたとたん、腰にきたのかカクンと座りなおしてしまふ子もいた。

女子で残ったのはきららとライカ、あと数人ほど。逆に姫妃やミストは重そうな下半身を引きずりながら、競って教卓へ。クラス中に肛肉をチェックされる場所へ近づいていく。

「ま、待って！ みんなおかしいよ！」

ミストを——守らなくてはならない親友を見て、金縛りが解けた。きららが大声を出す。

だが反応は異様なものだった。ライカが、タダシが、羞恥にさらされるナナ本人や、ミストまでが不思議そうな目を向けてくる。「楽しい会の最中にどうしたの？」とばかり。

ひるみそうになるきらら——。

「——エマッ！」

それでも魔法少女の直感で携帯を取り出した。魔法処理の施されたタブレットパネルは、少女の声に呼応してワームホールが開かれ、自動的に魔法妖精を引き寄せた。

「どーしたアメきらら。エマはいま……うおっ！」

呼び寄せられたエマが悲鳴をあげる。

「ま、マカイジュの？ まさか、瘴気はまったく出てないアメ」

「いいから変身！」

なぜか妖精は戸惑っているが、きららにすればこの状況、マカイジュの種が現れた以外考えられない相棒に向かつて手を伸ばした。

その身をロッドに変えるエマを掴み——、
「でりやああああ————————っ！」

——カッッ！

いつもなら変身台詞のひとつも唱えるが、今日は余裕がない。気合の咆哮を放った。

エマの転身したロッドの先で光が爆発する。クラスのみなが目を覆う中、きららの身体は蕩ける水飴のような光に包まれた。

光はグローブやニーソ、シューズを形作って、腰元で弾けベビーピンクのスカートとなつてひらめく。髪と腰がぼんつと大きなりボンで結ばれ……、

「変身完了！ マジカル☆キララ！」

「……」

みんな唖然としている。ちよつと恥ずかしくなつて机から下りるキララ。

とにかく、変身したことで頭の中に張っていたモヤのようなものが晴れた。この空間が異常であることを確信できる。

だが、

「今日も遅いよエマ、瘴気を感じたらすぐ来るって言ったのに」

「い、いや……」

様子がおかしいことを確信したのはキララだけだった。ステッキに形を変えたエマが戸惑っている。

「瘴気のニオイがしない……これって」

「宮代君！」

キララは構わず、クラスメイトの一人を名指ししてビツとステッキを向けた。

「十萌、その格好どうしたの」

事態を見ていた肥満少年は、口端にいやらしい笑みを浮かべながらさも困惑したよう応じる。

「とぼけないで！ あなたでしよ今回の『種』は！」

証拠はないがこれも確信だった。

マカイジュの種が起す騒動はいつも「種を持つ者の願望を実現させる」大原則がある。

女の子のお尻におかしなものを入れて。それを発表させる世界。こんな願望を持つのは生粋の後ろフエチの彼くらいだ。

「すぐ終わらせるからこんなこと！」

人質が多いこの場で長引かせるのは得策ではない。戦いを重ねた魔法少女はすかさず必殺技に移った。

ステッキを掲げ、先端のキャンディに似た宝石めがけて、

「ふんぬ————————っ！」

変身のそれよりさらに大きな光が爆発する。逃げる間もなく俊哉は光の洪水に吞まれ、そのまま教室中が、学校中が輝きに包まれた。夏からさらにパワーアップしているキララの必殺、「愛の光」。これで種も瘴気も即座に無効化する……。はずなのだが。

「——感触が弱い……」

まだ光で視界があげない中、エマが呻いた。

「キララ、逃げるアメ」

「な、なんで？」

「……フヒヒヒ」

少女が戸惑う中、不気味な笑いが耳をつく。

光がやんで視界が暗れる。クラスメイトたちが怪訝そうにこちらを見ており、

「すごいな僕。十萌の魔法まで無効化できるんだ。これならコソコソする必要なかったじゃん」

俊哉の冷笑が肌をさした。

マカイジュの種がもたらしたものでしょう。普段の

気弱な彼には合わない傲慢な、そして。

余裕の笑み。

「た、種が消えてない？」

愕然となるキララ。

これまで強敵には何度か出会った。どこにいるか分からないとか、エマを奪われるとか、そもそも変身できないとか。ピンチには何度も陥った。

けれどこんなことは一度だってない。変身して、必殺魔法を發動させたのに。通じないだなんて。

「どうなってるのエマ!？」

『逃げるアメ！ こいつは「キララ」に対抗する願望』を叶えるアメ!』

「ええ!？」

「し、しかもこの力。魔王クラスの……」

「ひひっ」

必殺技に耐えたことで、自信を得たのだろう俊哉は、もう悪辣な表情を隠しもせず近づいてきた。

とにかく距離をとろうと後ろへ跳ぶキララ。が、

——どたんっ。

「ひゃっ!」

椅子にぶつかり、尻餅をついた。

ジャンプ力が人並みになっている。魔法少女の筋力増強魔法がキャンセルされていた——しかも。

「ああああああ」

床にお尻をついた瞬間、得体の知れない痺れが腰を劈き、少女は打ち上げられた魚のようにピクピクのたうち回った。

「ふひひひ、穴が広がってるケツを乱暴に扱うなよ痔になっちゃうぞ」

「え？ え？」

「それとも？ 十萌流のアナルオナニーかな？」

腰の付け根にくる、おぞましくもどこか快美な痺れ。少女はおのきのながら、そつとお尻に手をやってみた。パンツの上から押さえる……。

——ヴヴヴヴヴ……。

震動物が挟まっている——その事実を、初めて「おかしい」と気づけた。

「さて、こいつを封じれば十萌はなにもできない」

「なっ、なにをするアメ——あぶっ」

握りしめたステッキに俊哉が触れる。

瞬間、魔法少女の最終兵器である相棒は小さな口リポップに形を変えた。動かない、しゃべらない、普通の棒つきキャンディに。

「うそっ、エマ？ エマ!」

呼んでも振つても、ただの飴は返事しない。

「クククク……」

魔法少女キララの武器は、強化された肉体と一撃必殺の魔法だけ。そのどちらかが封じられる。

薄く笑う少年のもと。少女は呆然とするしかできなかった。

☆

キララにとって最大の不運は、種の持ち主が、魔法少女の正体を知っていることだった。

変身したキララの絶大な戦闘力を見ている俊哉は、願いを叶える種を手に入れたとき、まず第一に「魔

法少女に見つからないこと」を望んだ。種はそれを叶え、探知される瘴気の放出をやめる。

第二の不運は、俊哉がこれまでの持ち主とは桁外れの欲望の持ち主だったこと。

卑屈で友達のない彼は生まれつきの並外れた性欲に加え、美女美少女と見れば町ですれちがうだけでも下世話な妄想をくりひろげる。鬱屈された性の欲求は、そのまま魔界植物の栄養源だった。

本来瘴気を放出せねば、呼吸しなければ成長しない種も、あまりに濃い肥料を得たことでムクムクと成長を遂げる。まして俊哉は本来種の成長に合わせて発散されるべき本当の欲求——彼の性欲に根ざした願望を叶えていない。尽きることない栄養素は、小さな種に並外れた魔力をもたらすに至った。

そして肅々と、着々と成長を遂げた種は、いまや萌芽と呼ぶにはあまりにも禍々しい進化を遂げ、普通の生徒も魔法少女も大差ない次元の、淫欲の魔人と化したのである。

「エネマパイプ、いつから入ってたか知ってる？」
司会進行として前に立つ俊哉。

「もう一週間も前だよ。みんなこの一週間、ずつとパイプをケツに仕込んで生活してたんだ。ウンコのたびにひいひい言いながら抜いて、入れなおして、夜はアナルの味を噛み締めながら夢を見てたんだ」

「く……っ」

「ちなみに？ 十萌はもうアナルマゾだって分かってたからひと回り大きいのにしてあげたよ」

男子もみんなして席を立っていた。

女子はすでに全員が、先行したナナを見習って前へ集められている。黒板の下に一列に並び、両手両膝をつく。

「はいじゃあみんな、パンツを脱いで」
俊哉はあくまで司会。うるさく指図はしなかった。

必要がない。キララでさえ思考を歪まされたほどの力なのだ。ただ座って命令——提案するだけで、

「ん……」

「も、もお男子、見すぎ」

みんなして自分でスカートの中へ手を入れる。

組体操かなにかのように、規則正しく並んだ少女たちが。規則正しくぶりんとしたヒップを並べていった。大人には程遠い子どもも子どもも肉の実がいくつも並ぶ光景は、淫猥なものにとらえるのがどこかばかられる。それだけに異様な光景だった。

見る側も見られる側も抵抗はなかった。これは楽しいクリスマス会。お尻を男子に見せるのはゲームの一環であり、嫌がれば楽しい空気に水をさすと思いで込んでいた。現に突き刺さる視線を恥じらう声は、プールの授業で男子に水着を見せたときの。半分くらい注目を集めたがっているそれである。

「く……」

キララだけはそんな異常な認識をはね除ける力があるのだが……。

「十萌は？ やらないの？」

俊哉の提案の前には無力だった。

エマの「生物化」を含めたすべての魔法が解けたいま、反撃の手がない。

唯一できるのは逃げることにくらいだが……。

(……タダシ)

クラスメイト全員が人質にされたに等しいこの状況。置いて出ていくことはできなかった。

とにかくいまは言うことに従いつつ、エマを復活させる手立てを探る他ない。変身そのものに身元を隠す力はないので。クラスの一員、十萌きららとして、みんなと同じよう魔手にさらされなければ。

(タダシ……見ないで、覚えなくてねっ)

すべてが終われば記憶は消せる。後ろに集う男子の中に幼なじみの視線まで混じっていることを感じ

つつ、少女は震える手でショーツに指をかけた。——ずり。

汗を吸ったコトトンが白い臀丘を滑っていく。

見ていた男子たちから歓声が上がった。

「うわー、十萌って意外といいケツしてるんじゃない」

「ガキっぽいけど出るところは出てるんだよな」

「おほっ、見えたお尻のアナ。ホントに他よりちょっとデカイエネマ使ってるぜ。でもシワシワを目一杯伸ばして美味そうに飲み込んでる」

クリスマス会らしく楽しそうに、男子たちの卑猥な品評が飛び交う。

「一番はやっぱ平坂か？ 見ろよあの大きさ」

「そそのわあ、色っぽいぜ」

「ははっ、小浜、胸がべったんこなのは知ってたけど、ケツもべったんこ」

ヒップどころか、外周の皺をヒクヒクさせて異物を唾えるアヌスまで見られる。

生きた心地がしないほどの恥辱だった。正気なキララはもちろん魔素の洗脳を受けた友人たちも羞恥

そのものは同じで、みんな顔が真っ赤だ。

瘴気そのものが出ていない影響か、いつもなら眷属として奴隷にされていたところに記憶が戻るミサト

や、暴虐に振舞うようになるアキラに変わった様子はなかった。アキラは他の男子たちと一緒にゲラゲラ下世話に高笑いしているし、

「は……あ、うう」

ミサトは「生まれて初めての」恥辱に、目に涙を浮かべている。

「ほら、まだ出してないやつ。さっさとヒリ出さないと次のゲームに行けないだろ」

これ見よがしに俊哉が、姫妃の小尻を叩いた。

ぴしゃりと小さな衝撃だが、一週間かけて神経を尖らせた鋭敏な肛道が異物のかたちに広げられているのだ。少女は「ひゃうう」と悲鳴をあげた。

褐色の蕾が反応して、イソギンチャクのように広がる。プラグがびゅると音を立てて飛んだ。

連鎖的に何人かの女子たちも、埋め込まれたパイプレーターを噴射してしまう。もともとどれれも若々しい腸壁ばかりなのだ。押さえつける下着がなくなれば、自然と入り口近くにある異物は外へ追われた。

「んっんっ……ソソッ」

「ミサトも出るぜ。ほらガンバレガンバレ」

「おほっ、出た。見ろよヌルヌルした汁でべとべと。湯気立ててる」

「ううう……」

ミサトがうねうねゆるゆるする腰から粘着質な音を立てて異物を落とせば、男子は下卑た笑い声をあげ、

「く……うっ、見るな、みないで……うあっ」

「うわっ、はははっ、飛んだ飛んだ。ライカのやつめちやくちや飛ばしたぜ」

「すげーケツしてるんだな。いつもウンコるとき便器からはみ出してんじゃねーの」

ライカがつい持ち上げてしまったヒップから勢いよくものを飛ばせば、嘲りの輪が教室中に広まる。

理性が外されているとはいえ下劣すぎる男子たちへの嫌悪と怒りで、ぎりりと歯噛みするきらら。

けれどそうして力めば、当然少女にも同じ恥辱が襲うこととなる。

——にゅるるる……ッ！

一度加速のついたものは、柔らかな腸壁と腸汁の滑らかさに甘え、リズムミカルなほど一気に恥ずかしい穴をはみ出していく。

括約筋を中から外へ、滑りのよいものが通っていく感覚——。生まれた日から知っている、最も身近でひどく浅ましい感情のつきまどう行為だ。さらには食いしばった歯をかちかち鳴らす。

(……見ないで)

もう止まらない。悟った少女は最後の最後。肩越

しに背後を仰ぎ、一人の影を探した。彼だけはすぐに見つけられる。ちょっと背が低くても、その顔そのシルエットは頭に染みついていてる。

「っ」
目が合った瞬間、タダシは少女の言いたいことを悟り、さっと目を背けた。

他の誰かに見られるのと彼に見られるのとは、意味合いがまったくちがう。少なくとも彼だけは見ないでくれたことを幸運とさえ思いながら、キララは、
——びゅびゅるるっ！

「あはあ……っ♡」

ライカと同じくらい距離まで。ミサトのときより大きな音を立てて。詰め物が吐き出された。

「お、おい見ろよ十萌の。あれって……」

「エロお、口が開いてるよ」

「え……？ あ、あつ。見ないで」

栓が消えて恥ずかしい穴が開いてしまった。噴射の瞬間、頭の中にぼやっとしたものが走って反応が遅れた少女は、あわてて可愛いお尻をふりふり、視線を逃れようとする。

だがただでさえ目立つキララのこと。右、左とどちらへよじつても、男子の大半が見ていた。

それに肛肉そのものが、視線を誘うかのような態度である。濃い紅色の皺の波は摩擦で痺れてしまったようぼつかりと口を開けている。

出入り口付近の可愛らしい桜色。普通なら一生誰かに見せる必要のない粘膜を、クラス中の男子に見られてしまう。闇の奥地はよほど温度と湿度が高いのだろう、かすかに湯気が出ていて、少年たちの探究心をくすぐる。

「……んっ」

お腹に力をこめた。肛門がひしゃげて、なんとか開いていた口が閉じる。

（や、やだ私のお尻……恥ずかしい）

なんとか閉じられたあとで、改めて顔が熱くなった。ちゃんと閉じているか確認したくて腹筋の下に力をこめる。菊肉がムチムチ持ち上がった。

（信じられない……本当にずつと入ってたんだ。だ、だつて私の身体。私のお尻……）

半信半疑だった一週間も前からパイプをつけ生活するよう洗脳されていたという話、うそではないようだった。

軟骨ばつて硬く、ヴヴヴと小刻みに震える人体にはありえない異物。

だが抜けたことが、ひどく違和感に思える。

（お尻ウズク……やだ、なにもないのが変な感じ）

一週間刺激に慣らされた括約筋と腸壁が、急に空気が触れなくなる。もどかしくて仕方なかった。

同じ気持ちの子は多いらしく、女子の半数以上が歳不相応に悩ましく鼻を鳴らしながら、丸い尻たぶを上下左右へ行ったりきたりさせる。

「くくっ、それじゃあ次のゲームに行こうか」

女子たちの見せた淫靡な擬似排泄——着実に教室のインモラルな空気が高まっている。俊哉は満足げにかよ子に合図した。

☆

「次のゲームは、流腸チキンレースだ」

用意されたのは保健室にある業務用の包装五つ。中身はすべてゴムボールにチューブのついた、いわゆるイチジク洗腸だった。キララの世代では初めて見た子も多く、男女ともに首をかしげている。

「ルールは簡単。男子はみんな交代で女子に洗腸していつて、女子が出しちゃったとき後ろにいた人が負け。罰ゲームでそのまま出たものを受けてもらうよ。女子はただひたすら耐えるゲーム。出しちゃった子は罰ゲームありだから気をつけて。一番耐えた

子にはご褒美もあるよ」

ルールはどうでもいいのだろう。つらつらと早口で述べ、各男子に容器を配っていく。

「さあ、ガンガン入れていつて」

ゲームという名の糸に操られた男子たちが、競つて女子の腰を抱え込んだ。

見るだけならまだしも、イタズラするなら露骨に顔のいい女子に人気が偏る。クラス一の正統派美少女なミサト。元気なので人気のあるライカ。もちろんマスケットの存在で、さつきから誰より視線を引いているキララも。

「ガンガンつて言われても……」

俊哉の支配によって理性を薄められていても、こんな異様な行為に難色を示す男子は何人かいた。タダシをはじめ何人かは動こうとしない。

だが逆に、理性の控除が言い訳にもならないほど乗り気で嗜虐に参加する者も。

「へへ、やらしいな十萌、ケツの穴なのにこんなにとろとろさせて」

アキラはもちろんそちら側だった。

他にも柳瀬、杉村、大滝。大多数の男子は、まさにゲームのように女子たちの腰を抱える。尻たぶをウニリと割つて、横向き楕円形になった柔肛へくちばしを差し込む。

「痛ッ……！！ いう、乱暴にしないで」

眷属化していなくても乱暴で、ボール部がめり込みそうなくらいチューブを埋め込んでくるアキラ。

びゅるりと冷たい感触が流れてきた。

こちらの穴も何度か淫淫にさらされ、人一倍敏感な自覚はあったが。こんな責めは初めてだった。

「あ……うっ、つめた……あつ、あくうう」

ひんやりした感じは熱された腸壁ですぐに温められるのだが。それは体内の粘膜に薬液が吸収されたということ。地獄の始まりだった。

(ふ、膨れて? あああお腹、重い、いたいっ)
生まれて初めて体験する流腸の効力は、生まれつき健康体で下痢も便秘も縁のない少女には、苛烈すぎるものだった。

少ししか入っていないはずなのに腸が重い。中で風船かなにかが膨張しているようだ。

健康な内臓はアメーバのような異物を体外へ導こうと活動を始める。ぎゅる、ぎゅるるっ、細いお腹が不吉な音を立て始めた。

「結構入るもんだな。お、反応してる反応してる。アナル敏感だよな〜十萌」

腹部の痛みに呼応して、愛らしい肛皺がぎゅーっとならなりと狭まるうとしていた。アキラが楽しそうに笑った。ボール部は握りつぶしたが、まだ入れたままのチューブを動かしてくる。

「いつやあつ、お尻やああ、動かすなあ」
うにうにと柔皺の真裏でうごめく乳白色の無機物に。この重苦しい痛みの中ですら性感が生じそう、キララは足をばたつかせた。

「く……ど、どうしよう。こんなのって」
見れば苦しいのはキララだけではなかった。ミサトには杉村がついている。だがゴムボールには液が残ったまま。半分も注入されていなかった。

真綿で首を絞めるようジワジワ使うつもりらしい。ライカなどは、まだ流腸が始まってすらいない。「ヒヒヒ、ライちゃんのアナル可愛いなあ」

「や、やめる宮代、おまえルール……んあつ」
「いいんだよそんなもん。あー、ライちゃん体温高いなあ、これすぐにチ●ポに馴染むアナルだよ」

「あつあああ、んあお、……ほおおお」
俊哉が直々に、まずは指で蓄そのものをコネくりまわしていた。
穴を広げる処置、という口実でイタズラされてい

る。こちら専門で鍛えぬいた淫技を受け、すつかり体から力が抜けてしまっている。

「ほらっ、まだまだ流腸飲んでもらうぜ十萌」
友人たちを気にかける間もなく、次の男子が挑んできた。

単なる陵辱劇でなく、排泄、便意を競う宴となったクリスマス会。

すべてが片づいたとして、こんなことになった教室でまたいつもの生活に戻れるんだらうか?

キララの目から一筋、涙の雫が溢れた。

ほとんどの子が三周目に入ったころ、最初の決壊が訪れた。

太い声でいなないた姫妃が、薄茶色く濁ったエキスを逆流させる。担当していたのはアキラで、びゅーっとならなりと水鉄砲のような薬液が直撃した。

「はいアウトー。アキラと姫妃、罰ゲーム」
ライカから離れないまま俊哉が声をあげた。

閉口するアキラ。姫妃はかよ子の用意したバケツにまたがって半固形をヒリ出している。

「そうだな。二人への罰ゲームってことで、アキラには姫妃のバージン奪ってもらおかな」

「はあ?」
「ほら、得意だろさつさとしなよ」

司会の指示なら姫妃の身体を抱えるアキラ。排泄のショックでふわふわしている少女に、自身の規格外な巨塊が入るよう準備愛撫を施していく。

出したらそのときペアの相手とセックス——。
これで一気に空気が変わった。

男子は童貞卒業のチャンスだと、競って好みの女子を確保していく。中には流腸を終えたあと肛門を無理やり割って吐き出させようとする者まで。

タダシたち消極的だったグループも、こんなご褒美が待たなければと、ひとり、またひとり饗宴に加わ

りだす。最後にはタダシ一人になった。
女子もまた、どうせ犯されるならと出すときを選ぼうとする。一番人気のアキラはもう売れているので、手ごろな相手と連鎖的に決壊を始めた。羞恥心を保っているのはキララたち少数だけだ。

そのキララは悲惨なものだ。
「早く代われよ、次俺の番だぞ」

「うるせーな、まだ入れきってないって」
決壊させるしセックスチケットとあつて、可愛い子には当然男子が群がった。

「あぐっ、もお……やめ。ちよつと休ませてえ」
もう誰にされているかさえ分らない。矢継ぎ早に男子たちが群がり、ちゅーちゅーと冷たいエキスを注ぎ込んでくる。

直腸はすっかり薬剤で満ち、最初のころのような膨張感はない。すでに注入されたのが十本を超えており、物理的にお腹が重くなってきた。

「ううう、ダメです。お尻めくらないでください。あれちやう、もれちやうう」
ミサトにいたってはさらに悲惨で、三本のノズルを同時に含まされていた。

これではゲームにもならない。大量のノズルで伸ばされた括約筋は本来の役目を果たせず、しかも流し込まれる水分が呼び水となって……。

「びゅちゅるるるるっ!」
噴射——というより引っかかり出された形で、排泄に追い込まれた。後ろにいたのは大滝で、クラスで一番の当たりを引いたと大喜びしている。

「はあーっ♡ はあーっ♡」
覗き見たミサトの顔に、キララは胸を痛める。

一週間にわたるパイプ責めと苛烈な流腸責めとで、すっかり夏休みのころに。奴隷に戻っているようだった。本人に当時の記憶はなくても、直腸に刻まれたマゾヒズムに困惑しきりだ。

231

「ほら平坂、そのでつかいおっぱい見せてくれよ」
「ああん……♡」

もう男子の言うことに逆らえない。記憶上処女の身で、うっとりしながら股を開いていく。

(ミイさん……ごめん。ゴメンね)

本人が悦んでいることが、彼女を守ろうとがんばってきた魔法少女にはなにより悔しかった。

「早く出せよ十萌え。さつきからアナルがキツそうにしてるぜ」

こちらはミサトほど乱暴ではないながら、しつこくしつこく薬液を打ち込まれる。

ブロンドヘアの可愛いクラスマスコットに、邪念抱く男子は多い。童貞卒業の記念を彼女で済ませたがり、我こそはと挑んできた。一人一人しつこく肛門をマッサージして。チューブでねちねち皺をいじくり。ゆっくりゆっくり流し込んでくる。

「ううう……いや、いやあ」

魔素が遮断される体質なため、一人理性を強く残すキララは、必死でいたぶりに耐えた。

赤を通り越して蒼白になってきた顔は、蠟を塗ったよう汗べつとりになっている。細いあごから鍾乳石のようにぽたぽた落ちる量が地獄の長さを物語っていた。汗はコスチュームにも染みており、レースのひとつまみ、リボンの先まで伝うほどだ。

(あああ……しつかり、しなきや)

なによりおぞましいのは、この悪夢のような状況で、キララにとって最も恐れるべき病魔。身内に巣食うマゾヒズムが疼きだしていることだった。

涙をこぼしたところから、頭の中にふわふわと強烈な酩酊が湧いている。

ジェットコースターで落ちていくときの、体内に風が入っているような感覚。腿の途中からおへその下にかけてが自分の身体ではないような気がする。腸壁の重さだけがぼんやりと感じられた。

放置された秘苑もまたずきんと淫らな疼きを催す。膀胱がキュンと跳ねた。無意識のうちに妖しく腰をくねらせるキララ。

「へへつ、とどめ」

また一人分の注人が終わる。すると、

——きゅぶぶぶつ。

「あああ……つ」

ノズルを引き抜くとき、淡桜色に濡れた粘膜の隙間をぬつて、空気が飛び出してきた。

その一度目は偶然だっただろう。イチジク型の流腸は握っただけでは全部入らず、容器に少量が残るので、入れる側は一度空気を戻してギリギリまで注入了がる。するとどうしても空気が一緒に入ってしまう。それが逆流しただけ。

出ているものは空気でも……。クラスのマスコットのおならに興奮した男子たちは、いつしか空気も競って注入してくるようになった。

キララにすればたまったものではない。

(恥ずかしい……うぐつ、う、ううう波があ)

空気が括約筋を通ると、腸壁はもうパンパンになっている液体もついでに出してしまいたいと蠕動する。キララにはいちいち拷問だった。

「さあ、残るはキララとライちゃんだけ。優勝はどこだ？」

俊哉が声をあげた。

お尻を締めるのでいっぱいいっぱいになっているうちに、いつの間にか教室は乱交会場となっていた。二人の女子を除いた全員が破瓜を散らされ。運良くペアになれた男子はもちろん、当たらなくても我慢できなくなったものは、口を使ったり手を使わせたり、好みの女子に■■い勃起を押しつけていた。

それでもキララとライカの人氣はすごかった。ズボンの中で痛いくらいペニスを突っ張らせながら、他で処理しようとする男子が多い。

そのぶん二人は苦しめられるのだが。

「く……う、痛い、腹いたい」

ライカが残ったのには、いささかペテンがあった。先ほどから俊哉しか流腸していないのである。支配者の力で文句を言わず、彼女だけは独占していたぶっている。流腸もまだ三つ目というところだ。

「うぐ……う、も、やだ。もやだよお」

対するキララは、普段くびれているお腹が水風船のように膨れるほどの量を注入された。

お腹の中は冷たいばかりで、お尻の穴をチューブが通る感覚があつても、体内でなにかを出されている感じがしない。ただゆつくりと、着実に直腸の限界量が近づいている。

「ほらほらあ、さつきと出せよ十萌」

男子たちの声が遠くから聞こえた。

キララはもうほとんど意識が飛んでおり、言葉の意味さえ理解できないでいる——。

「……きらら」

ただ一人の声を除いて。

「なんだよタダシ」

「順番守れよ」

他の声を無視して、ずっと成り行きを見ていた少年が後ろにしゃがむ。

「もういいから。我慢しなくていい」

そつと優しく背中に触れてくれた。

魔素のせいでのびのびに、このゲームをおかしいと思う気持ちはない。

だが幼なじみが、キララが苦しむ状況だけは別だ。他を押しつけ、ゲームのルールを破つても、助けに入ってくれる。

「ただ……し」

少年の与えてくれる優しくして無条件な心地よさは、キララの最後の堰を切るに充分だった。

—————つ！ つ！ つ！ つ！ つ！ つ！ つ！



僕タケシ!

いけ!
イヌウルフ!!
『かみつき』だ!!

僕達の世界では
『ニジモン』を
戦わせる遊びが
流行っているんだ!

ニジモンマスターの激しくバトル!!

ほのおどり!!
『ほのおブレス』だ!!

なんの!

ニジモン!
わくわく! リョナ交配♡♡

漫画 e4 COMIC



ああっ!
イヌウルフ!!

ゴッホオ
ホオ



やっぱり水属性が
いないと
火属性相手は
厳しいなあ…

はあ…
また負けた…



お大事にー



「スクミズバニー」
水属性ニジモン。メス。
プールや水辺に生息。
成長すると「キョウエイ
バニー」に進化するぞ！

水属性ニジモンの
「スクミズバニー」!!



せめて
水属性のメスが
いれば…



あ
あれは！



ラッキー！
さっそく
捕まえてやる！





トドメだ!
ブタオーク!!
『はらパンチ』だ!!

かいしんのいちげきだ!

CRITICAL!!



スクミズパニーをつかまえた!

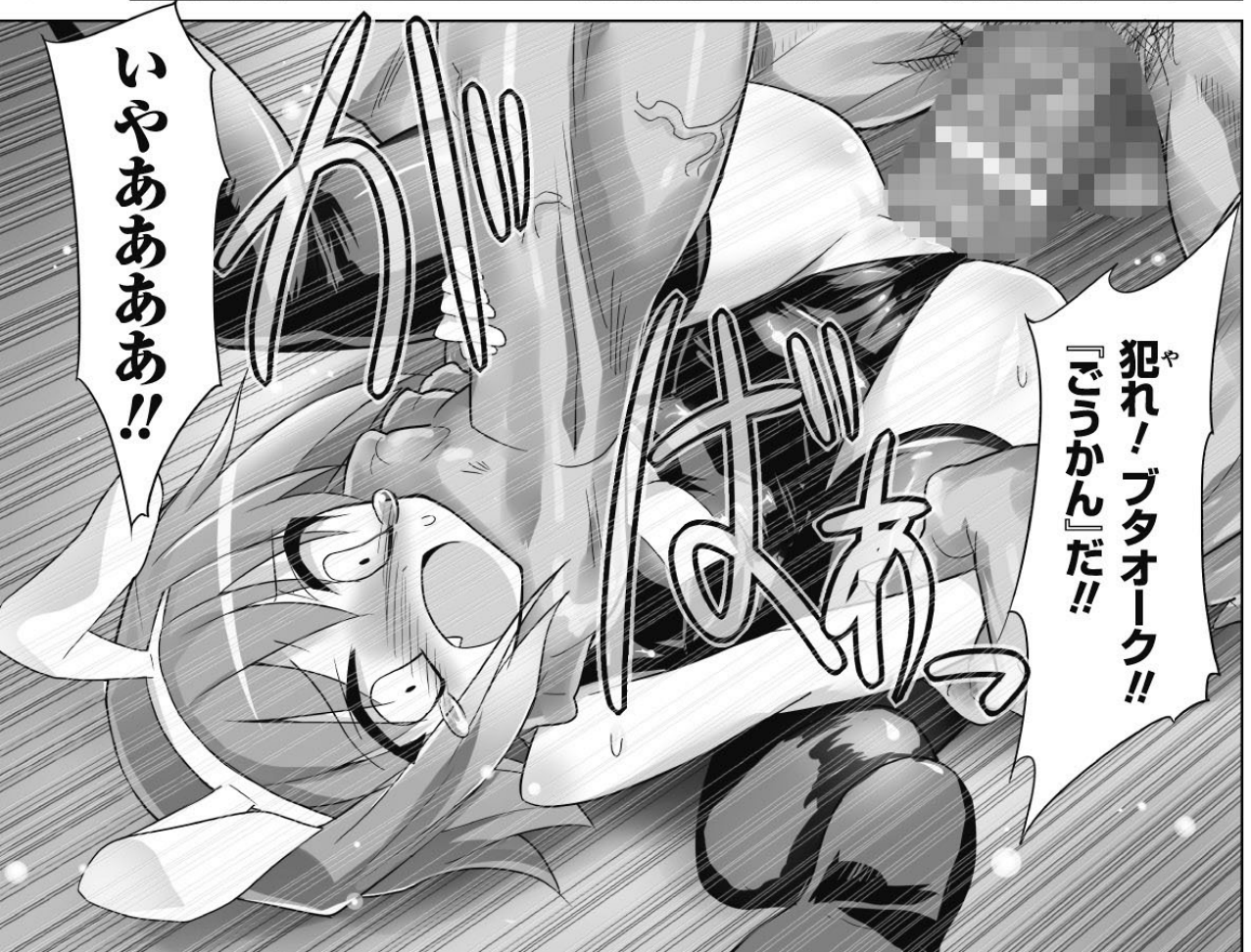
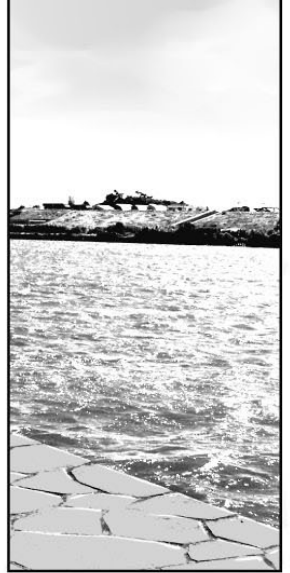
ニジモン
ゲットだぜ!!

カチャ

ピョ

ピョ

しゅあまあま





胎盤に
メリ込んでる…!

しゅ…
処女膜ごころか
子宮口まで
こじ開けられて…

あーっ
ぐわんぐわん



すごいや!
お腹がポコポコって
なってる!

く苦し…やめ…

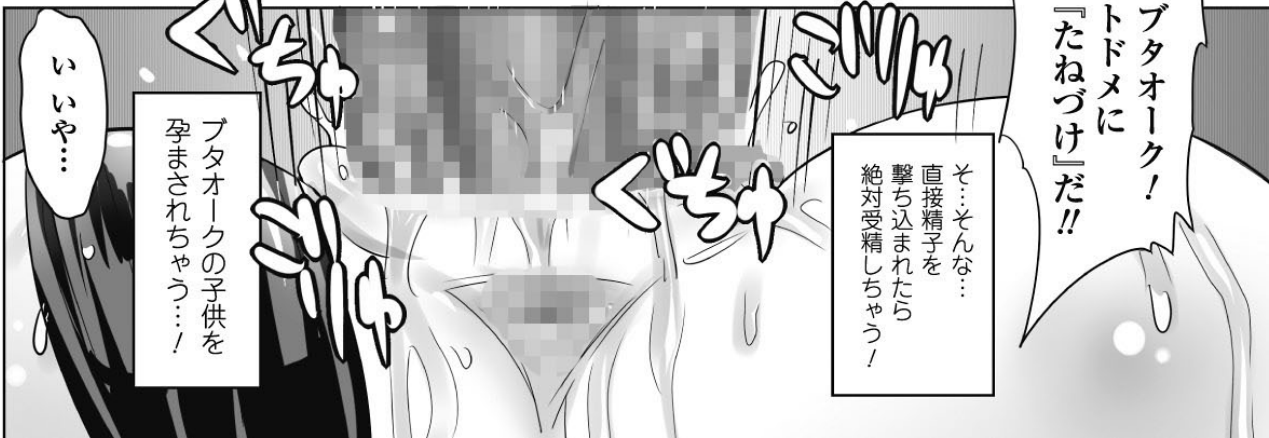
動か…

お腹の中
ペニスの形に
作りかえられる…

ポコッ
ポコッ

な…内臓が
押しつぶされて…

ブタオークったら
必死に腰を振って…
よっぽどのメスと
交尾したかったんだね



いいや…

ブタオークの子供を
孕まされちゃう…!

そ…そんな…
直接精子を
撃ち込まれたら
絶対受精しちゃう!

ブタオーク!
トドメに
『たねづけ』だ!!

ぐわんぐわん
ぐわんぐわん

受精いやめめめめめめ!!



うわーすっごい量…
これなら確実に
受精したかな？

味…



し…子宮が
破裂しちゃう

帝国に囚われたフィオナを助けるため、
少数精鋭で危険な森を進むセリーヌたち。
しかし帝国の姫がたちはだかり、

**凛々しき女騎士の全身を
白濁液で染め上げる！**



イセリア 英雄戦記

the legend of the Isepa war

第17話 絶望、そして覚醒

小説
NOVEL

さくらそら
桜空

挿絵
ILLUSTRATION

ぼたん
牡丹

玉座に座するのはアリオナリブリティッシュその人だ。敵かな雰囲気の中で重苦しい空気が沈澱している、最大の理由はフィオナ皇女の不在。

女王は憂いを湛えた瞳で、正面の赤い絨毯に傳く女性騎士を見詰めた。

「第一騎士団団長セリーヌアヴァリアレスに命じます。皇女フィオナを帝国より連れ戻してください」

優しくも朗々たる声が響く。腰まわりや張っている乳房など、以前にも増して魅力的になっていた。視線や呼吸といったなにげない仕草の端々に色っぽさが滲み、柔和な中にも妖艶な雰囲気が混在して目目が吸い寄せられる。「はっ、その役目しかと承りました。このセリーヌ、必ずやフィオナ皇女を連れ戻してみせます」

先のクレオラ進攻を食い止め、帝国との挟撃を阻止した立役者は、女王陛下の命に答える。

「クレオラの進攻を止めて戻ったばかりだというのに、申し訳ないわね」

「そんな、頭を上げてください。フィオナ様は皇女というだけでなく、私個人にとっても大切なお方。これは私の望みでもあるのです」

アリオナはふっと表情を崩し、「娘をお願いね」

ほんの数秒だけ母の顔に戻る。

「アリオナ様こそ、顔色が悪いですよ。ゆっくり休んでください」

(無理もない、娘がああ帝国に攫われたのだから)

体調や表情に異変を見つけるが、まさかスレアIIエタームの陵辱によるものとは思わない。

少数精銳故に団の枠を超えて、最悪と思える騎士、信頼の置ける騎士に声をかけた。のだが、エルスだけがどこにも見当たらない。

「エルス様もセリーヌ様に同行し、淫祇邪教にとつて害のある行動をしないか監視してください」

セリーヌの女王謁見と時を同じくして、エルスも主に傳っていた。

「スレア様の命じのままに」

(やはり淫祇邪教ですのね)

「任務を放棄すれば……わかりませんが？ エルス様だけでなく、アリオナ様にも罰を与えます」

「はい、スレア様」
それからすぐ女王に取り計らつてもらったのだが、セリーヌも誘おうと探していたらしく、準備が整い次第同行し出発した。

イセリア最北端の国境沿い、徒歩だと十日はかかる帝国兵の手薄なオシアスの森に、三日で辿り着いた。

木々は伸び草葉が茂り、希少なキノコや薬草が採れる森だが、光の届かぬ深い森というわけでもなく、上には星空と月が輝き七人の小隊を僅かに照らしていた。

しかしもつとも手薄なルートでもあるこの森は、魔物の出現率が高く一般

人はおろか兵士でさえ近づけず、手薄なのは単に危険だからに他ならない。そんな森の中で人間の気配がする。馬で駆け、夜の内に国境を越えるつもりだったが、簡単にはいかないようだ。

「エルス」

「ええ」

「そこに隠れている奴、出てこい！」

少し開けた場所で警戒して叫ぶ。

「あ、あ、よく気づいたわねえ」

ゆらりと濃い闇から抜け出したのは、月夜に照らされてなお漆黒のドレスに身を包んだ美しい女性。

「これだけ周りに殺気が充満していれば当然だ」

濡れた瞳は垂れ目がちで睫は長く、厚めの唇はセクシーで左下の黒子が色っぽさを倍増させる。ポリウムのある髪を蝶の髪飾りで後ろで留め、前髪は目が隠れるくらい垂れ、色は艶やかな紫色。

胸元は大きく谷間が覗き、腰は細いが脂の乗った肉付き、豊かに熟れた尻尻と太腿はむちむちと美味しそう。二十四歳の非常に色っぽく、妖艶な美女が微笑を浮かべていた。

「あらあうふふ。タイプだわあ」
気づかれたならと、無骨な戦士がぞろぞろ木陰から現れ、その数は彼女たちの倍以上の十五人。

(多いな。それより、何だあの女。このオシアスの森にドレスで現れるなど頭がおかしいのか)

豊かなお尻の丸みや、腰のラインが

明瞭なのは彼女の服装故。

漆黒のドレスは左足は足首までであるのに、右は際どいスリットが入り布地がないに等しい。太腿の辺りに蜘蛛の巣が描かれた黒い服に、金の装飾が映え、ざっくりと空いた背中と同様に白い肌も際立つ。

「何者だ」

正体不明の美女を睨み問う。

「私はサーシャ。サーシャオーギュスタン。帝国皇帝の長女よ」

「なっ!!」

まさかの人物に絶句、どうせ盗賊か何かだろうと予想していたのだが、そんな大物が国境を越えイセリアまで来るなんて。何を考えているのかさっぱり理解できない。

「姫様が攫われたんですものねえ」
余裕たつぷりにサーシャが笑む。

「イセリアには厄介な処女の制約があるでしょう、一刻も早く救出したいわよねえ。だったら小規模な部隊で迅速に、かつ確実に連れ戻す、としたら手薄なココしかなじやない」

頭の切れる艶女が懇切丁寧に説明をして注意を引く。

「セリーヌ様、ここは私が」
「いや、あの女は得体が知れない。私

が時間を稼ごう。エルス」
(あの自信といい説明にも何か違和感がある。それに待ち伏せされていたのだ、畏の可能性が高い。全滅だけは避けなければならぬ)

「何ですの」

「彼女たちを率いてフィオナ様を必ず助け出してくれ！」

公私において一番信頼の置けるライバルに部下を託した。

馬を降り全方向に気配を巡らせる。

別の任務を命じられている金髪の騎士は、じっと彼女の目を見る。

信頼の重さを理解しつつも、まだ悩むのは、任務を放棄したと知ればフィオナにも被害が及ぶからだ。

（任されてもわたしには……任、された？ あのセリーヌが、わたしに）

ライバルに任された、それはとても大きな自信に繋がるとともに、フィオナを想う騎士を葛藤から解き放つ。

「突つきりますわよ！」

（わたしの任務はセリーヌの監視、ですがそんなものよりフィオナ様のほうが大切ですわ！）

フィオナならわかってくれると信じ、覚悟を決め部下を統率する。

「追いなさい！」

「行かせはしない！ お前たちの相手はこのセリーヌ！ アヴァリアレスがしてやる。死にたい奴はかかってこい！」

追おうとした兵士の前に立ちはだかり、気配で圧倒する。気圧された兵士らは二の足を踏むが、それでも向かってきた男の胸を、すれ違いきざまに鎧ごと斬りつけた。

「はあああああつ」

鋭く踏み込んで男の咽を突き、腕を捻り右に振って隣の兵を斬りつけ、あとという間にふたりを片付ける。

「ぐええつ」

さらに振り下ろされた刃を黒剣で下から突き、上から袈裟に斬りつけた。今度は三人同時にかかってくる。

——閃。

神速のひと振りで難ぎ、兵士は何が起きたのかもわからずに倒れた。

鬼神のごとき強さで立ち回り、屈強な戦士を恐怖のどん底に突き落とす。

（何だ、身体が重く怠い。それに熱くなってきた。くっ集中しなければ）

戦場を駆ける熱さとは違い、息も微かに乱れ動きも鈍り始めていた。

それでも華麗なダンスを舞い踊るように、剣筋を見きって華麗なステップで避けて殺していく。

「せえええええい！」

上段からの太刀を鋼の剣で受けた男を、剣ごとまっぶたつに両断した。

「な、お……あ」

「はあああ、はア……つ」

（おかしい。これしきの数を相手に息が上がるなんて。それに素早く動いて肌を擦れると身体が、ヘンに……）

吹き抜ける風が火照った身体に心地いい。が、風とともに甘ったるいにおいも流れてくる。風上に立つサーシャから、風下のセリーヌへ。

「あいつか！」

（長い説明は時間稼ぎだったのか、くそっ早く倒さないとマズいな）

異変の正体に気づくが遅い、肉体は疼き火照っており、動きの鈍った女騎士を相手に歴戦の猛者が数人で迫る。

「しまつ——んく」

我に返り反撃しようとするが反応が鈍い。加えて半鞘の乳首が布越しに胸当てに擦れ、甘い痺れが起こり取り押さえられてしまつた。

膝立ちで拘束し、剣の柄で鎧に守られていない脇腹を殴られ、愛剣クラウソラスを奪われる。

「うぐつ。なぜ私だけに効く？」

拘束され、殴られてなお情報を引き出そうとサーシャを見る。

「解毒剤を皆飲んでもるもの、薬師なら当然の下準備よお」

（薬師だったのか。落とし穴や紐を切れば作動する、地形的な罠を警戒していたのだが、まさか薬だったとは）

悔やんでも遅い、後悔に美貌が歪む。

「いいもの見せてあげるから、そんな怖い顔しないでよお」

「いいもの、だど？」

「こゝれ」

それは絵。

「な、何だコレは!?!」

バンドベルグ帝国中の画家によって描かれたフィオナ。巨乳を縄で縛られ全身には卑猥な落書き、さらには失禁している無残な姿がそこにあった。

「それは姫様の絵よお。帝国領内では市民にまで広まつてるわ」

（これは……フィオナなのか？）

動揺で言葉が出てこない。偽者だ、そう断じる反面、精霊装甲の精緻なデザインは紛れもなく本物だった。

「間違はなく本人よ」

心を読んだかのごとく、的確なタイミングで放たれた。

「ちなみに、処女はもうお父様が奪っちゃつたから」

「——なつ!?!」

衝撃の告白に絶句し、戦場だということも忘れ、頭が真っ白になる。

「姫様の処女が奪われた瞬間はすごい興奮したわあ。でも私はね、貴女のような強くて魅力的な女性や、強気で虚勢を張る女性が大好きなの」

まだ呆けているセリーヌの顎をくいと持ち上げ、舌なめずりをしてささやく。

「メイベルローゼちゃんも苛めて堕としたいけどお、貴女みたいに清廉な女性が穢れるところがたまらなく好きなの、ゾクゾクしちゃうのよねえ」

「そこでようやく意識を持ち直し、狂気の笑みを浮かべる彼女を睨む。」

「そうねえ、手始めに彼とキスしてくれないかしら」

「これがセリーヌ团长か、どんな男女かと思つたがこりや楽しみだ」

「ハア!?! ふざけるな」

理不尽な要求に怒りが湧き、怒鳴ると男は怯むが帝国の姫は違つた。

「キス、しなさいな。それとも彼には姫様とキスしてもらいましようか」

「っ！ 待て、わかつたすから。だからフィオナには手を出さな」

女騎士の返答にサーシャは微笑む。

「そう、それでいいの。でもね、変なこと考えちゃだめよ。私を怒らせたら

「……その怒りをぜんぶ姫様にぶつけてやるんだから」
 (私の初めて、ファーストキスが名も知らぬ男、それも敵に……)
 怒りと悔しさが混じる。

魔物に舐められたり、口を犯されたことはあつても、こうしたキスといえるものは初めてだった。

フィオナの身代わりとなるべく、意を決す。フィオナのためなら何でもできる、私を守る——そう言い聞かせた。逡巡するが目を閉じ唇を重ねにいよいよ唇と唇が触れるだけで離れた初心な騎士に、誰もが満足するはずなかった。

「それだけでいいはずないでしょう」
 耳元で教えられ再び唇を寄せ、チュウチュウと触れるだけのキスを何度も繰り返す。身を竦ませつつ下唇を噛み、乾燥した唇を舐め回して潤いを与え、何度も何度も往復して舐める。

(これがキス……なのか。せめて初めては好きな人と、くそつもうやめたい) 震える舌で汚い歯をなぞり歯茎までも舐めていると、男の息がかかり口の中が熱くなり嫌気が差す。

「んん」
 もう無理、と顔を離そうとしたのだが、サーシャの笑みが視界の端に映り、フィオナの身を案じて離せない。

厚みのある舌を撫で舌先でくすぐる。サーシャの入れ知恵だが、興奮した男がそこから主導権を握り、肉厚な舌が彼女の舌を撫で、巻きつき唾液を吸る。じゅる！ じゅるる、びちゃれる、

れるお。

(なっ唾を飲まれている!!)
 (なっ唾を飲まれている!!)
 ねっとり濃厚なキスに目を白黒させて驚き、唾液を飲まれるおぞましい行為が信じられず嫌悪する。

一方的に楽しんだ男が退くと、別の男が待つておりまた奪われる。生臭い息がかかり唇を舐め、はむように弄ばれ熱い接吻を食らわれた。
 「ベロ出せ、そうだ」
 舌突き出すと上から唾を垂らされ、伸ばした舌にびちゃつと落下、ねとつく唾液が広がる。

(おええ気持ち悪い。女性の唇を弄ぶなんて、絶対に殺してやる)
 決して飲むまいと吐き出そうとしたのだが止められた。
 「飲んであげなさい、でないと彼だつてシヨックでしょ。ふふ、その悲しみを誰かにぶつけたくなるわよねえ」

(男の唾を飲むなんてどうかしてる) 嫌悪はあるが、飲まなければフィオナの身が危ない。仕える騎士として、大切な友人としてできるのはひとつ。ぎゅつと目を閉じ、ごくり。咽音を立てて飲む。唇を奪われ上唇を舐められた後下唇も舐められ、白い歯をなぞり歯茎までも、先ほど自分がした行為を今度はされて鳥肌が立つ。

唾液が送られて身を震わせ、悲しみに暮れながら飲み、また己の体液を吸られて怒りと虚しさが同時に去来する。唇が離れると、唾液の濃密な粘糸がふたりに繋ぐ。

その後も次から次へと、何人にも唇を奪われ、女としての尊厳を踏みにじられた。初めてのキスへの幻想を打ち砕かれ、媚薬がじんわりと染み渡り顔が紅潮していた。幾度ものキスの余韻に浸り呆けていたセリーヌの目の前に「んじやお次はこいつにキスしろ」肉棒を取り出して顔に近づける、最初に唇を許した男。

土気色の禍々しい凶器が鼻先に突きつけられる。太さは赤ん坊の腕ほどもあり、見れば見るだけ醜い。色味や張り巡らされた血管が気味悪く、つんとした腐臭のひどい肉棒にキスをする。(くっ。こんなものにキスしなければいけないなんて最低だ。うあ、熱いこんな熱いなんて、それに弾力がある上に臭くて、イヤだ) 見やると何か液体、薬か何かを薄めて飲んでる。

「気になる？ 彼らが飲んでるのは精力剤レッドサイクロプスよ。百回以上の射精が可能で、射精量も二十倍以上と、犯すための薬のお」
 (そ、んなの……壊れる)

「原液のままだと効きすぎから、薄めて飲むから安心して頂戴」
 肉胴やカリにもキスしながら、反論したい気持ちを抑える。

「手で握ってシコシコしてくれ」
 「うひょお、俺も俺も」
 嫌々ながらも太く、弾力に富んだ男根を両手でそれぞれ握る。上下に撫でるとピクンと跳ねて、みるみる硬く力

チカチになっっていく。
 「さらさらだ、美人ってのは髪まで違うんだな」
 「貴様何をしている!!」
 「こうするんだよ!」
 「な、くっ、やめろっ」
 ロイヤルブルーの鮮やかな髪をベニスに巻きつけられ、憤怒の表情で声を荒らげた。

「あれだけ動いて仲間を殺したつてのに、汗ひとつ掻いてないなんてな」
 體えた汚臭とともに黄白色の恥垢まじりしゆる擦られ穢されて嫌悪と怒りに目が血走る。
 (嫌だ、触るな、私の髪に汚い物を巻きつけるな。これの何が楽しいんだ) 「この変態どもめ」
 複数の男性に囲まれ、汗臭さや男臭さに、體えたにおいがむんむんと漂う。「ああんいい、いいわあゾクゾクしちゃう。でももつと興奮させて」
 サーシャの声にフィオナの愛くるしい姿が過る。逆らえず手に力を入れ、脈打つ男根を根元から先端まで舐め上げる。苦味と悔しさに顔を歪め、振り返る先端までいくと上目遣いに目が合い、慌てて目を逸らした。

傍らに立つ妖艶な美女に、卑猥で屈辱的な言葉を言われる。
 「遅いお、おチン……ポ、好きなんです、どうか唾えさせてください」
 (敵に媚び、お願いさせるなど侮辱するにもほどがあるっ)

273

「そこまで言うならいいぜ」

亀頭に舌を這わして鈴口を穿ると、陰茎が震えカウパー液が滲む。少量では薄味の分泌液を舐め取り、嫌悪しつづつ口を開けて長い肉槍を口に含んだ。

「へへ、イセリア一の騎士セリリーヌが俺のチ●ポ啜えてやる」

顔を前後に振り手も連動して摩擦すると、カウパー腺液に濡れた手からちやちやと、いやらしい音が鳴る。

（んぐぐ、太くて大きくて口がっ、うう気味の悪い体液で手が穢れる。それに、魔物のものと同じくらい臭い）

だが肉棒を前にして媚薬に侵された女体は熱く疼き、陰部が火照り内股をもじもじ擦りつけた。

サーシャを見やるとゾクゾク快感に酔いしれていて、その表情は魅力的というより蠱惑的。他人の不幸が、そして苛めるのが快感のようだ。

「先端を吸いながら舐めなさい。ふふ、味はどうなのお？」

「ふあ、おい、ひいれしゅ。じゅず、じゅる。たいへきもしよっはく、んあ」

命令され、亀頭を吸引しつづつ舐めくすくると、我慢汁がとぶとぶ湧き出して喉ると塩辛さが増してくる。皮が剥けて恥垢が剥き出しとなり、恐る恐る舌で剥がして咀嚼。

「かああつ、セリリーヌが俺のチンカス食ってら。たまんねえな」

（これ……こんなもの、食べ、るのか。でもししないとフィオナが）

ごくりと嚥下すると、苦味や不味さ

が口の中に広がっていつまでも残り、舌や咽にへばりつき吐き気を催した。およそ人の食べ物ではないものを食べさせられ、精神的に疲弊し清康だった心も口内も汚辱される。

清い心に黒い染みが浮かぶ、小さな小さな染みがぼつぼつと。

「うえ、おえ……。まづい。貴様ら憶えている。うつぶ」

「違うでしょ、こう言いなさい」

耳元でささやかれ、目を見張る。

「くつ、ち、ちん……かすを食べさせてください、ありがとうございます。とても……とても美味しかったです」

「ぎやはははは、そりゃよかった」

笑われ睨めつけるが誰にも相手されず、みじめになりぬるつく手で扱く。

（どうして私がこのような行為を）

フィオナのため。わかつてはいるが、どうして——と思ってしまう。

ぎこちない手つきが逆に彼らを興奮させる。血管や張り出したカカリを白魚のような手で摩擦し、滾る剛直は上下動に硬さを増してびくんと跳ね、暴れる陰茎を柔らかな手指で扱き立てた。

虚無感が込み上げる。敵に犯されるのは騎士のプライドが許さないが、敵に奉仕するのは騎士としても女としても、尊厳が踏みまじられる。

（熱いペニスを手の中で暴れて、こんなところで私は何をしているんだ）

にちゃ、にち。粘つくいやらしい音を奏でる剛直に、思わず耳を塞ぎたくなつたが、両手で上下に擦っていは

それも叶わない。

手のひらで亀頭や鈴口を撫でさせられ、先走り液により滑る手で、硬く灼熱の肉脬を扱く。

この不気味な液体が髪に張りついていると思うと、いたたまれなくなる。いつだったか、まだお菓子を持っていた頃、フィオナに褒められた自慢の髪が穢されていく。我慢汁を塗りつけ、恥垢がこびりつき、汚臭をなすりつける。四本の肉棒が巻きつけられ、性欲の捌け口となる。

毛先を束ねて亀頭をくすぐったり、恥垢を掃いてこそぎ取ったり、さまざまに興味趣向でもって好き勝手に弄ばれた。

「ねえもつと興奮させてよ」

髪への嫌がり方に感じるモノがあつたのか、前髪を挿んで肉棒と離され、サーシャに卑猥な言葉を強要される。

「んじゅ。私の髪で、え……い、淫乱な私にもつとおチ●ポの……臭いにおい、なすりつけて汚してください」

憎い。この女たちが心底憎い。

憎悪が胸の内を増幅するが、それだけでは足りない。未だに漂わせている媚薬の効果、じわりじわりと女体を蝕む。

（憎い、のに。媚薬のせいでは手が、口が勝手に動いて離せない）

このまま流されてはいけないという思いと、肉悦への飢えが闘ぎあう。

地面に捨てられたクラウソラスは目の前、じつと勝機の訪れを待つ。

そんなことを考えていると、サーシ

ヤにもつと激しくしなさいと言われ、ぐぼつぐぼん。ぐぼつ。

「うえあ、あつぷ。んじゅずず」

奥まで啜え込み、可憐な唇で怒張を扱き立てる。イセリア英雄公国一の騎士とは思えない、はしたない淫音をかき鳴らして口唇奉仕に励む。

「みつともない顔ねえ、鼻の下伸ばして下品なこと。まるで娼婦ね」

（くそお。男に媚びる行為など、私は何て不様で無力なんだ）

男に奉仕など今までの経験がなく、犯された時と同等の屈辱で、己の無力さに打ちひしがれる。

頬を窄めて吸引、そのまま顔を上下に振り、絶世の美貌に鼻の下を伸ばした卑猥さが混じる。ピキ、ピキと血管が浮き肉脬も脈動して漲り猛る。

媚薬の効果早く終わらせたいだけか、鼻息荒くして男根にむしゃぶりつくセリリーヌ。

嫌な汗や脂汗とともに発情した汗が浮き、下穿きの中が蒸れ、服が肌張りつき身体がラインに沿う。肥大した乳頭が浮き出るが、幸いにも鏡が邪魔で誰にも気づかれていない。

（んっ、ひや、あ乳首が。胸当てと擦れて痺れる）

甘悦が僅かに流れる、だがそれだけもどかしいほどに焦れたい。ナゼ彼らほどこも触れてこないのか。

「物欲しそうな顔しなさいの」

「そつ、ふおんなはおひてない！」

ニヤニヤと笑う女を慌てて睨むが、

カーアツと頬に朱がさし、口に唾えながらでは迫力など微塵もない。女と目を合わせぬよう口淫に集中し、顔の上下動を速くした。

「じゅるるる。ずぞぞ、ずじゅっつぷ。ふふおくてくひら、はやふらしえ。じゅつぷじゅつぷじゅぶ」

「んはあ、臭い。しょっぱい体液がどんどん出てくる。くうつまた大きくなって硬さも、うあ、暴れるなっこの」

硬さや大きき、体積を増して口の中で暴れ始め、びくんとたうつ胴幹に舌を絡めて舐り擦過する。

「あぐ、ヤベエ出そうだ」
「出すだと、ふぎ、けるなっこの。やめる、ぐううつくそ、くそ！」

ペニスを口から出そうとしたのだが、後頭部を押さえられて吐き出せず、いやいやと頭を振るが今度はしつかりと固定されてしまう。荒々しく腰を振って口を犯され、唾液に濡れた剛直が高速でぐぐり舌を焼いて脳を揺らした。

「んぶぶ、ぶぶえあ」
（くうっ息苦し、酸素が欲しい。だがうっぶ激しくて、逃げられない、息が）

乱暴かつ強引なピストンで、表情に苦悶の色が滲み、ががつがつ咽奥を犯され唇が捲れる。

「オラア食らえ！」

ずるるっ引き抜かれた。ピピルルルルルルル！

青い前髪や、筋の通った鼻や口。整った顔だけでなく胸当てにも白濁液がかかけられ、騎士の誇りが汚された。

異臭が鼻腔を抜け、青臭さやイカ臭さで嗅覚が麻痺する。ベとベとに滑る精液が肌に染み込む気がしてならないのに、射精にじゅわりと蜜が湧き、下穿きに染みを作った。

「くしゃいいいい。あ、うあ汚い、顔がぬるぬる……つ。鍧は騎士を守る大切な武具、なのに」

（鍧にかけるなんて。くあつ射精で濡れ……？ 感じたのか？）

髪で扱っていた手が速くなり、一斉に速度が増し引つ張られる。

「こつちも出すぞ」
「イセリア一の騎士様を俺のチポ汁で汚してやる！」

びゅううううぶびゅるるるるるる！
「痛つ、やつ出すな。髪があああ、髪が……ああつ」

精力剤で増幅された精液がロイヤルブルーの美しい髪を穢す。四本もの怒張から放たれ白濁に染まり、腰まで届く絹のような髪がベとベとで台なし。

残滓までも塗り込められ、髪でペニスを拭われる汚辱に心が軋む。
髪を穢されながらも扱き続けた両手は、我慢汁で粘ついていた。

「へへっ、んじゃそろそろ」
ふたりはなぜか手から離れ、自分で扱き始めた。小首を傾げ見守る彼女の両手を、背中できつく拘束される。

彼らが向いた先に愛劍のクラウソラス。まさか——気丈な女騎士だが血の気が引き青ざめる。

「剣は騎士の命だぞ！ やめる、やめろ——！！」

絶叫と同時に、どばっどばつと大量のスベルマが漆黒の剣にぶつかけられ白濁と斑に染まる。

「ああああああああ！ 貴様ら殺す、絶対！ 殺す！」

殺氣、怒氣、憎しみを乗せて咆哮し、振り解こうと暴れる。気圧され一歩二歩と後ずさる兵士たち、拘束している兵も恐怖に顔が引き曇っている。

「貴方たちがしつかり拘束してたら殺されないわよお」
彼らは主の一言で立ち直る。

「殺す前に綺麗にしてもらわないとねえ。ザーメンの付着した剣で殺されるなんて嫌あよ」
「ぶっ。それもそうだ」

関節を極められて振り解けずに息だけが上がり、より媚薬を吸い込む。
「ほおら、さつさとザーメン舐めなさい」

（敵の汚い体液を舐める……だと。でも、でもクラウソラスが）
恐る恐る顔を近づけ、黒剣に降り注いだスベルマを舐め、びちやびちや犬の真似をして舐め取る。

（不味い、舌がピリピリする。でもクラウソラスは騎士の命、いや私の大切な相棒なんだ、綺麗にしないと）

ともに戦ってきた相棒の無残な姿に心を痛める。

「暖らないとなくなないわよ」
ゼリーのよう濃厚なものと、液体のが混ざり色も黄白濁で気色悪い。

ずず、ずずず。音を立てて汚液を嘔り、劍の表面に口をつけ頬を窄めて吸い上げる。またなすりつけられるのを恐れ、口内の汚液は咽を鳴らして飲む。

塩辛く粘度の高い精液が食道にまわりつき、舌が痺れてイカ臭さが口に広がり、嫌悪一色に染まる。

どす黒い感情がどろどろ腹の底に溜まっていく。
（苦くて……しょっぱい。くうう何て濃さだ、咽にへばりついて。量も多く飲んでみきれない）

「どう、美味しいかしら？」
適当にこくりと頷くが、帝国の長姫はそれでは満足しなかった。

「返事をなさい、美味しいなら笑顔で言えるわよね？」
「……は、い。お、美味しいです」

（どれだけ、どれだけ辱めれば気が済むんだこの女は）
ぎこちなく歪な笑みを浮かべ、美女に媚びて再開する。

不様な姿を晒して嘔っていく。と、「ふぎつ」

頭を踏みつけられ白濁の池で溺れ顔が汚液に塗れる。踏みつけたサーシャは哄笑し、高らかに嗤う。

「ああ。あつはははははははははははははは。あつはははははははははははははね。あー、ああ濡れてさちやつた」

狂った悦びに身を振り回れるサーシャは、狂気と艶めかしさの入り混じる笑みを浮かべた。



胃を白濁液で満たして、ようやくと輝きを取り戻したクラウソラス、その頃には黒い霧が森に立ち込めていた。

「黒い、霧？ 人工的な、魔法の霧か」
「これからが本番よお。この黒き霧の呪法プロウミストを吸い込んだ男に絶頂させられた女性に能力を、体力と魔力を吸われて無力化されるの」

「な、何だ?!」
「無力化して連れて帰ってから、たっぷり苛めてあげる」

「へへ、口マンコだけじゃなく、こっちもいだけくぜ」

四つん這いのまま拘束された彼女は身を震わせ、白を基調としたアリーナドレス、そのスカートを脱がされる。

「やめろっ見るな」

「なあに、もう染みができてるじゃない。フェエラで感じたの?」

「ふざけるな、誰が感じるものか」
「素直じゃないわねえ。見てたわよお、さつきもじもじしてたでしよ」

ギリと表情が凍りつき、身体が強張った隙に、兵士にずるんとショーツも脱がされる。太腿まで下ろされた白く地味なショーツと、陰部とが煌めく愛液の粘糸で繋がる。

「キスだけでなく、純潔までこいつに奪われるのか?! い、や、嫌だ!」

レッドサイクロプスの効果でまだまだいきり勃つ陰茎を、膣前庭に擦りつけられた。手足をばたかせ身体を捻り足掻くが、拘束は緩まない。大陰唇をなぞり恥汗を肉勃起になす

りつけ、柔らかな肉土手がベニスの熱にあてられ溶けそう。嫌だ嫌だと首を振り恐怖を、行為を拒絶した。

「ずぶ、ずぶとゆっくり膣内に入っていく肉棒——すると薄い膜に当たると」

「おいおい処女だったのか?! こいつあいい。んじや」

「お待ちなさい」

いざ、といったところで待ったの声がかかる。

意外にもサーシャだった。

「ウォルガードが彼女にご執心なのよねえ。恩を売っておくのも悪くないわねえ。ふふ、というわけだから処女は諦めて、アヌスだけにしてくれるかしら」

こくりと頷いた男は、愛液と唾液に濡れた陰茎を上を窄まりに宛てがう。

「純潔だけは免れた……のか?」

お尻に挿入されるなんてつ

安堵するものの危機は続き、色素沈着の薄い菊座に、亀頭が侵入し小さな穴がこじ開けられる。誰にも見られない、桃色の蕾が開き皺が伸びる。

メリ、メリ。ギリツムリムリムリ!

「いざっひい。痛——くないい、そんなバカな!!」

「この女すんなり入りやがった、慣れてやがるのか? まさか公国の騎士様がアナル好きの変態とはな」

「そんなわけないだろっ」

逞しい肉槍がギリギリに詰まり拡張して押し入り、強引な侵入に激痛が——と思ったのに痛みはさほどない。

混乱極まる女騎士を勢いよく貫く。

「かひっ……ッ」

衝撃に息が詰まる、がそれ以上に甘い電流が全身に駆け巡る。異常な性感の正体は媚薬。未だ嗅ぎ続けている媚薬に女体は感度が高まり、敏感に研ぎ澄まされていた。

「媚薬漬けにされてるのに、疼く場所を触ってもらえず、焦らされ続けた身体はどう?」

秘部や胸を触られず鋭敏になり果てた身体の変容は、したり顔のサーシャに理解できたが危機に変わりない。

入口までずるずる引き戻されると、肛門が捲かれて喪失感に胸が痛み、陰茎を肉壁が締めつけた。ぐぶんつとえぐり髪を削られて快感が溢れる。

「こ、れえ……身体が鋭敏になつてる」

ゴリゴリ、ゴリゴリと。腸壁を削られる音が脳内で立体的に響く。桃尻に手を置かれ、すべらかな肌は発情と発汗によつてしっとり吸いつく。煮え滾る肉槍が直腸で暴れ回り、快感の細波が次から次へと押し寄せた。

「何てアナルだ。こんな名器知らねえぞ。髪がチンポに吸いつきやがる」

——にちゃあ。

触れてもいないヴァギナから女蜜が滴り、早く弄ってくれと泣いているみたいで羞恥に体温が上昇した。

熱く猛る肉槍が穿ち、焦らされていた女体が快楽を貪欲に吸収する。太く長い肉の槍に髪が絡みつき、抽送に合わせて蠕動しすがりつく。

「んはア。だめだ太いのが、出たり入ったり……ああおう」

（感じすぎて、お尻がおかしい。ベニスの熱で腸が溶けてしまっそう。う、ああお尻の穴が捲れてるっ）

うねうね蠢く肉の壁。腸が異物を排除しようとする蠕動するのだが、荒々しい抽送で穿られ、髪をこそぐピストンに肛門が刻まれていく。一突き一突きが重く、全身に衝撃が伝わり身体が揺れる。

「かはっひっいん。あ、あはあ——ん

んんん、ひぐ」
もれる嬌声を止めようと口を塞ぐが、貫かれすぐに開いてしまう。

「んむむう」
それでも懸命に閉じるセリィヌ。

「ふふ、粘るわねえ。正直に欲しいって言ったら?」

「いらぬい! いるわけないだろっ」
「あら、そう? いらぬいみたいだから止めてあげなさい」

主の命令に男は腰の動きを、最奥に挿入したまま止めると、柔髪が蠢き勝手にベニスにしがみつくと。腸液がじゅわあと湧き、肉棒に絡み体内で存在感だけが増していき、眉根が寄り悩ましい表情を晒し悩乱する。

「ミリたりとも動かない腰に焦れ、お尻を振りたくって快楽を喰りたい。媚薬で上書きされた本能を力づくで止め、お尻が筋収縮でぶるぶる震える。」

「動かして欲しいんじやない? アナルもマコもびくびくしてるわよ」

「動かして欲しいんじやない? アナルもマコもびくびくしてるわよ」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>